

● HAIKU200305sono2

広前に櫛芽吹き金色相  
若葉風轟と起つなり広廂  
緑陰のくぐもり鳴きにわだかまり  
沢奏で聞き耳立てゝ水芭蕉  
渡り蟹甘藻の林はすかひに  
金魚田の写真入り記事月替る  
竹落葉変らず昔どりの道  
延々と竹垣が伸び今年竹  
古きよき時代の垣花ねずみもち  
晩春の手にとりてみる湯呑みの絵  
新茶なみなみ注ぎていつもの日の始まり  
同じ日の一つとてなし初燕  
水羊羹匙ひやひやと使ひけり  
葱坊主変りばえせぬ崎の景  
要領のおぼつかなくて菊挿芽  
朝の虫櫛若葉の間飛べり  
朝の鳥櫛若葉の枝替えて  
渡り蟹母枝より見ゆ甘藻の海  
貝殻を敷込む家のカーネーション  
ともかくも昔はよかった銭葵  
棕櫚の花小路の家並みつつましく  
蝸牛雨に肥りてぼったりと  
通園の黄色のブーツでんでんむし  
一吹きに櫛若葉の黄金波  
花棕櫚の金色相を敬へり  
夏立つ日赤鉛筆を削らんと  
仕立船沖へと向ふ新樹光  
鉛筆の削屑反り夏に入る  
朔日の堂へ吹き込む青葉風  
葱坊主昼餉支度をして出かけ  
花桐の素っ気なき季了りけり  
芍薬の一念三千想ひ玉  
樟の花八幡神社鎮めけり  
雷（いかづち）に出し抜かれたる急ぎ道  
降り方も遠回しなる花空木  
ニセアカシアみどりの雨滴浴びせけり  
植田村帰化亀駆除に一騒動  
櫛の洞暫し覗いて緑陰去る  
初燕風吹き抜ける街をゆく

よく歩き燕見し街暮れるなり  
朝の蛾のかぶさる露の葉の一つ  
ばかり泛き絵になる港の春かもめ  
緑陰に未練残して去る素振り  
宵の酒三社祭の映像に  
角刈りの舁き手匂へり三社祭  
通院の雨に白増す樟の花  
さくらんぼ抓めり言葉の器より  
石畳雨癖つきし樟散りて  
緑陰に入りて得るものあるごとし  
樟の花同士ささめく風ありぬ  
緑陰のくぐもり鳴きの中に入る  
露の葉にありし雨粒風に干ぬ  
人ごこち一寸冷え込む日の甘酒  
木菟居付く森の日に日に深青葉  
植田水上州の空透けるなり  
たかんなのによきつと日光街道脇  
根ン詰める仕事の合間麦茶かな  
男梅雨おろかに肥ゆる榊大樹  
梅雨早々大河に濁り兆し初め  
鉄橋の赤押し渡る梅雨車輛  
葛若葉高速車両音吸へり  
植田村うすぼんやりと靄かかり  
櫛若葉幹濡れ通す雨ありぬ  
ひめじよおん朝方雨の降ったきり  
町村合併成るや成らずや麦の秋  
いないいないバアを決め込む梅雨入富士  
明け方のかたばみの葉に雨滴跳ね  
柘植の花小雨きりなく降るものよ  
マグドナルド梅雨早々の傘曇み  
緑さす窓を雨滴の徒競走  
梅雨の玻璃阿弥陀籤めく雨滴かな  
川幅をゆったりと持し梅雨大河  
梅雨の渋滞テールランプの赤赤赤  
梅雨の遊覧バスゆく東京ど真ん中  
梅雨の傘駅から続き陸橋へ  
うち曇る窓に雨滴の銀河系  
緑の雨ばやけ通しのバス車窓  
父の日の昼をふんばつ勝烈庵  
黄楊の花葉叢に吸はる雨細か

大緑陰蔽ふ参道雨幽し  
月曜日雨の臯月がうすぼんやり  
横浜駅西口梅雨のアンブレラ  
横浜駅西口つつじ明りせり  
夏つばき雨の週末来たりけり  
これといふ庭木無き家大でまり  
街路樹として花掲ぐ山法師  
ほてい草昼の雨打つ四辺かな  
萍をひっくり返しゆく大雨  
泰山木葉の勁かれと大雨あり  
神輿倉昼も灯す青しぐれ  
鳩も目をくりくりさせぬ青あらし  
でんでん虫雨が当りて角曲げぬ  
昼蛙愚の骨頂と啼きにけり  
雨のあと薔薇壊す風ありにけり  
ハンカチをすこし余分に旅支度  
山の藤ほほうとバスの右左  
山藤の昇竜天を指しにけり  
目に泛かぶ水木の花の咲き具合  
水木咲く建てゝは廢るひとの家  
若葉せる山に面して一軒宿  
落人村十二単の花ざかり  
山藤の下堰ありて水すだれ  
山藤の花の散り込む魚道あり  
藤の花見つゝ歩けば山展け  
山吹の花が正面土間明り  
溪流音何處ぞよりする余花明り  
若楓扇面撓め吹く風ぞ  
廢校の小学校の芝桜  
沢音の立ち昇る谿朴若葉  
巢燕のひっそり通ふまたぎ村  
わらび干す婆に又もや合へる村  
湯けむりのちらりほらりと若葉谿  
分け入りて鬼怒の奥山藤の花  
花くるみ黙って山に入るべし  
若葉影湯壺に素(しろ)き肢体かな  
夕河鹿相聞の情募らせて  
河鹿声付きの露天の湯でありぬ  
河鹿ごゑもの狂ほしげな夕間暮  
河鹿啼き清流は又朝迎え

分け入りし山ならではの一新樹  
おぞらを広く使ひて一新樹  
新樹山落人此処を目指し来し  
ニュートリノ達してをらむ新樹山  
ニュートリノ天網を抜け新樹山  
庭園の目を引くところ敦盛草  
敦盛草母衣らしきもの抱え初め  
上溝桜(うわみずざくら)花をほのぼの魚  
道のうへ  
ひめじよおん平家ここまで落ち延びし  
湯に浸り頬の辺りの新樹冷え  
若葉風外湯に山女のごとくゐて  
シドキラに若葉曇りの空より雨  
林間にさんざめく鳥新樹雨  
湯ぼてりの手を置く手摺り新樹冷え  
前山の新樹に吸はる昼の雨  
早起きは河鹿がいちばん山の宿  
山の宿河鹿のこゑによき目覚め  
新樹山まのあたりにし朴探す  
遠山の新樹が見事大玻璃戸  
旅先の髯を剃らねば新樹冷え  
山峡に朴抽んづる新樹晴れ  
新樹をば見倣ひすつくと杉菜かな  
新樹山臨みてアイスマルクかな  
栗山村霽れてほこほこ新樹かな  
新樹晴れホテルロビーの大玻璃戸  
宿木も新樹明りに包まれて  
新樹山白雲移り易きかな  
早発ちの山見て若葉曇りかな  
出湯出づ脛のすうすう新樹冷え  
山女釣荒くれ岩をひよいひよいと  
河鹿ごゑ聞きつつ寐落つ耳法楽  
新樹晴れ朝日は宿の裏手より  
新樹の香たっぷり吸ひて梢の鳥  
鈴蘭を一つ瞬きして見遣る  
山家の昼ひっそりとして干しわらび  
一軒宿家人出払ひ桐の花  
山の昼婆の干しゐる遅わらび  
釣人の魚籠のひよこひよこ新樹谿  
手に受けてこんな筈では新樹雨

一行の瞬き仰ぐ新樹雨  
山径は日当りながら新樹雨  
山径を降らるるままに新樹雨  
山中に逃げ場など無き新樹雨  
新樹雨搏ちて山菜直売所  
橋あれば藤の花あり仰ぎをり  
顔に来る虫払ひつゝ新樹山  
身の内の門外れ若葉の湯  
新樹山土産に山の霊水も  
新樹雨顔にぼつんとあとばらばら  
日に透きて桂の円葉新樹荘  
山藤の今盛りなり人造湖  
翠巒の風伴ひて若葉雨  
河鹿ごゑ眠気ごころを誘ひけり  
老鶯と野鳥に頓と疎きひと  
鳥ごゑの語尻尻上り新樹山  
河原石皚々天より下り藤  
山女釣藤こぼれ散る岩を跳ぶ  
新樹雨山の天気は計られず  
藤見事見事とぞごゑ車中より  
山の径こままでとしぬ若葉寒む  
目覚めしはホテルのベット若葉どき  
山の子の登校肩に若葉影  
花あけび引率の子は上級生  
振り仰ぐ百段の礎著莪の花  
蜂の巢の隣に去年の燕の巢  
山の子の挨拶はよき若葉どき  
もうろくの足マッサージして浴衣  
術痕の湯に透きとほり新樹影  
山の湯の宿の目覚めは河鹿にて  
浴衣着て糖尿予備軍酒談義  
芝桜岩の温みを頒たれて  
どんぐりの実生の若葉社裏  
山の湯が利いて快眠かじか宿  
山女ある川と指さす若葉谿  
新樹晴れ山から降りて次の宿  
老鶯のごゑの筒抜け共同湯  
若葉して川音逸る共同湯  
湯西川小学校の花通草  
溪流釣新樹のかほり立つ谿に

新樹風湯ぼてりの頬撫でゆけり  
湯西川登るにつれて新樹もゆ  
境内に実生の櫟若葉どき  
新樹山歩き廻りし足の筋  
林間に鳥声響く新樹荘  
新樹高しいつまでもある鳥の向き  
まのあたり朝日が当る新樹山  
山峡の燕巢造りこれからよ  
誰よりも早く目が覚め河鹿宿  
奥鬼怒の山深まりて遅桜  
山峡の広きを馳せるつばくらめ  
新緑の此岸に村はかたまりて  
宿一步出て新緑に目を細む  
山吹のここより奥は入れません  
山吹や沢鳴りのする観音堂  
山里の梅雨前にして天南星  
露天湯に立てば頭上を青嵐  
新緑の押し寄せてゐる一山村  
山歩き心のこりの天南星  
畑の蛾の翅ふるふると山の昼  
花通草物音一つたてぬ村  
栃七葉山の天気恵まれて  
桐の咲く民宿で売る遊魚券  
岩魚の瀬すこし上ミ手に山女の瀬  
夕河鹿聞き惜しみつゝ腰上げぬ  
この谿に三軒ばかりかじか宿  
露を過ぐスクールバスの空車  
夕晴れをつくづく燕の山にゐて  
過疎村のたんぼの絮白暮光  
薫風に薪割り仕事またぎ村  
山吹に隠れもあらぬ山気かな  
そそのかすやうに起りて夕河鹿  
杉叢の下の清流河鹿鳴く  
河鹿ごゑ楚々とこたひは川下モより  
杉襖抜けて聞こゆる河鹿声  
河鹿笛ならむわくわく胸の内  
河鹿鳴く川原が見えて一軒宿  
山藤に透く空ありぬ栗山村  
林中のこの木が好きで鶯若葉  
湯ぼてりを覚ましゐる眼に鶯若葉

オムレツのやうな薄黄に新樹山  
湯けむりを翩翩と揚げ新樹荘  
山中の栃の実生に五月風  
湯が好きでそこでこたびも若葉どき  
旧道は細々常磐木落葉みち  
ご本堂廃れ常磐木落葉の辺  
水木咲く廃れ椎茸櫓のうへ  
河鹿ごゑ朝夕聞ける宿りかな  
竹煮草生ふて傾く沢の砂州  
栃の花谷底を這ふ溪流音  
山藤とおぼしきが垂れ向ひ山  
見納めの奥鬼怒の嶺々新樹晴れ  
またぎ村新樹新樹に囲まれて  
目の前の山の新樹の吹かれやう  
吹き起こる風に新樹が新樹押す  
新樹風一息に尾根渡る見ゆ  
虎杖の長けて川風啖ひけり  
けふの宿山菜どきの山ん中  
山降りるバス見納めの下り藤  
山降りて川治温泉藤の昼  
杉菜の墓一つ墓石が新しく  
著莪の花殖ゆるに任ず在所寺  
著莪の花寺の衰退免れず  
夏つばき寺の命運計られず  
杉落葉朽ち香本堂蝕めり  
バードウイーク森のみどりに染まるべく  
一隅に白鷺を置く植田水  
鷺が舞ひ鴉が囀す早苗どき  
代田水いまにも雨が降りさうで  
代田水いま映るもの映しをく  
むつつりと植田見て去る旅先の  
いつ降つてもよささうな空花空木  
栃青葉街道筋を往くひと無し  
桐の花見てより会津西街道  
みどりの夜押して点字の昇降機  
手拭いをかわかしてゐる若葉風  
一本の新樹かしこし老舗宿  
若葉宿朝餉野鳥のこゑ交え  
対岸より老鶯出湯はこんもり湧く  
若葉影揺るゝ出湯に野鳥聞く

赤松に新樹の栄ゆる露天風呂  
雷又雷尾根の新樹を震はせて  
若葉雨水輪愉しむ露天風呂  
雷（いかづち）は会津の方よそれつきり  
夏帽の似合ふが鳥の名をすらすら  
黒ツグミとかや櫟のあの梢  
対岸の山へ青鷗の渡る見ゆ  
落雷の頻々とよもす方会津  
板の間に落つかなぶんの硬き尻  
芍薬の青珠印を結びけり  
鈴蘭の香を攫ひけり朝の風  
たらんぼのすつくと長けて四方青嶺  
取り戻す峡の鳥ごゑ雷やむ間  
軽雷に始まり奥鬼怒ぶりの雨  
植田水揺すりて過ぐる車輛音  
風雪に朽ちし堂縁著莪のあめ  
堂縁に遅咲き牡丹在所寺  
軽雷をものともせざり峡燕  
一降りして山は墨いろ峡燕  
鈴蘭の香を雨立たす旅の朝  
鬼怒に酌む酒は末廣若葉雨  
幽明の杜の高みに藤の花  
赤旗のぼけ除け地藏蔭の雨  
烟る雨畦草刈つて日の浅き  
鎖樋伝ひて緑雨地に優し  
新緑の雨を集めて滾つ川  
コルリ来て赤松の幹秀づ宿  
山峡の宿雷に終始して  
峡燕上昇煙雨かい潜り  
立ち昇る湯けむりを巻き若葉風  
雷ごろごろ水墨の山靄襲ふ  
翠巒の千変万化松の花  
宿の蚊を閉じ籠めぬしか玻璃の内  
雨のハネびよんびよん三寸あやめかな  
気短なことありありと山の雷  
太鼓打ち閃光放ち雷様  
二ツ三ツその名を挙げて山菜摘み  
俄雨新樹の彩を奪ひけり  
緑陰を潜りて山を出づる川  
緑陰に設ふ宿の露天風呂

若葉雨朝から前山靄籠めに  
起き出せば靄を褥に新樹山  
山峡のそら折り返す夕燕  
かがんぼが玻璃に前山靄霽れず  
向ひ嶺に靄湧き消えつ峡燕  
五月川挟み諸鳥啼き交はず  
靄破り遊びごころの峡燕  
湯疲れのそこはか溜る新樹雨  
似たやうな山径つづく栃の花  
口許のほころぶ湯加減若葉どき  
露天湯の投げかくる灯に夜の新樹  
新樹雨いちにち峡に降り暮れて  
露天湯の額にぼつんと新樹雨  
湯けむりも櫟若葉ももくもくと  
山に降る雨従えて栃若葉  
雨筋の真一文字や栃若葉  
杉落葉積みて旧道絶えだえに  
杉落葉荒れし社を叩く雨  
露天湯に蛙のごとく泛かびゐて  
若葉影湯口を守る石の臺  
露天湯の葭簀を洩るる若葉雨  
河鹿鳴き山の出湯は掛け流し  
雨受けて幹の黒ずむ蔦若葉  
河鹿宿刻はゆつくり巡りけり  
カラオケはカスバの女宿浴衣  
椽若葉雨こぎみよく降り出せり  
栃の咲くこの先日光サル軍団  
新樹山連なるを容れ写生帖  
青葉谿まるまる納め写生帖  
老人のスケッチ風の新樹山  
売店に出てゐる山菜エラ・シドキ  
新緑どき言葉交はして村の婆  
すいすいと風吹く川原杉菜晴れ  
若葉風温泉街に吹き込めり  
若葉風葉騷溪谷貫けり  
揺れ合へり近くの新樹遠くの新樹  
はやばやと川原に一つ赤テント  
ピアノソロロビーに流る若葉宿  
葛の蔓踏まれびくりと動きけり  
藤落花思わず頭上仰ぎけり

川下り三艘連ね五月川  
若葉谷艚臍きしませ川下り  
山峡の燕が約す新樹晴れ  
新樹山玻璃一杯に納まれり

● HAIKU200305sono3

夏草にかにつりぐさといふがあり  
夏帽子植物園の広きに出づ  
三脚を折り畳みつゝ子鳩のこと  
親もぐり子は待ち貌の鳩  
親鳩の子に与ふもの水底草  
水垢の亀にも年季梅雨に入る  
牛蛙麩のごときを餌せり  
泳げるは日本古来の草亀とよ  
ありありと居場所が知れて牛蛙  
牛蛙喉につかえるものありや  
牛蛙啼く径震え出すごとし  
聞きをれば時折ヒクツと牛蛙  
ぐわと啼きぐわと応える牛蛙  
牛蛙人さしかかれば音の詰る  
目に余ることも鴉の子育て季  
沼五、六白金御料地跡の梅雨  
巣作りの森と鴉の咎め立て  
鳩の子の一羽後塵拝しけり  
鳩の子の入るを待つなりファインダー  
蛇去りて沼の表情取り戻す  
鳩の子の従順なるとならざると  
飯桐の雄花が降れる園のみち  
鳩の子のおいてきぼりが後を追ふ  
葭叢の中に蜻蛉の通り道  
蜻蛉の行方追ひ掛け目の運動  
この沼を往き来蜻蛉の二匹はゐる  
蜻蛉の曲る通りに沼曲り  
巡りくる蜻蛉を待つ橋ほとり  
蜻蛉の通り道あり葭の中  
梅雨の蝶埃のごとく樹々に群れ  
接吻のごときを一つ糸とんぼ  
よぎるもの風にはあらず糸とんぼ  
眼中に吾無きごとくやんま過ぐ  
のはなしやうぶ三輪一輪咲き了る  
沼底のどぜうの欠伸ならむ泡  
泳ぐ蛇見遣る戦慄抑えつゝ  
沼を吹く風に怯みぬ蠅虎  
河骨の明り稚魚にも見えをらむ  
蜻蛉ゆく弾むリズムはピチカート

十葉にも植物園の標示札  
あさぎの花沼辺の昼を深うせり  
蛇（ながむし）の唯々通り過ぐを待つ  
蛇の首立て続けにて疲れぬか  
沼の水すこしばかりが動き南風  
糸とんぼ茎に取り付くその角度  
水馬未だ埃の大きさに  
落葉樹若葉凌げり常緑樹  
あぢさゐの雫を浴びぬやうに抜け  
とうすみは瑠璃一色の針とんぼ  
羅に患者付き添ひ過ぎにけり  
診察室二十番出て梅雨の街  
一患者ふうふう云ふて扇子風  
病廊に外来患者あふれ梅雨  
梅雨の病院盗難防止の注意ごと  
病院売店にて  
商品のお出かけメイトは梅雨の杖  
退院の人にや連れと若葉に佇つ  
もうそんな頃かや屋上ビアガーデン  
柿若葉この道とるも久しぶり  
通院の都度通る径忍冬  
梅雨の採血おおせつかりぬ内科B  
ざくろ咲き通院かんかん照りの道  
病院の売店台湾バナナ置く  
新樹雨ホテルロビーの総ガラス  
馬糞海胆出回る前の紫海胆  
ぜんまいにうすうすと錆天日干し  
新樹雨四辺を打ちてまたたく間  
宿浴衣サイズ大中小とあり  
肴には鮭を利尻の昆布巻き  
山の名はどうでもよろしわらび狩  
新樹に降る真昼間の雨淋漓たり  
大粒となりて新樹を襲ふあめ  
杉菜のなか天南星を踏むまじと  
湯上りの階段朴見て中休み  
横浜と答ふ蕨を干す婆に  
新緑に弾みをつけて流る川  
せんぶりにいい値をつけてゐたる店  
長生きはするもの外湯に新樹山  
新緑に慣れたところで山降る日

いざ旅に出でむ新樹の旺ん月  
雨あがる杉菜浄土に天南星  
新樹林降り出して雨見えぬなり  
柏餅老舗菓子舗の商ひ旗  
椎匂ふ高輪協会白亜のひる  
高輪は寺とホテルとそのみどり  
椎匂ふ日吉坂上通りけり  
羅に八芳園のみどり射す  
薔薇の季青山走るオーペンカー  
薔薇の昼しづか郵便受鳴れり  
水彩の新樹は実物より淡く  
写生して山の新樹のもくもく感  
図書館は坂上常磐木落葉降る  
陸橋より槐若葉の並木見ゆ  
木缺の音単調に梅雨に入る  
強すぎる葉嚙み来て柿若葉  
葱坊主昼の献立決まらずに  
吹き起こる青嵐長洲剛の唄  
夏みかん咲く径思ひ出し通る  
アマリリスラジオのヴォリューム上げて唄  
ひと居ればそこで反転軒つばめ  
鼻先に塵くさき香の女貞  
女貞花嗅ぎては埃の匂ひとつも  
堅干しの筆りカスベエ晩酌に（カスベエは  
礼文島にてエイの呼称）  
梅雨のラジオ何かこまごまくだくだし  
賑はしの一つ商家の軒燕  
女どちむさしあぶみを怪しみぬ  
隣人の茄子植うる見ゆ垣越しに  
お隣りは鶏頭我が家は何時かむ  
屑金魚なりしが日を経て斯く太る  
斯く肥えて押しも押されもせぬ金魚  
あぢさゐの頭の見えてゐる昼餉なる  
梅雨晴れの架線工事を見て居りぬ  
冬そうびも佳いがと薔薇を前にして  
豪快に砕け散るなり紅そうび  
アマリリス音量絞ることもなく  
隅々まで見て竹秋の鬪鶏図  
廻り道する赤蟻に事情あり  
梅雨どきの木斛の葉の負ふ病ひ

十葉引きここで打切り扱て昼餉  
重宝な作務衣に十葉引きゐたり  
紐ゆるく着慣れし作務衣夏着とす  
更衣即ち着古るし作務衣かな  
愛用の紫紺の作務衣更衣  
葱坊主いつも時代のさきを見て  
葱坊主時代の外に佇つてをり  
柏餅誰にでもある佳き時代  
軒風鈴四半世紀を働き来て  
花の付き少なきつつじ野暮でなし  
大味な彩のつつじに飽き飽きす  
酒気帯びて男はさうさ神輿昇  
大正菓子ゼリービンズ抓み梅雨  
庭木無き家ばかり殖え春告鳥  
要褻正（まさ）しく其処へ日の出かな  
うすつぺらな言葉と判るポインセチア  
このところ雀見ぬ日や著我咲いて  
梅雨入りの雀は藪に臥せ居るか  
パソコンに馴れて字も雑梅雨便り  
布袋草気さくな日々を過ごしをり  
さくらんぼ狩の誘ひは大分前  
暇あればすぐ横になり古団扇  
夏物の衣類に目通す畳のうへ  
仙人掌の花勲章のごとく咲く  
奇想曲薔薇にふさはしブッチーニ  
あぢさゐののつぺらぼうとうすぼんやり  
服薬の時間緑の雨を見て  
翻車魚の肝和え春と思ふべな  
梅雨湿り芋銭の河童百図かな  
黒潮のお陰で太る豆の莢  
冷奴地震の起こるメカニズム  
かたばみのくちびる色のはなのひる  
十葉を中途半端に引く勿れ  
山茱萸の花の割には幹粗末  
承知し居る運動不足蠅生る  
孤り留守おおせつかればががんぼ来  
萍の支離滅裂か整然か  
留守居への気配り柏餅一つ  
若葉どき旅のつもりや湯に浸り  
萍に徘徊の余地ありにけり

水垢の剥がれて現るゝ田亀なり  
踏んずけてゐるのは地獄の釜の蓋  
ビール酌む礼文カスベエむしりつゝ  
何處か猫に似るところあり斑金魚（ぶちき  
んぎよ）

斑なるは猫のみならず金魚にも  
ひよいと思ひ出したる蚊帳の入り方  
変なこと覚えてゐるよ瓜の種

さらはれし金魚の鉢の布袋草

留守番はいつも昼からほてい草

鴨居見て蚊帳の吊り手の懸け方など

かたばみの花見るものの無ければ瞰る

蝻の道当てありさうで無ささうで

いぶかしみ見て過ぐ蝶の蒐まる木

緑陰の風がうましとでつぼう

晩酌のすすんで二合冷奴

カスベエの固きに閉口ぬくめ酒

破れ傘あをあを長けて走り梅雨

座禅草見るといふよりまみえけり

冷奴ひよんなことより病ひ持ち

冷やし酒吾が身おもへば二合ほど

深梅雨の布団を剥ぎて目覚めをり

東京で働きしこと吊忍

夏つばき濡らせる雨はいつか止み

春の暮根菜類を甘く煮て

取り敢えず雨を避けゐる夏木立

新樹光飛び込んでくる閲覧室

老眼と乱視ごちやませ梅雨をみる

気力失す牡丹は一目瞭然に

雨の赤つつじびんぼけ眼鏡の度

葱の芽に見られて厨に探し物

猫に金魚獲られてよりの浮かぬ日々

金魚攫ひし現場を通る斑（ぶち）の猫

風呂場にてでんでんむしの唄低く

角振りてでんでんむしは唄ふ虫

亀鳴くの亀の正字に窮しけり

いんげんの季節の三色御飯かな

葉桜の影を落とせる極楽寺

緑の雨午後も午後も予定無し

でで虫の探り直せる空の奥

刈り過ぎて仕舞はぬやうに木の葉髪  
ががんぼの其処に居ぬかと玻璃をみる  
べうべうと雨にみづいる四葩咲く  
我が身透くまでに迅雷詰め寄れり  
納豆菌掲げて健康食品売る

蕃茹に塩振りすぎとこゑありにけり

あぢさゐは作務衣の彩に染め上り

紫陽花の陰口たたく家の裏

首長の草の一つやかたばみも

十葉の梅雨鶴首して長ける丈

江戸川区金魚ガイドを取り寄せて

グラビアの風鈴に耳すましけり

金魚の糞なんぞ目当てに出掛けけり

梅雨晴れの金網だらけの養魚場

江戸川の金魚巡りとなりにけり

昼の献立冷やし素麺では如何

昼の献立冷やし素麺提案す

昼の献立考えをれば五月雨



● HAIKU200306sono1

たはむれにモンローウオーク南風のなか  
青梅雨の厨にももの煮ゆる音  
嘶家の紹にもいろいろ更衣  
蚕豆に麦酒おもへば風が吹く  
更衣甚平に二本の腕通し  
ほら見てよ薔薇が奇麗よあんだ達  
子供用甚平寝巻替りにも  
鳥雲に浮草暮し永かりき  
薄暑の坂自転車がゆく三段ギア  
帷咲いてむっとするなか狸穴坂（まみあな  
ざか）  
風通るところでお茶など葛ざくら  
水羊羹切って二つの直方体  
ちやつかりと汗干す冷凍コーナーに  
お達者でと投げかく言葉大南風に  
百円シヨップ香糞袋に虫籠も  
ぐらぐらと皐月の水を沸かしをり  
朝から沸かす麦湯のための水  
双蝶はいつも若々しく飛べり  
歳時記を繰りをり薫風抜ける部屋  
草むしり日差しが強くなって来ぬ  
一人（いちにん）の家居ぼんやり皐月どき  
日替りの五月の雨とそよ吹く風  
屑籠は大きめが佳し夏はじめ  
三夏その首夏告げわたる風なりけり  
ものの影日に日にしるく路地夏場  
冷えし緑茶こくりのみほし夏机  
用足して丸善に寄る東京首夏  
運賃は前払ひなるバス薄暑  
十葉の無風なるとき戦ぐとき  
麦茶沸かす刻が巡って来たりけり  
草々の容をなぞり夏の蝶  
夏蝶飛び辺り白黒映画の景  
椎に夏蝶はたきをかけてゐるごとし  
双蝶ときに個別に振舞ふときもあり  
夏蝶を風吹き消しし後の景  
重宝なティッシュペーパー机辺の夏  
蛇口より水迸る夏近し  
水のんで緑陰の風吹ける中

夏蝶のひらめくごとく一案得る  
鳴子百合風に鳴らねば憂しとみる  
黒揚羽すと消え飛石あるばかり  
探し物蟻が厨に来てゐたる  
作務衣よりズボン重たき夏と知る  
久々履くズボンもたつく薄暑かな  
こんなにもベルト重たき夏ズボン  
ハンカチはたしなみのうち忍ばせぬ  
ハンカチの替りに手拭い作務衣召す  
吾が寝相知る由もなし団扇風  
籠枕畳に据えてさあ昼寝  
籠枕眼をばちばちとさせぬしが  
父の日の貰ひものなり籠枕  
河骨は葉と葉の合間沼の昼  
水上に蛇乗り出してかへりみず  
蛇（くちなわ）を滑り込ませて沼無風  
すすむ胴水に密着させ蛇  
沼渡る蛇全長を見せにけり  
蛇の舌まざと脳裡の刻まれぬ  
蛇よぎる水脈須臾にして跡かたなし  
水上を突き進む蛇不敵なり  
ねむの花仰げる空となりにけり  
風船に描かれし顔あんぱんまん  
風船を抱え二階へ女の子  
二階にも転がる風船階下にも  
もう飽きて見むきもされぬ青風船  
すぐ飽きる風船遊び雨のひる  
風船を持ち歩く孫家巡り  
と或る夜の網戸の外に金亀虫  
水じゃあじゃあ手当り次第水撒く子  
ままごとの風船椅子に座らせて  
新品の網戸擦り抜け来たるかぜ  
新しき網戸が風を迎えけり  
横顔に網戸の風が当りをり  
風だけを通す網戸に夜の更けぬ  
菟まつて軍団めけり水馬  
漂ふは川面の塵か水馬  
生れたての埃程なるみづすまし  
梅雨晴れてラジオのあわて床屋かな  
六月のピザ生地寝かす雨の昼

長生きと云へば平板桃を召す  
水は天そのまま映し未草  
曇る空まるまる映り未草  
六月の作務衣に通す素手素足  
梅雨の電話鼻息荒くつけるは孫  
引っぱれば飛び出すティッシュ迎え梅雨  
引き抜けばティッシュ空っぽ六月尽  
梅雨雀見詰められをり木下闇  
降りざまの模糊として梅雨疑ひなし  
ががんぼの雨に追はれて玻璃にくる  
玻璃せせる蚊の姥車軸を流す雨  
椎若葉生白き雲沸かせをり  
飛んで来て砂粒の入る浜昼顔  
落とさぬやう心し枇杷を啜りけり  
サイダーの大きなげっぷ曇めける  
気前よく散る花ありて夏つばき  
こだはりも無く散る雨の沙羅のはな  
忍冬の花首もげて雨ここだく  
あぢさゐの彩を抜かれて素っ気なし  
錦木の若葉つくづく眺めたり  
彩の載るあぢさゐに顔のみけり  
細工ものこまごま梅雨の壇の中  
泰山木仰ぐ美空となりけり  
震源はやませ生み継ぐ太平洋  
夕立のそのたまさかに苗倒る  
緑立つ明治憲法草せし地  
なめくじらゐてもよさそな鉢返す  
たまに引く箆筒脳使はざり  
著莪の花よいしよと佇てばめくらめり  
登る蟻地を歩む蟻建長寺  
河骨の明りを落とす水瘦せぬ  
延齡草見つけし人の側に寄る  
当て込まれしぶしぶ露を剥くことに  
酒の名は末廣若葉宿に酌む  
蝸牛雨は上がれど風残る  
受給年金まとめてなんぼ亀鳴けり  
斑雪山遠くに置きて水芭蕉  
水芭蕉疎林を抜けてながる川  
中七の後が出て来ぬかもじ草  
髻草あたま空転するばかり

百寿翁顔を和ませさくらんぼ  
変哲無き雑草（あらくさ）にして草の王  
ざざ降りに根を洗はるる蛆の著莪  
もう怖くないぞと寄れるまむし草  
月山の山毛櫨の根開きの始まれり（根開き  
とは樹木の周りの雪解けのこと）  
風流のつり糸垂れて浦島草  
朝食をとりつゝ赤潮ありしこと  
蟹の眼を濡らして挙がる潮けむり  
梅雨を来て集金現金は持ち合はせず  
こ奴めとお仕置き貰ふ藪からし  
著莪の雨馬穴をひっくり返したやう  
長男の髯面むさし子供の日  
油虫手を施すも出るには出る  
槐咲く樹下に三田線地下出口  
慣性のなすまま滑る真鴨の子  
箸洗ふ水のざぶざぶ梅雨の底  
天道虫サンバ踊ればカーニバル  
サーカスの一員七星天道虫  
手に当てて切れ味試す鋸草  
浜昼顔この浜歩くしかないか  
螢の数問い合はせれば昨夜三頭  
大仰な螢の数のかぞえ方  
古池の亀の出奔竹の秋  
ことし未だ見ぬほうたるを見にゆかむ  
穴太積の坂本に降る青しぐれ  
ざりがにが爛れて畦の穴っぽこ  
大井川渡りざりがに捕り帰る  
鯰に逢ふ旅なんぞ又してみたし  
脳にくる辛さこれこれ夏大根  
花木苺島巡る道狭め咲く  
葎切の啼き放題に田のぬるむ  
螢袋見たくてどんどん歩く道  
文字摺草これからまみゆ阿弥陀さま  
気に入って其処退き難き文字摺草  
青芝の家を羨しとみて過ぐる  
駒草を囲ふ鎖の霧雫  
こんな日は割箸割いて心太  
もやもやを吹っ切るための心太  
黒梅雨の蝗の佃煮つまみけり

佃煮の蝗の貌もつくづく梅雨  
病葉のニス刷くやうなつるつる感  
守宮出る頃の階段脇の壁  
図書館へ通ず小径の夏落葉  
真昼間の私道に止まる梅雨の蝶  
むべの花降られて乾く庭の径  
築地塀越え躍り込む黒揚羽  
翠巒の風一薙ぎに黒揚羽  
花空木土塀わらわら土零す  
六月一日空はと見ればうす曇り  
むんむんと赤土蒸すや竹煮草  
掻き揚げの衣透く彩夏は来ぬ  
物腰のなべて控え目青やなぎ  
ダチュラの葉だらんと梅雨のあがるを待つ  
ういなもの浜昼顔の薄化粧  
十葉も持葉も殖ゆる梅雨はじめ  
その向きを足もて直す夏布団  
頃合いの値段と買へるさくらんぼ  
梅雨黄傘長靴覗かせ歩める子  
梅雨の傘二つ前ゆく小さき傘  
梅雨の傘廻しあの子は傘の内  
青梅雨に園児さす傘菌めく  
判らねば其にしておかう四十雀  
雨止むはいっとき烟る杉菜原  
縁の無き花の一つよ鉄線花  
追浜（おつばま）の航空基地跡紫蘭咲く  
間延びせるこゑも交えて巢立鳥  
水虫に好かれずに来しこの素足  
吹き寄せる風を払へり若楓  
寺男むつつり臯月刈り始め  
かたつむりどうしてゐるか豪雨のあと  
雨の日はしり蚊一つかまひに来る  
樹脂に透く六月の雨きよらなり  
頤（おとがい）をぬっと近づけ額の花

● HAIKU200306sono2

ぼつつんがぼつぼつあぢさゐ濡れ始む  
あぢさゐを間近の海を濡らし雨  
あぢさゐを濡らして海に及ぶ雨  
あぢさゐのいとういういし美容院  
あぢさゐのほとりより発つ雨の音  
あぢさゐのほんたうの色まとふ頃  
書き付けて梅雨の一句の雨湿り  
山中の百合の荅を搏ちてあめ  
すいかづら潮風絶えし貝殻みち  
大穴を開けし毛虫が其処にをり  
一人ゆく山路浦島草は実に  
孤り入る端山浦島草の青實  
山百合の葉の薄光り梅雨くるか  
曇日の山を登れる蟻も亦  
藪つ蚊の馴れ馴れしきが蹤いてくる  
雨叩く山路をよぎる大みみず  
病葉を踏みて山中抜ける道  
病葉の折々降れる山路ゆく  
婆が負ひまひまひつぶりめくりユック  
荅いよいよ重く山百合つんのめる  
山百合のいやに重たきそのつぼみ  
ひよろひよろの山百合荅つけ路肩  
青梅雨の頃来て葉山一色に  
館員に尋ねてウミゾウメンのこと  
でで虫に葉山一円青しぐれ  
青梅雨のことさら葉山一色町  
雨の日の葉山紫陽花初々し  
突つ走る白帆浜木綿並めるうへ  
岩礁の底まで晴れてウミウチワ  
揉まれては夏潮透けりウミウチワ  
夏潮に透くウミウチワ五、六枚  
葉山沖わたるアンドンクラゲかな  
ヒザラガイ見るさえ薄暑覚えけり  
ウミシダを揉む夏潮の優しさよ  
夏潮を煽るウミシダ胸の透く  
鑑摺（あぶずり）のヨット馳すなり薔薇の  
窓  
人影にあらあら動くごうな哉  
人影を察してうごくごうなかな

梅雨礁濡れて優しきヨメガサガイ  
梅雨に濡るヨメガサガイとは佳き名なり  
歩いてはならぬ貝殻ごうな也  
礁のうへ梅雨まみれなる鵜ノ足貝  
梅雨濡れのウノアシガイとは名付けたり  
岩の窪覗けば居る居るあめふらし  
横つ腹鉛筆で突くあめふらし  
アオウミウシ馬穴の底にペットめく  
原色のボディースーツに梅雨ダイバー  
ダイバーの頭の浮沈梅雨の海  
あわび採などは御法度梅雨礁  
ツブ貝を一つ採るにも漁業権  
妻の採り来しもの点検すれば  
煮て喰えぬツブ貝もどきも採って来ぬ  
水に生れ水の軽さの浮き水母  
昼月を母としくらげ生れけり  
うなばらに遊ぶ水母とプランクトン  
その華麗なること水を蹴るくらげ  
水を掻く分だけすすむ海月かな  
抱え込む水押しすすむくらげかな  
水塊を抛りてすすむ海月かな  
夕空に泰山木の花錆びて  
泰山木花を掲げて材木座  
横たへて梅雨の金目鯛（きんめ）の煮付か  
な  
梅雨払ふ笠置しづ子のよいわんわ  
梅雨の彼の日流れてゐしは東京ブリ  
これなんとかしなくちや十薬はびこる庭  
衣更へ乙女らの佇つ鎌倉駅  
ヨット見る男半袖日和かな  
あぢさゐの秘色（ひそく）天より貰ひけり  
あぢさゐの藍錆少しづつ違ふ  
毬あぢさゐ例はば写楽の役者顔  
駄金魚のふらふらせしが今日死にし  
恰好がわるき句作らう麦こがし  
ちよんまげが街練り歩く開港祭  
アイスクリーム発祥の地の開港祭  
白南風埠頭帆船ファンで賑はへり  
紫陽花公園沖に帆船現れて  
海王丸南風孕む帆を披露せり

白靴の降りくる客船ターミナル  
夏の夜の市民キャストの開化劇  
開化劇夜涼の舞踏シーンかな  
来信は梅の青梅の病院より  
昼顔やひっきりなしに車輛音  
鴨足草足許照らす稲荷みち  
葛餅屋時計持たねば時間いて  
日傘さしながら晒花舗のはな  
乳母車と車椅子逢ふ四葩の辺  
サイダーの泡たてつづけ鼻に爆づ  
蝶の翅地を擦るばかり鼓草  
いさき船横づけにして弁天屋  
釣宿の棧橋鉢もの胡瓜苗  
高榎垣亭々と梅雨降り込めり  
青歯朶と幽明頌ち稲荷堂  
ゼリーカップ底にチェリーの種残す  
ゼリー食ぶ喉元すつとしたりけり  
出足いま一つ鮎漁始まれり  
風物詩鮎解禁の報載れり  
県北の道志川（どうし）鮎釣り始まれり  
鮎釣の出足そがるゝ空のいろ  
早川に釣竿連ね鮎解禁  
釣り上げし鮎に大物小物あり  
釣り上げし鮎に形の善し悪しあり  
鮎どきの佳き風のくる酒匂川  
再生紙裏も使えば亀鳴けり  
広告のその裏使ひ梅雨のメモ  
青田中道ついてゐる無人駅  
しゃぼん玉飛んでステージお嬢の唄  
歌姫のリボン紫陽花イメージして  
紫陽花公園海はあいにく曇りゐて  
寺町の坂のアジサイ墓地のアジサイ  
官庁街あぢさゐに日の照りつける  
持して出づきのふ雨傘けふ日傘

● HAIKU200306sono3

ていねいに天草干され長方形  
珍しと枇杷味アイスクリームかな  
釣人に野暮な問い掛け梅雨を云い  
うさんくさうに釣人鯛と云ふ  
椎落葉踏み鳴らし降る岬の丘  
椎落葉何處か恐し岬の森  
半分は遊びの鱧の渚釣り  
釣具屋の親爺むつり鯛の貌  
浜昼顔花了る浜吹かれゆく  
調理法など伺いて鱧三寸  
日焼け子と砂城築き釣り合間  
釣人に大南風の囁けるもの  
この先に径無ささうで茅花の浜  
大南風真つ向に受け広額  
石鯛釣陣取る岩場危ふかり  
少年ら友達と来て鱧釣れり  
海蜷の波にころんとくつがへり  
富浦の天草路端にちらし干し  
天草採（てぐさととり）序でに引ききし鶏冠  
のり  
絵日傘を開いて浜昼顔の浜  
岬鼻の風大きかり石鯛釣  
螢袋いちめん浜へ抜ける道  
ペンションの庭のペチュニアぺちやぺちや  
咲  
立て連ね枇杷狩の旗沿道に  
防風の花を掠めて砂の音  
大南風の吹く浜鳶の独壇場  
昼からは波荒れ浜昼顔の沖  
どんづまり浜昼顔の群生地  
天草（てぐさ）採済みし息子に風呂焚く婆  
径ここに尽き捨網と浜大根  
椎若葉鳶吹き上げて岬鼻  
沿道の店頭に枇杷走りの枇杷  
浜昼顔波濤倒れて響きけり  
風に鳴るテントのほとり浜昼顔  
浜昼顔吹いて浦風無尽蔵  
釣人のぼつりぼつりと茅花の浜  
大南風に展望三百六十度

天道虫浜風待つて翔びにけり  
浜廃れ蛸壺を打つ砂っ風  
打返す波より茅花淋しけれ  
釣具屋の先に見えゐるマルバグミ  
今時は何が釣れるや浜大根  
海鳴れり浜防風のごつき実に  
浜苦菜咲いて弘法芝の中  
露地ものの枇杷遅れゐる端山蔭  
釣具屋のごたごたしてゐる蟹の昼  
露地もの枇杷狩の客乗せマイクロバス  
枇杷出荷始まる南無谷枇杷組合  
夏鶯岬の径は入り組んで  
露地栽培枇杷に上総の日が廻る  
露地栽培枇杷に夕日が満れり  
いさき船夕日を受けて横っ腹  
いつまでも枇杷の雨垂れ淫らなる  
花よりもどうせ買うならハウス枇杷  
手際よく房州団扇の窓作り  
房州団扇割竹作業はかどれり  
房州産団扇絵柄の八犬士  
あふぎみる房州団扇の軽きこと  
房州団扇布絵の肌理の細かさよ  
現八の麻張り房州団扇かな（犬飼現八）  
富浦の一足はやくハウス枇杷  
螢袋少年自然の家見え来  
売物の柄長うつわを煽りけり  
通り過ぎ富浦役場のビワマーク  
桜の実ころんころんと岬みち  
透かし百合海へ乗り出す岬大地  
枇杷狩の始まってゐる野路ハウス  
馬刀葉椎若葉鼻つく釣具店  
天草干す婆の応（いら）えの突つ慳食  
鱧釣の少年三人沖晴れたり  
釣人ととんびかなたに浜昼顔  
潮の香の満つなか泰山木ひらく  
じだらくな枇杷に日の照る浦の径  
午後からは晴れて蒸す日や枇杷畑  
上総の日露地もの枇杷に照りつける  
釣り上げしねずっぽ三匹缶からに  
空缶に梅雨ねずっぽの顎の張り

一息に上げたる竿に鱧ひらひら  
南無谷の漁港見下ろす枇杷の山  
沖を見て釣りの伴がら日傘さす  
金魚草溺るゝやうに日を浴めり  
揚舟に茅花の絮の飛んでくる  
浜木綿の葉の鈍色に釣日和  
夏つばき霽れてその珠大きくす  
枇杷に降り枇杷に上がれる浦の雨  
かなぶんはもう豆粒や海の方  
房州枇杷近くを通る電車音  
房州枇杷浦賀水道かすみけり  
浦々のその山の手の房州枇杷  
潮の香のたちこめるなか袋掛  
浦曇り枇杷は袋にひっそりと  
枇杷どきの富浦駅に降り立ちぬ  
延々と伸び枕木とひめじよおん  
内房の梅雨を危ぶむ錆枕木  
防風の咲き残りゐる浜閑散  
篠の沖数ふる程のヨットかな  
サングラス・タオルなど入れ紙バック  
遊泳禁止区域四隅の赤き旗  
ここからは視界が展げ夏帽子  
からからに紅藻の乾く南風の浜  
烏賊の骨真白きを妻素手掴み  
はつなつの蹠うれしき砂地かな  
砂に足とられて浜昼顔の浦  
中休み夏海見ゆる手摺に手  
釣人のにべ無き応(いら)えボソと梅雨  
サーファアのボディースーツの滴る黒  
内房線椎の若葉の萌えさかり  
草河豚のころんと転がる梅雨渚  
けふヨット出すには海が暗すぎる  
大き枇杷種も大きとほき出せり  
浜昼顔防風など見て小一時間  
房州枇杷海は晴れたり曇ったり  
年々に枇杷を生らせて主老ゆ  
掌にとりてどこか天草らしきもの  
脱色のからから藻屑天草か  
舟虫も懼れをなせるけふの波  
夏潮の礁退くときウミウチワ

梅雨礁襪の深きにケヤリムシ  
かへりみる吾が足跡と浜昼顔  
足跡の点々浜昼顔の浦  
足跡に足跡重ね梅雨の浜  
モーターボート然して響かぬ梅雨の海  
浜辺の石皆まるまると夏は来ぬ  
何拾うてあるく浜辺の夏帽子  
梅雨最中一人老蟹舟を揚ぐ  
蟹一家総出で梅雨の舟を揚ぐ  
梅雨のなか揚舟不漁と知られけり  
ダイバーのへたばってゐる梅雨礁  
浜昼顔馴れぬ砂地を踏み歩き  
海風のとほる浜辺にして網戸  
温暖な雨の上総にして枇杷狩  
実演の団扇作りに人だかり  
顔に風呉れて房州団扇選る  
土地柄の犬士描かる団扇売る(八犬伝)  
ムラサキウニタイドプールに身をひそめ  
浦一円浜昼顔の眺めかな  
貝殻が踏みつぶされて南風の路地  
蟻んこの遊び場となる仏足石  
あめんぼの敢て流れに逆らえる  
道の駅房州団扇商へり  
浜金谷駅の瓦に梅雨雀  
海原につばくろ放つ鋸山  
燕飛ぶ金谷が近しカーフェリー  
梅雨晴れの赤燈台背に何を釣る  
黒船の久里浜港に海月寄る  
かなづちの話などして梅雨船室  
梅雨の航救命ヴィの赤きこと  
タグボート深梅雨の水脈重々と  
梅雨の海鷗宜候(ようそろ)宜候と  
梅雨の航連れ添う鷗宜候(ようそろ)と  
梅雨どきの海とは云へど照り返し  
新じゃがの宅配も兼ね釣具店  
出荷待つ露地もの枇杷の白覆面  
浦々の上総端山の椎若葉  
梅雨の航鋸山の鋸見えて  
枇杷入りの土産あれこれ手を尽し  
道の駅売店土産の枇杷尽し

船待ちのフェリー乗り場に走りの枇杷  
枇杷出荷迎えて里の華やげり  
枇杷の里つつむ廻りの椎若葉  
かがよへる海桐の青実釣日和  
釣人の岩場にひとり青葉潮  
枇杷描き枇杷羊羹の包み紙  
店の端傷もの枇杷も売られをり  
出荷用枇杷とは別に庭の枇杷  
キャラメルを転がし転がし梅雨の航  
水母押す波一うねり二うねり  
物故欄そこへ目のゆく枇杷の頃  
久里浜は燕の黒の似合ふ町  
梅雨に入る机上に硝子の舟細工  
着始めは他人のやうに甚平着  
甚平着見て振り返る甚平着  
甚平の好さがわかつてくる齡  
甚平の紐結ふ手つき馴れてきし  
書棚の本入れ替えてみる桜桃忌  
往き交へる螢大きな方を追ふ  
十薬のここまで伸びて駐車場  
夏つばき風格のある門の家  
枇杷食うぶとときに顎骨鳴りにけり  
古池の水みどり帯びあめんぼう  
噛み当ててさざえの苦みばしる腸（わた）  
横濱の梅雨が降るなり崎陽軒  
初河鹿自慢の喉を聞かせけり  
鱧一閃それつきりかと眺めぬる  
蝸牛乾ききるにも限度あり  
毎日を気楽に気楽にかたつむり  
午前中梅雨のやつつけ仕事かな  
梅雨の鬱憑いて廻れりわが起居  
寝そべりてクイズを解ける梅雨畳  
溜息をおのづとつける梅雨机辺  
梅雨の辞書繕うてゐる雨の午後  
鉛筆を削りて梅雨の暇つぶし  
捨てるもの選り分けてゐる梅雨畳  
団扇もて起こせる風のこちよき  
団扇と辞書放つばらかしてある机辺  
手に届くところに団扇のある生活（たつき）  
深梅雨の眼鏡外して辞書を繰る

身ほとりに団扇四、五枚加はれり  
団扇出すそんな時分となりぬたり  
危うげなく水乗りこなすあめんぼう  
生命保険会社名入りの団扇なり  
東海道のぼりて梅雨のドサ廻り  
蜘蛛の囲に病葉三、四ちらし掛け  
湯上りの胸をはだけて心太  
溝浚え五六歩おきに砂の山  
長芋の千切りビールすすみけり  
その後のことはどうでも団扇風  
振り上げた拳を何處へ降ろそか墓  
気短かと知れる団扇の扇ぎ方  
柏餅大き葉つばが残りけり  
冷奴崩しては又考える  
ペデュキュアの女ヨットの沖をみる  
変はり映えしない団扇をこししも亦  
夏布団足探りして近寄せぬ  
冷奴納まりし腹撫でにけり  
赤青黄東京者のテント派手  
同じ本購ひぬしか桜桃忌  
雨上りわけても枇杷の雨傘  
やはらかき房州団扇の風の味  
プールに水たつぷりと張り小学校  
ビール乾し辺りの風がぬるくなる  
橋下のテントの中から一青年  
折り畳雨傘欠かせぬ螢狩  
必携の雨傘梅雨の岬巡り  
湯上りに団扇そろそろ欲しき頃  
脛打っていまいましきは夏机  
むらさきに湯舟に透ける梅雨の痣  
糸を垂るそばから鯊が掛かりけり  
瀧壺の底はとんでもなく深し  
砂はたきはたき落として花火了ゆ  
いまもつてご最賃があり氷店



● HAIKU200306sono4

一輪挿し十葉活けるに事欠いて  
雑草の活花教室梅雨の昼  
この蒼女郎花とは知らなんだ  
野っ原のある処にはある小判草  
長雨に割られて倒る小判草  
長雨に倒るべくして萼倒る  
食卓に一輪活ける黄かたばみ  
岬鼻は烟りて見えず一日ユリ  
駅弁の鰯の押寿し膝に載せ  
ニューベエと蛸漁の沖見渡して  
フツカケに浦の一舟蛸を突く  
枇杷古木執ねく零す雨雫  
草っ原刈られあたりの雨臭き  
雨明りして昼顔のしぼみ皺  
山梔子の鍔花雨が上がりをり  
籐の子に雨の降りぬく野島崎  
入梅のこゑ聞けば出づ初蚊とも  
入梅に紛れて出づる初蚊とも  
入梅が先か湧きくる蚊が先か  
走り蚊がせせりて何處か貧しき灯  
走り蚊の出づこと話題にして夕餉  
すれ違ふもの走り蚊でありしかな  
吾が前をゆく走り蚊に手を出さず  
くらがりに宵の走り蚊放し飼ひ  
一人居の長雨の日は蚊を朋に  
蚊のこゑの潜む寢床の足の方  
ナイターのテレビの前を蚊のよぎる  
入梅の擲つまでもなき蚊でありぬ  
しづしづとシテの如くに初蚊出づ  
目の前を藪蚊よぎれり血の騒ぐ  
走り蚊を打ち損ずとはどうしたこと  
蚊を打てる女は夜叉や血を浴ぶ掌  
さつきから目くじら立てゝはたした神  
梅雨酒場「上海帰りのリル」洩れて  
移ろひて月を覆へる梅雨白雲  
漬梅の番組などみて宵の口  
梅雨白雲月を覗かせはた覆ひ  
梅雨満月水っぱき風吹けるなり  
鱧釣ると聞くより波の色増せり

天草屑掴み浜辺に佇ちあがる  
病室の湯呑みの脇にバナナの斑  
暗め降る雨にも馴れて更衣  
長雨にやや居直りて更衣  
畳踏む足のしつとり更衣  
年金の通知受け取り更衣  
紐三つばかり結はえて更衣  
居直つてじだらくな梅雨迎えんか  
トマトに振る塩見て山妻「ああそんなに」  
トマトに振る塩目分量ちよと過ぎし  
気の利いた小皿に鰯のたたきかな  
あぢさみを剪り惜しみせず古鉢  
今戻る家人の曰く「門に墓」  
年々に出づ墓こたびは門にをり  
時の日や曜日と疎き生活（たつき）ぶり  
時の日の遅るゝ時計そのまゝに  
時の日の腹時計鳴り昼近し  
芒種の髯剃るや雨日の徒然に  
塩馴れの梅干と云ふどれ一つ  
出来悪き坊主のやうな路地の枇杷  
水の香の他に草の香螢谷  
たわわに生る庭枇杷にして味薄し  
庭植えの枇杷の甘味はこんなもの  
呑み薬麦湯をもって口直し  
庭に向くいつもの椅子より梅雨の景  
白南風につと裏返る紙の音  
語りつゝ扇ぐ団扇の裏白し  
父の日の手拭いきつく絞りけり  
管理人室の横手の枇杷たわわ  
ペチュニアにふはふは風の吹く日なり  
葬列の一団枇杷のほとり過ぐ  
ハローワーク県花の百合の咲き始め  
白粉花の葉のももこと長雨に  
正面に人を立たせる立葵  
むしむしとする日螢の出の如何（いかん）  
風絶えて団扇大いに働く日  
扇風機出す話など飛び出す日  
書き止めし句のたわい無し昼寝あと  
父の日の喉うるほすにココロラ  
父の日の背中を搔くに団扇の柄

傷み方あれこれ調べ古団扇  
生き残る術したたかに蠅の飛ぶ  
蠅帳の見当たらず世も亦佳きか  
みな清潔に蠅帳の失くなりぬ  
手に当てゝ鋸草の試し切り  
鋸草植ゑし年寄見ずなりぬ  
直ぐ崩れては形なしの入道雲  
日射病倒れし其処はジャカルタで（若き日  
の出張）  
夏痩せて拝み太郎の湯浴みなり（回想術後）  
生節や二合で足りる昼の酒  
魚好きは祖父のお陰よ夏さかな  
夏霞けふは釣れても釣れなくとも  
梅雨の頃決まって此処に悪茄子  
心太冷水もって口直し  
籐椅子のありし昔の家懐かし  
立葵歩幅緩めてそこを過ぐ  
何處からか蠅の入りくる家なりし  
椎にほふ山から飛来金亀子  
家もまた齡重ねるかたつむり  
射干や家を毀ちて家が建ち  
薔薇咲いて起居いささか華やげり  
十葉は場所を選ばず駐車場  
角の長短書にあるとほりかたつむり  
酢漿草とこむづかしき名汝負ふか  
表札の町名古きまゝ梅雨へ  
蝸牛ゆめゆめ大きくなる勿れ  
蝸牛いやいやをして向きを替ゆ  
蝸牛老ゆると思へば老ゆるなり  
正確にはミスジマイマイ図鑑繰り  
蝸牛程の私の運動量  
銭湯の跡地射干咲いてをり  
潮風の顔に纏わる曼陀羅華  
しろがねに川駆け抜ける夏の雨  
ピーマンに日は差しながら雨の降る  
古団扇骨傷みして風へなへな  
甚平の着始め案山子の心地せり  
父の日の脛吹く風の途切れずに  
父の日の素足すうすうしてゐたり  
葛まんじゅう風透きとほる日なりけり

黒南風を切りてとんびの攫ふもの  
積み込める釣具一式黒鯛釣  
遅ればせながら梅雨くる舴舺舟  
梅雨の子に天気番組「なんでだろう」  
ずぶ濡れの螢袋の一輪挿し  
摘み草の螢袋の丈長く  
露零す螢袋に道草す  
小走りに螢袋に駆け寄る子  
花しやうぶ見つめて風の見えるまで  
早生りのソックス形の胡瓜なり  
挿しながら螢袋の岬おもふ  
霧らふ径螢袋の豆ランプ  
螢袋夢二の面長乙女めき  
父の日の酔はやばやと廻りけり  
父の日の加賀鳶の封切りにけり（大吟醸）  
孫とみる芒種の「ピーマントリオ」かな  
夏空馳すアンパンマンは強かりき  
黴どきのバイキンマンをやつつける  
湯上りに大きく起こす団扇風  
青嵐社の鳩に吹き下ろす  
萍をめちやめちやにせる棒の雨  
螢狩台無しに雨降り出せり  
持つまいとおもふ空から五月雨  
虫籠に蜥蜴を入れて兄貴分  
郷に入りては郷に従ふ水中り  
その嘔吐鮮烈にして水中り  
バリに入る一つの儀式水中り  
水中りの洗禮を受くジョクジャカルタ  
棒の雨萍一瞬葉裏みせ  
軽鴨の子ら太藷の林出入りす  
萍の收拾つかぬざんざ降り  
油照り始祖鳥の世のヒザラガイ  
栗の花しどろもどろとなる天気

● HAIKU200306sonos5

恋人に坐れとばかりうまごやし  
蜜月の真つ只中の白詰草  
若者の手をとりあるく白詰草  
眩しきもの白詰草と若者と  
赤詰草白詰草に囲まれて  
遊船の波切り進む白詰草  
仕方なく持ちあるく傘赤詰草  
振花を打ち雨用意の傘を出す  
振花の辺に恋人の如く坐し  
振花の妻得てあれから四十年  
明るきこと振花のやう汝のほとり  
おもはゆき振花の辺に汝と坐る  
振花の螺旋をなぞる妻の指  
びんろう樹ヨットスクール開校中  
あぢさゐのスケッチブック絵葉書大  
学習院・明治・法政ヨット馳す  
遠眼鏡校名入りのヨット馳す  
携帯電話すると四葩の辺に受けぬ  
大南風の途絶えてへなへなヨットの帆  
海紅豆海老チリを待つレストラン  
振花の上過ぐジェットコースター  
あぢさゐの毬突きのぼる二百段  
うまごやし踏めば妻との若き日々  
ヨット操る男サルビア色のシャツ  
うまごやし足許を透く通り雨  
海臨む一亭ヨットユッカ越し  
釣船の退け刻海猫の舞ふ中を  
風変り海月の向きは波の向き  
みずくらげワルツのステップ踏むごとし  
波に乗り水母はワルツ踊るごとし  
岸壁に揉まる海月の硝子玉  
山車倉に風を入れをり祭月  
山車出して風に当てをり祭月  
十葉のほふ日獵奇事件あり  
梅雨何か蝕めるおと障子の外(と)  
梅雨の銭じゃらじゃら貯金ごっこかな  
髯剃の充電梅雨の徒然に  
妻の勝手私の勝手蠅叩く  
仲違ひダチュラがそっぽ向いてゐる

振花に挙がる歓声遊園地  
夏つばき曇り空よりぼとと落つ  
いつ来てもおかしくない雨沙羅のそら  
独り言聞いて呉れそな沙羅の花  
午過ぎの葉擦れひそけき沙羅の風  
さりげなく咲き花了る夏つばき  
取り紛れる裡に花了ふ夏つばき  
夏つばき咲くか家居も永くなり  
蚊のやうにただよひるたる梅雨家居  
むしやくしやするところへ来合はず縞藪蚊  
眼鏡の度上げねば初蚊見失ふ  
簾吊り準備万端整ふ家  
火取虫飛び廻る輪を拡げつゝ  
疑問視するエンゼルフィッシュ水槽越し  
屈原のごとき起居を簾内  
世の風に当たる簾を打出でて  
青簾吊れば浮世が透けて見ゆ  
浮世の塵封じ日送る青簾  
古簾掠める風を聞くばかり  
青簾一つ大きな音を聞く  
垣直さずにおく外間は悪けれど  
四方簾鉢の金魚に他ならず  
葭簾雨まつすぐにまつすぐに  
祭見に洗ひざらしの甚平着  
何處へ行く時にも色脱(ぬ)け甚平着  
降り出して葉音の通る古簾  
コンビニに震えあがりぬ甚平着  
小気味よく雨降る出せる軒簾  
古簾待みごころのごろ寐かな  
あぢさゐの青葉見えある軒簾  
青簾風に色目を使ひけり  
ごろ寐して目に入るもの軒簾  
古簾ごろ寐とろんとして来たり  
薬くさき尿して廁明易き  
黒文字の素直なる枝の明易し  
物音をはばかり起きれば梅雨雀  
明易の誰か蛇口をひねる音  
明易の尿(しと)に立つこと三度ほど  
明易をけむりのごとく立ちて尿  
短夜の体内に水ゆき渡らす

明易の水はうましとグラス乾（ほ）す  
明易の妻とおもへる咳一つ  
簾してごろ寐はばかりのこと無き家  
幽霊のごとく床抜け尿せんと  
五家宝にゐるゐる蟻の偵察隊  
蟻のゆく机の上の幾山河  
掃除機に追はれて梅雨の部屋を退く  
火取虫掴み損ねし灯の貧し  
火取虫一つ巡れる胸の上  
光輪に翅透かせ飛ぶ火取虫  
火取虫光輪放ちつつ飛べり  
裏路地を好み歩けばジキタリス  
文机をとことこあるく夜の蟻  
和えものに北見のホワイト生アスパラ  
がらんぼの五體満足暁（あけ）の棧  
金魚屋のアズマニシキは四股名にて  
金魚屋にかじか蛙も売られけり  
金魚屋に売らる薄暑の珊瑚岩  
梅雨どきの何處を見据えて金魚の目  
似非者は何處にも居るもの悪なすび  
土中まで蒸す日や蚯蚓踊り出づ  
葉桜の毛虫垂るるによき暗さ  
藤の豆降り込められて硬さ増す  
金魚藻にあぶくを遣りて育てをり  
これは大き金魚屋の布袋草  
雨上り地明りのして立葵  
雨あとのこれだけ蒸せば螢狩  
釣人はこの径ゆかず青すすき  
店頭に押し出ださるる扇風機  
頼むから小雨よ上れ螢狩  
雨執ねくダリヤの花を打つ浜辺  
ダリヤ咲く今もこの路地ぬかるみて  
ダリヤに雨上り蒸し蒸しする日なり  
布袋草雨水鉢を溢れ落ち  
赤蟻に上がり込まれて梅雨の家  
かう派手に這ひ回られては蟻退治  
一匹が二匹三匹蟻みつかる  
蟻討ち取る音のばたばた板間なる  
蟻のぼりかけて止めたる辞書の壁  
蠅打ちの一丁あがり腕が鳴る

板の間に蟻打ち据えてべったんこ  
雨の日の初もの西瓜雨の味  
父の日の頂きものの西瓜食ぶ  
西瓜に添え食卓塩の赤き塩  
入梅のすっぽん漁を観て家居  
蟻跨ぐ雨夜のテレビの走査線  
毬あぢさみお隣さんへなだれけり  
封じ手の白石梅雨の本因坊  
吾が家に蟻の潜伏発覚す  
よぎり消ゆ蟻の残像机の辺  
夜の蟻に簾編み屑籠ねらわれをり  
菓子屑を嗅ぎつけ来たる蟻ならん  
蟻引き込む真因は何先づそこから  
雨の手すさび蟻を打つたり打たんだり  
居間の蟻雑誌丸めて打ちにけり  
蟻打てば体かわされて滅多打  
蟻潰す手すさび雨夜長ければ  
蟻向かふ先に屑籠中に何  
蟻打たれ骸は垢のごとくなり  
雨夜の蟻寝ねても脳裡走りをり  
家に入る蟻の根絶やし寝巻来て  
太鼓材ヴビンガの木は滝の直  
風死す森ヴビンガの木の面構え

● HAIKU200306sono6

青信号渡りて螢の谷に入る  
街の灯が谷間に見ゆ螢狩  
山水のここはよく鳴る螢谷  
湿り気の顔に纏わる螢狩  
夕餉済み散歩がてらの螢狩  
螢狩マナー手書きの立看板  
林なす太藪の下の螢かな  
あやかしの夕靄出でて螢谷  
螢とぶ山の向うに火葬場  
懐中電灯いっぽん携え螢狩  
魁の螢が先か雨先か  
暗がりの奥の暗がり螢とぶ  
風の綾捉えて螢上昇中  
何時とはなく螢出る頃人も出て  
大螢風のうねりに添ふてとぶ  
恰好の螢日和となりにけり  
風絶えて螢の宿は藪臭き  
ほうたるの徒らごころ道に出て  
風前の灯しび螢点りけり  
螢谷風納まりて風吹いて  
あさざ暮れ難くとんぼの遊びをり  
恰好のむしむし陽気螢出づ  
螢狩瀬の鳴るここがよからうと  
ぞろぞろと薄闇をくる螢狩  
我のみに光る螢に對ひある  
螢との交信何をもつてせん  
突如吹く風に螢の灯を落とす  
ほうたるに逢う迄山の径をゆく  
ほうたるにぬつと近づく風の面（つら）  
一つ減り二つ減りして沢螢  
あらよつと飛脚のごとく螢過ぐ  
風出でて螢の宿の早仕舞ひ  
螢たつ粹な噂のたつごとく  
どこまでも上昇中の螢なり  
暗がりに交はすあいさつ螢狩  
棲み分けてここは源氏の螢谷  
ほうたるを吹き落とす風やには也  
だしぬけに螢を宙に突き上ぐ風  
上っぱりいつか湿りて螢狩

迅きこと飛脚のごとき螢なり  
ほうたるを吹き消す風と点す風  
螢呼ぶ声の清きは子供たち  
手探りの径をほうたる点し呉れ  
螢川だいぶ下りしところにも  
ほうたるに殴りかからんばかりの風  
風時に螢を宙に抓み上げ  
ほうたるの風に浮き名を流すごと  
大風に螢あはてゝおっこちぬ  
大風にあはてゝ点す螢あり  
螢狩連れ立つ中に犬もあて  
戻り道梅雨黒雲も足早に  
よく冷えしチョコに涼めと宅急便  
榊霰砂地をうがつ男梅雨  
刈られたる十葉の香を抜きにあめ  
たわいなく雨に散る散る夏椿  
雨音の広がりあぢさゐ真つ平ら  
雨音もあぢさゐの葉も賑はへる  
鱒釣の海がきれいに見えてくる  
濃あぢさゐ雨を零して揺れ返る  
あぢさゐののっぺらぼうを怪しみぬ  
梅雨湿りせし身は湿りクラッカー  
早起きが徒の寝不足籠枕  
湯上りの団扇はどこだここに無し  
新じゃがの入る料理なら何でもよし  
毛虫居るだけで全てを物語る  
十葉を引き来しと云ふ言無けれど  
雨打って山あぢさゐの葉が踊る  
十葉の全て刈られて逃げ場なし  
菖蒲湯に赤らめる肌瑞々し  
手にあたるものはと見れば藪蚊なり  
雨の日のあぢさゐ何處から暮れてくる  
新じゃがの薄皮ほどの幸せも  
新じゃがにむせてコップの水をのむ  
浜大根節くれ立てる豆の莢  
だんご虫梅雨湿りして陶のいろ  
青梅の一つ二つと落つ濃闇  
一病も運と云おうか柿の花  
郁子の花そこのところは割り切って  
金魚屋のグッピーの眼が忘れず

振花のういういしさがこみあげる  
年々に殖ゆる四葩に家埋もる  
海に水母陸にあぢさゐ漂へる  
昼顔の萎む花みてひらく花  
あぢさゐのまだ花つけぬ雨景色  
みずくらげ波に反発して泳げり  
あぢさゐの葉を打つ雨音大いなり  
吸呑みのやうな花つけすいかづら  
殺戮を免れし蟻徘徊す  
百合蕾む中空に嘴突き出して  
がらんぼのペン皿に来ておちつかず  
木斛の花を散らして雨が熄む  
あぢさゐの色脱けて雨締め無し  
甚平の食い込む紐をゆるめをり  
鉢植えの睡蓮に雨余りたる  
しんしんと水むつつりと青田村  
火取虫ばたと音して何處かへ落つ  
ありありと其処風通る鴨足草  
早苗束玄関脇に寄せてあり  
六月も半ば夜毎の習ひ笛  
雨の夜をいやに元気な蚊が出て  
余所者の吾等が行くと行々子  
蛇苺道がなくなり折り返す  
合歓の花雲近ければ朋として  
ほじくれば幾つも出てくる西瓜種  
口中の西瓜の種は何處へやる  
庭土の小雨あがりし沙羅転がる  
飲み頃と持ち出してくる梅酒瓶  
梅雨どきの水母はかたまり易きかな  
ひきがへる辺りの闇に溶け込みぬ  
町内会ありて祭の相談ごと  
梅雨の宵町内会の顔合はせ  
夏鶯鳴いて蔵王の奥座敷  
夏座敷話半々蕎麦半々  
ここ山形佐藤錦の色づく里  
バスツアー食べ放題のさくらんぼ  
最長老まだ健在で額の花  
藤豆の豆の形に翳添へり  
さつきから鴉が鳴いて枇杷日暮  
雨しぶき水面に立つ太藪かな

蛇（くちなわ）が太藪の中へ消えゆけり  
沼の雨太藪を打ってやゝ荒き  
合歓の花旭ボツポと当りけり  
梅雨季に約して旅は翌々月  
掃討戦ありし翌朝蟻を見ず  
掴み取り佐藤錦の味如何に  
さくらんぼ狩へ大型バス連ね  
節電のチラシ早々来て夏へ  
梅雨晴れの或る日選んで靴を干す  
靴を干す子のものばかり梅雨晴間  
食べ頃のチェリー磨きがかかりけり  
庭に出て蟻を見ぬ日は物足らず  
落雁のこぼれ屑蟻呼べるなり  
咲き出して合歓天界に近き花  
雨の日の憂さ晴らしては合歓咲けり  
合歓の咲くこの道暫し愉しみゆく  
合歓の咲く下を通りて小買物  
蟻潰すこの板の間が修羅場なり  
朝から斯く晴れたれば蛍狩  
下水工事朝からこと梅雨晴間  
バナナすんなり剥けて観戦大リーグ  
振花のコップに厨の窓明り  
五、六本出しおく団扇馴染みの絵  
梅雨晴れの風入れ三面記事を読む  
読み漁る梅雨の新聞シネマ欄  
梅雨の居間ドライフラワーなど活けて  
庭花に洋花殖えぬ梅雨最中  
墓出づる宅地開発すすむ世に  
定年後扇子が家に遊びをり  
大リーグ観戦団扇持ち替えて  
扇子より団扇年金暮しなる  
のうぜん花咲いてゐし家毀たれぬ  
父の日のあらためて見る脛なりけり  
徒然に梅雨の抽斗開けてみぬ  
栓抜の在りかは何處だ梅雨留守居  
籠枕湿る頭を乗せにけり  
洗濯物取り込むための梅雨留守居  
汗の走者本塁塁前タッチアウト  
紫陽花の装飾花とはこれ初耳  
あぢさゐの装飾花下の真（まこと）花

あぢさゐの装飾花とはへんな花  
あぢさゐの因みにこれは装飾花  
あぢさゐより薔薇へ関心移りけり  
ながながと降るあめ俵麦屈し  
あぢさゐの薄るゝばかり雨にも飽き  
石垣より吹き飛ばさるる蟻見たり  
大風に吹き飛ばさるる蟻のこゑ  
梅雨黒雲野盗のごとく現れにけり  
横なぐり太藺太らす雨なりけり  
団扇せはし余り風などなかりけり  
さくらんぼ売れ上々の立ち上り  
独歩忌の肌着ふはりと替えけり  
梅雨の日を送るときには肌着にて  
麦湯ぬるく延長戦に入りけり  
膝小僧うらはずかしき半ズボン  
試しみて快適今日より半ズボン  
雨乞に頼の真似事したりけり  
やたらくるチラシ投げ込み梅雨屑籠  
醬油壘押さえに梅雨の置手紙  
宅配の人にあはてる裸かな  
吹きまくり団扇のいらぬ日なりけり  
金魚藻の捻れを直し戻しけり  
メロン作りしんどくなりて今は南瓜（岬人  
の云へる）  
一人崎びと南瓜作りに励みをり  
転作の南瓜作りに励む老い

● HAIKU200306sono7

相応の薔薇の門あり領事館  
接骨院中間色の薔薇咲けり  
風鈴に似てゐて自転車と呼び鈴  
マタドールレッド激しくカフェの薔薇  
でか尻に毒針秘めし蜂ならん  
繁茂せる十葉へたに刈らぬがよし  
行きずりの足を止めたるカサブランカ  
ドライフラワー束ごと挿して梅雨の壺  
行く人の触れては通る含羞草  
含羞草咲きぬし家は何處だっけ  
音量を絞ることなしアマリス  
雨に伏す茎のか細きたはら麦  
たはら麦程の軽みの一句欲し  
旺んなる夏草の名はカキドオシ  
たまに吹く風を朋とし俵麦  
瓶に挿しドライフラワーたはら麦  
花合歡に曇天覆ひ被さりぬ  
雨に合歡落花続いて木霏も  
いつも通る道の合歡の木花つけて  
こつこつと石を彫る音合歡咲けり  
真昼間の石屋の前の合歡咲けり  
いつまでも意地を張りづめ鉄線花  
からつきし雨に弱くてたはら麦  
金魚屋の藻を見て暫し雨宿り  
いつとなく金魚屋に寄る雨の昼  
金魚屋の布袋草よく肥えてをり  
あぢさゐが痣のごとくにのこる闇  
目配せをする奴も居る目高の子  
梅雨の橋渡りて三吉演芸場  
青梅雨の葉ケースを引き葉  
薔薇どきの噴霧器門に置き忘れ  
梅雨深みこの頃母の忘れ癖  
夏椿落花こんな雨止まず  
気まぐれ梅雨降ってきたかと取り込みもの  
家中を引っかき回し南風抜けり  
覗きみてどれがよいやら目高の子  
大濤に手玉にとられみずくらげ  
水中の岩根にひじき・うみうちわ  
孫に遣る玩具は梅雨の抽斗に

あめんぼう息を切らして一と休  
雨まみれなるあぢさゐを除け損ね  
日焼顔イチロー何とホームラン  
あぢさゐのスケッチ覗かれはにかめる  
朴訥な線もて描く山あぢさゐ  
あぢさゐを描く飾り気なき女  
あぢさゐ描く筆にたつぷり水吸はせ  
好奇心旺盛な目や目高の子  
水槽の蔭より舟虫ちよると出づ  
おのれにもわからぬ道を蝻すすむ  
水は尿にゆっくり変はり明易し  
あぢさゐに陽がさし午は雨がさし  
水白う蹴立てて戻る蝦蛄採船  
山の水抜いて滝とし落しけり  
あぢさゐや雨音の輪を狭めくる  
みずくらげ潮の薄影よぎりけり  
みずくらげ水翳負うて漂へり  
山の色道元持ち出すまでもなく  
まんだら花咲けば豆州の妻良おもふ  
もつとも好き遊びの中の水遊び(孫 美雨)  
ありとあらゆる容器並べて水遊び  
旺んなる夏に生まれて嬰の名美雨  
あぢさゐは坊主めくりの坊主めく  
あぢさゐの雨零す毬零さぬ毬  
甚平の上着の紐の二た所  
むしりては十葉の香をのぼらしむ  
ごろ寝して畳の蟻に親しめり  
ゼラニウム包み降るあめ途切れなし  
通りすがりのいつもこの家ゼラニウム  
温き湯に入りし気分は源五郎  
あぢさゐの花のあはひの水の膜  
空模様あやふやにして旱月咲く  
水道の検針にくる梅雨晴間  
梅雨どきの一部屋向うに妻がある  
あぢさゐの精気そろそろ欠けてくる  
濃紫陽花雨のかたまり落しけり  
山青葉もつて客人饗す寺(妙本寺)  
木々暗きところを潜り黒揚羽  
山に山あぢさゐ雨の降り足せる  
山あぢさゐ雨乾ぬ道を下りてくる



詳しくは雨粒のおと葉あぢさゐ  
たんたんとかぢさゐ咲いて花了へて  
あぢさゐ打つ雨の朝から高鳴れる  
百合咲く辺雨透きとほり透きとほり  
カサブランカとかや云う百合咲き出せり  
斯くだらしなくまんだら花咲き了へぬ  
青葙の切礎これより湖ほとり  
雨音に追いかけるる蜥蜴かな  
熱帯魚蛍光灯の青を帯ぶ  
草むしり十薬ふんぷん臭はせて  
十薬の香が強く乗る風が来ぬ  
昔花ダリヤに逢うも久しぶり  
磯の土産からから天草一にぎり  
茅の輪の香いやが上にも募らせ雨  
瓜冷やす水が応えて呉れにけり  
井戸水と云へば即ち真桑瓜  
昔とは形違へて海の家  
振花の根がぶち切れて口惜しかり  
椎の香を人それぞれに受け止めて  
緋つつじは活けず遠くに置いとく花  
もりあがる菖蒲田水は減るばかり  
鼻先に広がる茅の輪の匂ひかな  
石畳うがつ木霽祭前  
里山に早や鳴き出せり夏の虫  
いつ来ても白き花咲く夏の山  
花白く暮れて漂ふ夏の山  
弾き語りざわわざわと黍の唄  
麦焼酎あほりあほりてカチャーシー  
枇杷ほどの涙粒溜め大佛（夏川りみ）  
島人（しまんちゅ）ぬ宝涼しくフィナーレ  
に (BEGIN)

草蛍そこそこ指さすさき  
蛍には木遣りが似合ふ飛びつぷり  
口寄せの婆の使ひの草蛍  
蛍一つ風に混乱して飛び  
風に乱れてどうしやうもなきほたる  
真っ直ぐに飛べる蛍を風曲げて  
暗がりに蛍の一つ目小僧かな  
取り乱すほうたるもめて荒き風  
ほうたるの灯の落ち着きて風熄む間  
蛍の香人差し指に残りけり  
たじろげる人の気配に蛍とぶ  
大き風吹いて蛍のぐらつつけり  
記憶して頭の隅に蛍の句  
梅雨空のときに紅帯ぶるところ  
梅雨空の紅刷く雲に目をあづけ  
梅雨明けが間違ひなしの風なりき  
団扇寝かせ入りくる風に目をつぶり  
ほうたるの乱調見るは久しぶり  
昼ひとり団扇四辺に散らばして  
今日のことみんな句に為せ軒風鈴  
綿飴に孫が張りつくお祭りだ  
解る灯に来てもよさそな金亀子  
夜の蟻携帯電話を跨ぎ越ゆ  
海碧くだらんとダチュラすつくと帆  
脛白くあな恥ずかしの半ズボン  
梅雨空は茫洋としてダチュラのうへ  
半裸にてピザ生地を焼（の）す三枚目  
鼻先の汗ばむ昼やピザを焼く  
好きなればまたピーマンの輪切りピザ  
ピザ作り手伝ひもして明日は夏至  
ピーマンを多めに妻の手製ピザ  
トマト好き故にピザ好き紅茶好き  
半夏生ピザの具手を替え品を替え  
夏のシドニーピザ屋のピザにたまげたり  
棕櫚竹を風に当てをり明日は夏至  
夏至の日の昼餉に手製ピザ焼けり  
夏はピザそれも手製がいちばんと  
三尺寐枕がはりに広辞苑  
この暑さ身体を馴らす他なけれ  
今から斯う思いやらるゝ今年の暑

気休めの団扇扇ぎとなりゐたり  
暑に対す手だて今から考えて  
真昼間の団扇とる手も力なく  
まつわりつく暑さは開き直りても  
ビニール製団扇の朝顔色褪せず  
古団扇使ひ易きが取り柄なり  
シャワーなど一時しのぎに過ぎざれど  
一と休これ本来の緑陰なり  
恰好つけにあらざる今日の日傘かな  
コンビニに行くにも帽子・夏手套  
白日傘いかにも今日の日差しかな  
父の日の噛みしむチョコにブランデー  
明易の曙色のダチュラ二花  
真夏日のダチュラは熱(ほとぼ)り花垂れ  
て

驚き散る金魚己が糞巻き上げて  
まだ鉢に馴れぬ金魚を寝しな見て  
新入りの金魚鉢越し吾を見る  
頭は無き金魚が鉢に放たれて  
水替えて一日経ちし金魚鉢  
金魚飼う水に注意を払はねば  
灯して鉢の金魚を散らしけり  
アメリカンチェリーびかりとルドンの瞳  
アメリカンチェリー濡るるや濡れざるや  
アメリカンチェリー水滴弾きけり  
アメリカンチェリー光沢豊潤に  
桜海老のこんな干し方知らなんだ  
琴で弾く鉄腕アトム万愚節

まんだら花身体の火照る日なりけり  
薬花血止草(ちどめ)十薬など咲けり  
こんな日はビールが佳けれ酔のものに  
ぶらさがり具合よろしきまんだら花  
朝鮮朝顔など見て梅雨の中休み  
水打ってすつきりさせたき時ありぬ  
水打って路地の夕暮れ早めけり  
打水の音しみじみと聞く日なり  
打水を今済ませ来し顔に合ふ  
打水の垣越ゆ水の一かたまり  
せいせいと水打ち来たる顔なりけり  
打水の土を打つ音草打つ音  
打水の今度は遠く土打つ音  
どどどと路地揺るがせて水撒けり  
金魚解る義弟もて来てお裾分け  
うつすらと彩載る金魚の稚魚貰ふ  
移されて居心地違ふ鉢金魚  
鉢底に貰はれて来し金魚の眼  
しばらくは貰はれ金魚の品定め  
金魚貰ふ容器いろいろ用意して  
金魚放つアルミの鍋が新天地  
これまでではちよつと悪くて金魚運  
長命は神のみぞ知る金魚運  
金魚の子育つかそれもこれも運  
祭月金魚貰うて藻を買ひに

● HAIKU200306sono8

西瓜好き美雨とは孫の名でありぬ  
西瓜食べのんべんだらりとしてをりぬ  
見かけよりましな西瓜と云い合へり  
今日夏至の孫が飛び込みくる吾が家  
玄関の飛石濡らし水遊び  
金魚屋がウツボ売るとはヘンテコな  
患者食四万六千日の床  
浅草へ四万六千日の妻  
玉葱のとろけて仕舞ふ料理なり  
傘雨忌の豆腐料理の名を知らず  
玄関の静かさに置く金魚鉢  
アメリカンチェリー酸っぱさもちよつぱり  
さくらんぼ洪のごときがのこりけり  
にこにこことこけし色なるさくらんぼ  
ひやかしにこけしと桜桃手にとりて  
何故かお腹上にし泳ぐ金魚あり  
著菘畳草木生ふに任す寺  
孫美雨に大いに余る茅の輪かな  
茅の輪潜り鼠のごとくする子あり  
大茅の輪弁天島を入れにけり  
鰐口を鳴らしゐる子や夏越なる  
今成りし茅の輪ゆつくり潜りみぬ  
夏祓石段下りしさきに海  
祭一足先に来てゐる瀬戸神社  
形代を流しに渡る弁天島  
神官は子息の代や夏祓  
夏越なる楠煽られて祓ひ待つ  
夏至の風吹けり瀬戸橋瀬戸神社  
今日夏至の蒸気扱ふ洗濯屋  
金魚藻とカナダ藻並べ売られをり  
金魚藻とカナダ藻どちらがよろしいか  
金魚藻一つ購う客でありにけり  
擬宝子にいちにち空の明るくて  
擬宝子は雨好む花ずぶ濡れに  
風知草風呼んでをり庭の隅  
細首の紅すいかずら雨まみれ  
夏蓬埃を被るばかりなり  
熱帯魚所帯臭さを捨ててみる  
金魚玉とは趣旨別に走馬燈

走馬燈よりもゆつくり金魚玉  
熱帯魚人を尻目の別世界  
手の届くところに金魚の別世界  
羨しとも金魚はいつも懂れ持つ  
金魚など飼って年金暮らしの身  
積み上げて団地の如き金魚槽  
加はりて金魚見知りをする金魚  
かいぼりのいもりを道へ抛り上ぐ  
鯰とは島田の川で別れたきり  
疎開地と云へば島田の梅雨鯰  
悪食（あきじき）は呆れるほどの梅雨鯰  
ほうたるが飛んでく向うが吾が母校  
近道の青田の向うに吾が母校  
銀龍草一度見たきりあれは何處  
父の日を鯰の如く酔ふことなし  
十葉は美しものは取り様で  
萍は破れし穴を繕へる  
十葉のにほひぐらいで手は洗はず  
近過ぎて踊子草が能く詠めず  
振花のきりきり舞ひは見て愉し  
栓抜のつもりの振花なほ長けて  
あぢさゐを割って何にも無かりけり  
飽食の世も永くなり蛇莓  
十葉の森の下草痩せてをり  
風露草能取岬へつづく径  
ぎしぎしは手拭い絞りきりしさま  
なけなしの雨降り注ぐ百日草  
蟻が来て牡丹の蘂をさし覗く  
鷺草が飛ぶとは決して詠はじよ  
ピザ生地のでこぼこ均す半夏生  
揺れづめのほたるぶくろに何かある  
虹は黄の昭和駆け抜けひばりの唄  
十葉を逆さに干せる訳あらん  
草むしり滑齒筥にも手を掛けぬ  
夏薊裾野の雨は上がり易し  
その容姿見て述ぶるなら浜おもと  
葉のうねり波の優しさ浜おもと  
著菘畳白光樹下をなだれけり  
西瓜すぐ尿となり其（そ）を教える子（美  
雨）

ほおずき市客寄せいなせな女衆  
ここ仮に木曾谷とせん月見草  
月見草雨に溺るる木曾深谷  
月見草夢二は女なよと描く  
流木に浜は寂れて月見草  
夏来ると浜っ子ひばりのマドロスもの  
朝顔市これもってけと女伊達  
蚊を打ちて街頭テレビ世代なる  
いっぼんの初夏の鉛筆あればいい  
したたかさ青に極まり車前草は  
さんざんに打ちて夏草伸ばす雨  
いっぺんでひっこ抜けざり夏醜草  
たちまちに驟雨けぶれり海の家  
藻を入れて金魚の罫設えぬ  
瞬きの重たく梅雨の貰ひもの  
水のんで身の芯覚ます梅雨曇り  
あやふやなサイダーの味雨籠り  
蛇目傘（じやのめ）のごと雨のダチュラの  
半開き  
さみだれにひばりの東京キッドかな  
もう鳴くと或る日気づいて夏の虫  
降り止みし雨をきっかけ夏の虫  
夕餉あと葉並べり夏の虫  
服薬は夕べに三錠夏の虫  
虫の音の斯くも旺んに夏至昨日  
睡蓮を打ち出す雨の矢数かな  
虫の音の加はり夏雨繁くなり  
暁の虫音交じりの雨降れり  
咲き継げり雨の晴れ間の合歓の花  
吾が丈をそこに立たせぬ立葵  
立葵群れて賑やか雨も賑やか  
合歓の花風にさんざん雨にさんざん  
梅雨の月更に茫洋目を病めり  
梅酒漬頓と忘れてあしと妻  
もの貰ひ金魚ぼやけて見えにけり  
ごたごたと物を置かぬが夏座敷  
それなりに古き畳の夏座敷  
間仕切りの数の程よき夏座敷  
宇治金時食うべしあとの水うまし  
合歓散らす糠雨上がるとも見えず

しどけなく散りて且つ咲く雨の合歓  
散るからにそれおぎなうて合歓咲けり  
散るからにおぎなうからに雨の合歓  
めりはり無き起居の衣など更へて  
ゆるきもの肌が覚えて更衣  
雨の庭景色映して金魚玉  
鉢に入る金魚驚き易きかな  
なりふりのざつくばらんにも更衣  
ものぐさの場所を選ばず更衣  
すと脱いでものぐさ太郎更衣  
引っぱり出す箆筒の底のアロハシャツ  
口ずさみ夏衣とは佳き韻き  
討ち取っておけばよかつた蚊でありぬ  
必殺の一打に藪蚊四散せり  
じんと骨痺れ藪蚊は打ち損じ  
どんがめのやうに起き出しねぼけ顔  
しろがねの露結ばせて夏桔梗  
刻み紫蘇豆腐はしゃんとしたりけり  
青紫蘇の一族郎党雨に濡れ  
乞はれては一と肌脱ぎぬ蠅叩  
人參の花より細かき雨が降る  
お隣の胡瓜の蔓の逞しき  
貧乏蔭我が家の土に合はぬめり  
短命の家系とは知る沙羅の花  
沙羅の花滅して雨の降るばかり  
やっかいなもの殖ゆ中に蜘蛛の囀も  
古辞類苑紙魚に走らる大誤算  
薄翅蜉蝣とぶ坊主山今もあり  
雨まつすぐに蝶の翅まつすぐに  
糸蜻蛉先づ止まらせてそれから寄る  
蜻蛉ににじり寄るにもタイミンダ  
糸蜻蛉たることしるき尻の瑠璃  
ここに来て視力大切糸とんぼ  
ぞんざいにして来し視力糸とんぼ  
病葉落つはがねの音を立て、落つ  
蜘蛛の囀を払ひ損ねし手の空ら振り  
相模ノ國の一宮なり肅と蟬  
蟬しぐれ抜け又楠の蟬しぐれ  
たはむれに女の扇子扇ぎみぬ  
濡れ柿の蒂から蛇の目傘の蒂

夏の雨白黒映画の画面ぶれ  
鴨足草和讃の鉦の音が流れ  
一匹の金魚重態また覗く  
縞柄のコォーディネーション蚊の手足  
まだ梅雨の最中土佐酔のもづくかな  
蜘蛛の囿に捕られし顔の後始末  
笹正宗鯨山椒にすすみけり  
干しわらび乗りて会津のわっぱ飯  
夏座敷豆麩浮かせて会津椀  
軽ければ会津桐下駄荷に足せる

● HAIKU200307sono1

冬瓜の割り抜き詰め物料理とは  
神妙な顔して夏至のネパール茶  
冬瓜のごときが起き出し水のみ  
水落とす天城山葵の段畑  
肉・魚・鶏にも飽きて冬瓜汁  
冬瓜のごと横たはり大軒  
苦瓜料理出され箸つけみしもの  
冬瓜の味判るほど通でなし  
冬瓜汁奨めらるるに言濁し  
冬瓜を好かぬと云へば角が立つ  
冬瓜汁すすまぬ箸を奨められ  
夏桔梗静けさのみを好みけり  
桔梗蕾みて鞍馬天狗の被りもの  
揚羽蝶雨後の路地より発ちゆけり  
こんにちわ上がりましたネ梅雨のあめ  
そここに蚊をみる夕べとなりけり  
蚊のいつか屯す夕べとなりけり  
母の記憶虹より淡くなる勿れ  
夏桔梗前にし母の物忘れ  
もの忘れすすめる母に虹は濃く  
草むしりして来て茗荷の出来云へり  
ビールの泡なほ立ちのぼる夕べかな  
ひとり酌むビールを余す夕べかな  
堂々と家に入りくる蚊の奴め  
一しきり夕餉のあとの蚊の話  
藪つ蚊の横行許せし覚えなし  
梅雨嫌ふ食卓塩の赤き蓋  
クレヨンこの色使お梅雨夕雲  
握りしめ美雨は石好き夏の石  
酒のめる内が華なり胡瓜揉み  
組み上ぐるものを組み上げ祭待つ  
山車倉の前にて祭の打ち合はせ  
金魚玉留守を任せたりけり  
名古屋章梅雨明け前にして逝けり  
ドンガバチヨの声優梅雨に隠れけり  
脇役に徹して梅雨に逝く役者  
番組を読む眼ごろごろして梅雨入  
梅雨を疾走水星マークのマーキュリー（懐  
古 少年時代）

屯して垣のあたりの蛇莓  
梅雨の留守取り込みものを頼まれて  
のうぜんの落花始まる書道塾  
整腸の効用あらん梅雨散歩  
飛び地の墓地雫零して女貞花  
梅雨晴れの地べたにひたと犬伏して  
墓遊びせし墓今も葱のこ草  
女貞花梅雨の細路地狭め咲く  
保健所跡立ち寄りてみぬ夾竹桃  
梅雨雀フェンスを上り下りしをり  
犬も亦退屈と見ゆ梅雨晴間  
かたばみの花の淋しきかぎりかな  
ちっぽけな青柿にしてお恥ずかし  
のうぜんの枝垂るる辻にさしかかり  
とうねずみもちの花とよ大雑把  
むらさきしきぶ咲いて通風よき庭園  
ばせうの蕾ぼたりと雫落しけり  
海開き「鴉の飛んだ日」口ずさみ  
あやかしをかしこみかしこみ海開き  
濤音に犬の追はるる海開き  
じくじくと虫喰い酸漿雫せり  
知らぬ間にあらあら薔薇のうどん粉病  
屋上の風を肴にビール酌む  
天を駆く麒麟を見るまでビール酌む  
あぢさゐの葉を透く明り掬ひみぬ  
立葵歩いて直す病あり  
夕涼みして冬瓜のごとき腹  
とり立てていふこともなき梅雨黄花  
梅雨晴れの夕べの鳥のよく啼くよ  
鬼灯の幼く宙ぶらりないろ  
雨上り射干に風吹き出せり  
射干や当主の替はる家殖えて  
黴どきの湯殿の壁を見渡せり  
梅雨どきの怪しくなりし居間の根太（ねだ）  
酔ひは未だ少し残りて夏の虫  
湯上りの躰に呉れる団扇風  
風炎えてねぶた祭の団扇風  
湯上りに武者絵の踊る団扇かな  
荒武者を手玉にとる美女団扇絵に  
ビニール製団扇の風の重きこと

蜻蛉のうしろの正面誰（だあれ）  
白木槿母に忘らる日が来るか  
喃々と冬瓜汁唯啜るのみ  
冬瓜の言挙たかの知れたもの  
立葵姿勢を保ちゐたりけり  
黒文字の濡れ枝僕の好むところ  
おとついを最後に沙羅の咲き納め  
金魚鉢一つ加はり吾が生活（たつき）  
降られてはをりをり覗く金魚鉢  
金魚に餌遣ると云ひてはまつわりつく  
雨いちにち金魚が浮いて死にさうに  
金魚藻に隠るるごとく雨籠り  
咲きがけの二番手が好しかのこゆり  
梅雨の町坂あり下り一歩き  
すひかづら今日は二度目の雨のみち  
鉢ものに梅雨の晴れ間の風を入れ  
死にさうな金魚を別の鉢に頒け  
撒く餌に金魚なついて来たりけり  
百日草咲いて質屋の定休日  
梅雨明けの花はむらさき薄むらさき  
旅支度などして六月了りけり  
旅鞆ハンカチの数増やしけり  
母若く薔薇柄ヴラウス薔薇を剪る  
梅雨晴間鉢ものを日に当てに出す  
誰が見ても梅雨の感じの雨が降る  
隣町いちにち早き夏祭  
梅雨晴れば雀と俱に仰ぐもの  
梅雨明けた明けた日向に雀のちゅん  
すててこのこのまゝ出づか回覧板  
すててこの上よりあはてゝ履けるもの  
金魚の水取り替えるとき慎重に  
二階にて水洗流す梅雨晴間  
合間縫ひ旅費の振り込み梅雨晴間  
旅支度少しづゝ梅雨深む中  
甚平には草履不慣れな歩き方  
甚平や草履素足に馴らしをり  
とある日の梅雨の合間のコップ拭き  
明眸のウマノアシガタ鄙曇り  
退屈な田舎の景色きんぼうげ  
クレマチス花を了りて星雲に

すててこの片膝立てゝテレビ見る  
すててこの膝のところが薄くなり  
いつの間に金魚田失せし車窓かな  
消しゴムの滓吹き飛ばす梅雨机  
すててこのまゝゐる家に風通す  
すててこのまゝ玄関に出やうかとも  
梅雨の本ブックエンドに挟まれて  
金魚餌を貰ひ一礼後ずさり  
ピーマンの肉詰め妻に押し切られ（夕餉は）  
蕎麦ボーロおやおやこれは梅雨湿り  
突っ込んでいやはや蜘蛛のねばる糸  
蜘蛛の困の幾つもあるれば破り甲斐  
むらさきに相對咲きの夏桔梗  
梅雨明けの風いつ吹くか夏桔梗  
女郎花抜群の丈得つつあり  
かんかん照りうっかりすれば紫薇も咲く  
晴れ間縫ひ薔薇に噴霧器鳴らしをり  
五風十雨夏菊は丈伸ばすとき  
夏菊に庭の蟻くる羽虫くる  
庭草みな夏に向ひて丈伸ばす  
梅雨明けの空に向ひて草の穂伸ぶ  
金魚鉢の水替えといふ大仕事  
藪からし怪しき光り放ちけり  
お隣に風鈴遅れて吊りにけり  
軒風鈴風のいふことかぬなり  
さだかなる夏突き上げて野草の穂  
打拡ぐ新聞重る梅雨近し  
昼餉あと梅雨の楊枝を手すさびに  
湿り帯ぶ新聞膝に梅雨近む  
ぐうるりと景を廻して金魚の尾  
強く吹く風に揚羽の乗り換えて  
猫の盗る金魚に懲りて目高飼ふ  
揚羽乗る風を吹き折る風ありき  
梅雨の蝶翅重たげに発ちゆけり  
朝の雨上りて蒸るゝ棕櫚の花  
上着の紐結んで夏至を迎えけり  
簡単に生きる金魚を見本とす  
鉢の金魚一つ一つの無分別  
雨の日の金魚餌撒き手なづける  
金魚一匹死なせて仕舞ふ不覚かな

梅雨に読む本はとみれば「老い支度」  
薔薇真つ赤売り込み一切おことわり  
射干や私道くねくねしてややこし  
白粉花の引つ込み路地に新聞屋  
辻に咲くのうぜん思ひ當る道  
のうぜんの一、二花風に清き道  
のうぜん行末思はる散りつぷり  
のうぜん乱れぬ裡の登り花  
のうぜん奈落へ一気下り花  
のうぜんべたべた何のこんな坂



● HAIKU200307sono2

赤燈台雨に冥めり梅雨の海  
べうべうと梅雨の白浪羽田沖  
磐梯の水や光や青田風  
釣人の人影烟り青しぐれ  
東北道須賀川辺り草刈れり  
にほふことチーズ工場・栗の花（蔵王山麓  
・酪農センター）  
蔵王見てアイスクリームてんこ盛り  
チーズ入りアイスクリームに芯から冷え  
霧濡れの山麓育ちたうもろこし  
鼻先の霧払はばや遠刈田岳（とおがった）  
遠刈田郵便局に入る燕  
栗の花蔵王旺んに雲湧かせ  
蔵王に雨もたらす雲か合歓赤し  
遠刈田こけし橋越え夏燕  
霧の中バスはもたもた登り出す  
霧雨に景色は転じ青蔵王  
フォッグランプ点して蔵王の対向車  
ななかまど霧を好みて咲きにけり  
いちはやく霧を抜け出しチングルマ  
やみくもに霧を登りてお釜の辺  
お釜覆ふ霧に対ひてそもさんと  
霧きらふ溶岩あらんお釜の辺  
不承不承這松お釜の霧に濡れ  
這松は這出す濃霧手さぐりに  
霧雫しとど駒草困ふ榊  
お釜かすみ只々霧を見る他なし  
雪溪の他何もなく刈田岳  
駒草に急傾斜して大雪溪  
ななかまど咲くや雪溪やや汚れ  
玉こんにやく頬張り初夏のお釜へと  
蔵王嶺の車前草霧にしとど濡れ  
霧の中ガイドお釜がある筈と  
足許の白山千鳥の他は霧  
白靴の一団お釜を覗き見に  
人ごゑの向うにお釜夏鶯  
たちまちの内にお釜を霧が閉づ  
念力で霽れるお釜の霧でなし  
霧籠めのお釜覗いて引き返す

夏鶯雪溪をなほ遙かにす  
夏草は熔岩の間埋め刈田岳  
霧濡れのお釜の石に御注意を  
雪溪の一つがさつに風の谷  
チングルマ散り遅かりし由良之介  
雪溪のここに遣りし岩鏡  
山小屋はヴォイラー焚いて昨日まで  
駒草はお釜の脇にちよつと程  
岩鏡霧に佇み心細  
駒草を育む霧の子守唄  
霧を見て蔵王山頂レストラン  
飛瀑音筋といふ筋伸ばしけり  
雪溪と別の白さのななかまど  
紅卯木夕もやまとふ刈田岳  
虎杖の山深ければ人の丈  
草刈って蔵王横断道路沿ひ  
青蔵王山形県側草刈って  
山形へ下りる登山路朴残花  
朴残花見て蔵王嶺を下るのみ  
山形へ下山中の夏薊  
刈草の葉裏しろしろ蔵王下る  
蛙どき外湯へ宿の下駄鳴らし  
小綬鳥の鄙に似合はぬ端折り啼き  
うしみつに男女入れ替え夜霧の湯  
霧湧きて蔵王温泉一呑みに  
蔵王嶺より霧垂れ湯町一呑みに  
ミズコブの突きだしビールうまかりき（ミ  
ズコブはミズの実）  
突きだしにミズコブビールも山の味  
ビール乾す酒場のこけしのコレクション  
眉涼し胴太頭大こけしかな（蔵王高湯系）  
炉端焼卓に活けある山あぢさゐ  
霧籠めの露地惑ひゆき共同湯  
霧の夜を青年寡黙共同湯  
湯をうすめうすめ夜霧の共同湯  
宿下駄を蛙鳴くごと響かせゆく  
霧の夜の湯町の上湯下湯かな  
山形弁飛び交ふ霧の共同湯  
朝湯して湯花は霧の淡さなる  
露天湯の湯口の硫黄霧呼べり

夕涼み共同湯出て一服す  
戻り湯の夜道灯の減る霧の闇  
共同湯ふらと出づれば夜霧の香  
戻り湯の湯町坂がち霧にほふ  
夜も更けて霧に灯ながす老舗宿  
濃霧の夜壁越しにこゑ共同湯  
ガタの来し下駄箱霧の共同湯  
土産屋をひやかし霧冷え宿浴衣  
共同湯霧の夜熱く水加減  
蔵王口霧に鳥居の漂へり  
霧終に雨にバス停蔵王口  
月山は霧籠め朝の青田の香  
滝音は斜めに朴は真つ直ぐに  
山あぢさゐ蔵王嶺は雨降りだしさう  
桜の実沼のほとりの木卓に  
山麓の谷地の野しやうぶはたと暮れ  
沼明けて谷地の浮塵子にお目もじす  
山青葉青年の釣るブラックバス  
夕ざれば段々の滝白樺  
滝音の遠ざかる森なほ奥へ  
白靴にほこほこ応ふ谷地の道  
水豊かなるそのあかし水芭蕉  
水上を横這ひの霧沼封ず  
山みみづ死す道をまた戻り来ぬ  
沼明けて野しやうぶに霧停滞す  
車前草を踏んずけて沼一巡り  
がまずみの実を熟らす霧また出でて  
朴の葉に霧の幽冥さだかなり  
霧展く朴の高みをうち仰ぎ  
山麓の霧にぜんまい臈長けて  
青芦の一葉に凝る霧の粒  
山麓の草原深く夏の虫  
シャツ通す冷気朝霧湧き止まず  
老鶯の朝のお勤め森向う  
霧明り朴の広葉を透さにけり  
朝霧の樹間ほのぼの明るめり  
走り根につまづく森の霧濃かり  
朝霧にねぼけまなこを洗はるる  
朝霧に一木のごと霞む人  
湯上りのつまさきに浴ぶ芝の露

蜘蛛の囀に朝霧の粒あからさま  
庭園灯霧より他に訪ふものなし  
霧退くと思へば寄せて白樺に  
白樺を裹める霧の薄ヴェール  
朝霧の中はるかより女ごゑ  
朝霧に散歩の下駄の緒のゆるし  
桜の実朝霧の味したりけり  
朝霧が動いて牧のけふ始まる  
朝霧の濃淡朴の葉の濃淡  
朝霧を薄く刷きたる樹間あり  
岳鴉霧に溺るる樺の木  
高原の風走りづめ白詰草  
高原ゴルフコース敷地のヤナギラン  
うまごやしスキーヒュッテを取り囲み  
白詰草わいわい夏場のスキー場  
エンジンブレーキ響かせ下りる夏蔵王  
旗連ねさくらんぼ売る街道筋  
脚立より火の見のみゆる桜桃狩  
さくらんぼ狩のツアーのごいっとうさん  
木を選びて見事当りのさくらんぼ  
太陽の色乗らずともさくらんぼ  
面白うして日和見のさくらんぼ  
さくらんぼ狩の観光バス横付け  
天童のそらに色づくナポレオン  
さくらんぼナポレオンとは豪奢也  
さくらんぼ採りの終りはナポレオン  
さくらんぼ狩をある日の天童晴れ  
ひょうたんから駒の天童桜桃狩  
さくらんぼ渋し脚立を替えみても  
さくらんぼ狩の前置き一くさり  
試食してピンからキリのさくらんぼ  
さくらんぼ天近きほど甘しとぞ  
さくらんぼ狩の脚立に女衆  
さくらんぼ狩の脚立の位置替えて  
天童の日を勁く撥ねさくらんぼ  
光沢のよきさくらんぼ選りて摘む  
さくらんぼ熟れし証しの一光点  
天駆ける日の申し子のさくらんぼ  
さくらんぼ苗木も売られ小一万  
果樹園の観賞用のさくらんぼ

さくらんぼ狩の時間と睨めっこ  
さくらんぼたわわに生る木と了りし木  
めんこさもこけし程なるさくらんぼ  
うんうんと頷き食うぶさくらんぼ  
八方より手が伸び試食さくらんぼ  
味見して採るさくらんぼ高砂種  
椀伏せしやうな夏山仙山線  
夏帽のあふぐ山寺案内図  
先づ見上ぐものに山寺案内図  
汗拭きつお山案内に同道す  
菩提樹の実ほとりより発つお山入り  
沙羅咲いて且つ散る根本中堂前  
からかねの大屋根夏の日を返す  
万緑に磐を配す立石寺  
曾良のごと山巔目指し揚羽に蹴く  
芭蕉像うしろを通る黒揚羽  
ころり往生阿弥陀を拝す夏衣  
息の緒をつなぎ登れる青葉山  
杉皮の赤むきだしに夏の山  
額に汗お山詣での首手拭い  
九十九折石段にさす著莪明り  
十薬の見目うるはしき立石寺  
姥堂をうっかり過ぎて夏落葉  
山に雨上りしばかり鴨足草  
白扇子あふぎどうしのお山道  
蝉の尿ならぬお山の通り雨  
お山入り蝉を聞くにはまだ早き  
赤紫蘇にお山詣での汗拭ふ  
参詣の汗の一滴磴穿つ  
掛けごゑを専らに登る青葉山  
杖突いてお山詣での夏衣  
その上に何があるかと玉の汗  
五大堂にて一休止玉の汗  
五大堂風あり扇子納めけり  
塔頭の金魚覗ける詣で人  
一塔頭自家製胡瓜の蔓這はせ  
磴巖し十薬の辺に弱音吐く  
汗止まぬのぼり弱音はあきらめに  
蝉塚を青梅雨穿つ立石寺  
仁王門汗し過ぎれば膝笑ふ

石段を斜め登りに烏蝶  
一休み崖の仏にながす汗  
ハンカチでは足らず手拭いもて拭ふ  
汗ばむ杖力こんにやく恃みとす  
磴攀ずる蟻の一步を重ねつゝ  
羅に護符を売る僧立石寺  
奥之院首夏の消化器堂脇に  
丈六佛涼しみ拝むおいど並み  
丈六佛おん前にして汗を乾す  
額伝ふ汗にかまけて御休石  
かにかくに玉の汗かく千余段  
磴攀じてよき汗をかく立石寺  
なかんづく汗かくところ立石寺  
虹の下車スリップ横転す  
合歡の花天使の階段登れかし  
東北海道青田照ったり曇ったり  
東北海道南下半夏の雨断続  
夕ざれば鴨の黒ずむ渡良瀬川  
パーキングエリア安積を背に峯雲  
梅雨白雲桃の福島通り過ぎ  
湾岸道路梅雨に臨めば観覧車  
お台場のあぢさゐ色の観覧車  
ふんはりと七夕月の夜のフライト  
湾岸道路灯の帯なして天の河  
レインボウブリッジ真上の梅雨眉月  
東京湾岸梅雨の灯拡ぐは空港か  
梅雨の都心光芒放つ川向う  
梅雨どきの湾岸道路灯の連鎖  
七夕月港湾の灯をちりばめて  
団地の灯つましく梅雨の月の下  
梅雨の灯は暈もちコンテナヤードなる  
瀬戸神社 夏越の祓  
狩衣は風より柔き大祓（瀬戸神社 夏越の  
祓）  
うなばらの何とかかんとか大祓  
祝詞の間蟻を見つむる大祓  
頭（こうべ）垂れ神主三人（みたり）大祓  
畏くも苔蒸す斎（には）に大祓  
大祓吾は執ねき蚊を払ひ  
この吾もその数に入る御祓かな

式次第とどかうりなく大祓  
狩衣に夏越の風が渡りけり  
神主の出を待つ木履大祓  
ちと乱る茅の輪をくぐり抜けにけり  
榎青実にはへる下の大祓  
形代の袋の朱文字蟻這へる  
むにやむにやにむにやむにや和せる大祓  
大祓納めの挨拶徹りけり  
大小の三宝四つ大祓  
三宝に留め石三つ大祓  
引き続き茅の輪潜りとなりにけり  
腕組んで茅の輪くぐりの列にをり  
羅はこの宮の人大祓  
羅の二人の女人大祓  
行きずりの人も茅の輪の列に入り  
狩衣に風はらませて大祓  
大祓棚の下風吹き抜けり  
蚊とんぼのやうな神主大祓  
草原の端っこ押え捕虫網  
髭草何か知らんが覚えをり  
文字摺草団地の芝に交り咲く  
梅雨明けの何捕るつもり捕虫網  
アカバンサスかう流行りては嫌な花  
時計草百咲き泥棒市めくも  
洗濯物畳まれてはと蟻逃ぐる  
取り込まる洗濯物に子かまきり  
捕虫網押えたままで大きな声  
熊蟬の大捕物となりにけり  
晩酌の肴を蟻の嗅ぎつけて  
配当金いささかついて来たる夏  
よき水を使ひて丹波豆腐かな  
蟻登るときに見上ぐる魔法瓶  
家内は静かなるかな湯呑みと蟻  
机上の蟻貌搔くさまもあからさま  
忘れぬし頃に現はれ机の蟻  
机の角蟻世の果といふ顔す  
蟻のゐる朝の机に向ひけり  
縁ばかり好み歩ける机上の蟻  
机(き)の端を昨日の蟻か折り返す  
文机の地平線より蟻現るゝ

蟻は机の矩形なること確かめをり  
煙草値上げ明日に始まる祭月  
碧揚羽さと大風に体かわす  
碧揚羽眼を吊り上げて後を追ふ  
ゴキブリに硼酸団子用意せり  
ゴキブリ駆除家の隙間といふ隙間  
雨の日の台所(だいどこ)暗くゴキブリ駆除  
藪つ蚊の敵機来襲眼を凝らす  
ゴキブリ駆除硼酸だんごを「へえ」とみる  
ゴキブリに用意す無臭の毒だんご  
御器かぶり騒動起こさぬための駆除  
胸元の釦緩めてアイステイ  
斯く集ひ常の顔ぶれアイステイ  
ホットケーキ焼いて昼餉のアイステイ  
こんもりと土積み蟻の分譲地  
よそゆきの水玉模様天道虫  
夏虫のそれと聞きあはるさはりかな  
白南風にどかと灰皿南部鉄  
あぢさゐは灰白に帰す梅雨の果  
枝豆の走りを貰ふお辞儀かな  
枝豆を茹でる湯気まで走りなり  
射干に來し方雨も烟りけり  
屑籠に蟻を掬ひてはたき落とす  
今日夏至と這ひ出してくる寝起き顔  
赤潮の仕業と鼻をうごめかす  
赤潮の噂話もいつか退き  
冬瓜の煮方煮崩れ防止策  
吝ん坊のごとく冬瓜煮てとろ火  
冬瓜の銀あん下処理ねんごろに  
冬瓜の煮方をホテルの料理長  
バツタ得て子の胸張れり捕虫網  
仏桑花柄の甚平奢りとす  
それなりの配当金あり梅雨明けぬ  
梅雨明けをブルーベリーの酸き洋菓子  
蚊に喰はる脛搔きこはす野っ原道  
塩振って走りの枝豆喜ばす  
晩酌の松魚にちよんと擦りしょうが  
むらさきに松魚泳がし宵の酒  
口中に飛ばす枝豆いい感じ

おひたしに青菜のうまき鯉季  
土左衛門欲しがる海の開  
土左衛門盆波に乗り材木座  
冷麦の氷の味も勘定うち  
溝細々路地に遺りて蛇の髯咲く  
ご近所の五人ばかりの溝浚い  
くねる路地薄き日差しに蛇の髯咲く  
ご近所の路地の奥まで樽神輿  
冬瓜の煮もの食うぶもホ句の種  
吸い物の椀に入りし庭めうが

● HAIKU200307sono3

ノースリーブ横須賀をゆく独立祭  
消防車街中に現る独立祭  
ピアスの娘百恵に空似独立祭  
黒人が肩で風切る独立祭  
三笠丸さびれのうぜん散るばかり  
洗濯屋蒸気しゅっしゅつと独立祭  
のうぜんに絡みつかれて音を上ぐ木  
のうぜんの一枝吹かれて風来坊  
軍艦に四万六千日の波  
この街のこの焼鳥屋この隅で  
街ぼこりさらりとながし烏龍ハイ  
ジャズながれ浮かれゆく街独立祭  
コココーラにおくび連発独立祭  
汐入に汐の香満てる独立祭  
一寸寄り妻と焼鳥烏龍ハイ  
模擬店にくわがた市役所主催市  
一本の団扇がおまけ朝顔市  
鬼灯の鈴生り袋のグラデーション  
鉢朝顔これはだうだと目の高さ  
朝顔市変化朝顔売る店も  
黒人に珍(うづ)なる朝顔市が立つ  
これから咲く色と云うても朝顔市  
なま白き鬼灯の花雨を呼ぶ  
鬼灯の花これ下のそれ袋  
朝顔市風の如くに人流れ  
横須賀は気安き街よアロハにて  
針金細工めく女(ひと)吹けるサキノホン  
サキノホン涼しその音をさらふ風  
横須賀は風荒き日の独立祭  
鳶舞はせ風荒き日の独立祭  
疲れ眼に蚊の粉っぽく灯に浮ける  
灯明りに点線を引き飛べるは蚊  
唄言葉口衝き黄色いさくらんぼ  
生まれくる児のことに尽く願の糸  
滝巾の風の通路に佇めり  
虫の音を引き込む間口枕上ミ  
一布衣として蟻の道あゆむなり  
放任しをるにはあらねど蚊の館  
打たずゐていつかいつしか蚊の館

湯返りの夜道坂道霧の出づ  
孫のくる祭明後日明々後日  
孫抱いて祭わっしよい神輿くる  
時巡りまた夏が来て酒匂川  
突堤に舟虫しやしやり出て祭  
あれは夏蜂の武蔵に螫されし日  
虫捕のこの子近所で見かけぬ子  
石齧る音も混じれり草刈機  
捕虫網門に立て掛けある昼どき  
紅花摘み始まってゐる県央部  
祭の中しやくりつゝ泣く女の子  
ほたるぶくろ好きな主か垣咲きに  
海鞘を食ふ旅もよからむ三陸棚  
七夕飾り淋しげなれば書き足し遣る  
皆忘れ七夕飾りの紙細工  
提灯・巾着・銀漢七夕竹に提げ  
砂の城築きし王子潮浴びに  
ちびっ子の印ばかりの水着かな  
浮輪の子くらげの拾いごっこして  
海彦の泪渚に透く海月  
松蔭に笛吹いて海涼しゆうす  
はしやぐこと尻をぶりぶり浮輪の子  
足つつて死にそこないし海を前  
職退きて今夏で三年竜のひげ  
はびこりてうるさくなりぬ竜のひげ  
籠る間も時移りをりはずみだま  
鬼灯の地に近き程赤き梅雨  
かたつむり葉裏に廻り雨宿り  
雨あとの風起ち易き夕顔苗  
雨後の蟻のぼり下りして夕顔苗  
樹脂透きてなほ降る雨や蝸牛  
ウオーキングすたすた木槿の白張る朝  
ウオーキングあちらも夫婦七夕雨  
ウオーキング籐打ち半夏のびちびち雨  
ウオーキングそらみたことか半夏雨  
木槿落つ朝まで誰も通らぬ路  
雨避けて軒下に置く七夕竹  
星合の夜空を巡る観覧車  
孫を連れ祭初日の人波に  
鉢朝顔一つ目の花咲きにけり

雨に濡れ鉢朝顔の皺む花  
海紅豆過ぎジョギングとウォーキング  
酒場に寄り鉢朝顔の置きどころ  
朝顔の蔓の欲しがる棒与ふ  
リハビリに妻の手助け蟻の段（きだ）  
楊梅のどうしたことか赤落葉  
楊梅の赤夏落葉方円に  
夏先の色薄けれど赤のまゝ  
しゃぼん玉公園の子に流れけり  
瓜もみにどこか侘びしき厨の灯  
リハビリの杖突きしゃぼん玉の中  
蝸牛殻透くまでに半夏雨  
祭来る頃とや見上ぐ杜の樟  
かるく一杯焼鳥一串葱に塩  
死んだ奴皆酒好きや冷やっこ  
大方は妻の筆跡願ひの糸  
孫のこと又次子のこと願ひの糸  
「金魚さんご飯ですよ」と餌やる孫  
雨の午後孫と覗ける金魚鉢  
夏見舞発地は蔵王のお膝元  
雨暗の部屋の片隅扇風機  
雨の日の蕎麦屋にほのと百合の鉢  
のうぜんは塀の内外に散らかつて  
のうぜんの散りやうさしづめ振袖火事  
浜木綿の先に見えくる登校児  
何もかも錆つく梅雨の蜚部落  
穴子漁船待ち顔の嬉衆  
水槽に水溢れしめ漁穴子  
掛けられし網棒突きの漁穴子  
大胆な造りのアトリエカンナ咲く  
ジョギングの幾人（たり）通る海紅豆  
梅雨暗のきゆういの棚を持って余す  
お隣りへ垣はみ出してのうぜん花  
料亭のうぜん下火となりにけり  
夏草のそこばくの花遊園地  
苦瓜の花の垣脇通り過ぐ  
花を待つ姿すつくと紅蜀葵  
かたまりくる登校の女兒ほうせん花  
草叢より飛び発つ羽音蚊帳吊草  
コンビニにお盆のセット出廻りぬ

区役所の前の代書屋射干咲く  
雨季明けの舗道に白き鳥の糞  
立葵みんな忙しくその辺過ぐ  
のうぜんも提灯花下げ祭前  
橋一つ越えて野島の祭見に  
釣船屋祭提灯戦がせて  
墓地の土破りて幼な槍鶏頭  
朝の入江ええ恰好して鯿飛び  
祭提灯連なる町を徒歩く  
登校の途中で捕ふ天牛虫  
橋の上海月二つを数ふのみ  
運河べり海月の殖ゆる祭まへ  
粉っぽき雨夜の灯虫低く飛ば  
線香花火じゅじゅじゅじゅじゅと牡丹  
より  
線香花火踊る小松葉大松葉  
線香花火終の柳は公家のひげ  
あらあら徹下駄箱の靴掻い出して  
首都圏ニュースけふからと告ぐ鬼灯市  
野萱草咲いて萎れて飛び地墓地  
部屋に舞ふ灯虫庭にはすだく虫  
黒揚羽ふつと掠めて温き風  
黒揚羽網戸がありて引き返す  
黒揚羽吾と見合へる網戸越し  
梅雨のゴミけふは壘缶回収日  
垣越えて庭に入るかぜ風知草  
雨季あけて味噌汁の香の卓につく  
朝顔の途方にくる遊び蔓  
朝顔の観賞二輪露乾ぬ間  
朝顔の蔓葉と風にうち靡き  
蔓どどん伸びる朝顔朝から晴れ  
黒揚羽おつとこちらの道でなし  
朝顔の花に従ひ葉もくたり  
揚羽蝶朝顔棚を横目にみて  
節電や掠れて鳴れる軒風鈴  
夏枯梗花数は云うまでもなく  
鼠尾草（みそはぎ）も売られスーパ―花売  
場  
居間塞ぐる寝を妻に暑がられ  
裸にてごろ寝する日の始まりぬ

夏雲をながす風向き空に見き  
夏萩のはらほろひれと葉の靡き  
茶漬けして顔に汗噴く日の昼餼  
顔あふぎ山寺土産の洪団扇  
こんな日はどうして過ごす鉢金魚  
うだる日は金魚も浮沈繰り返す  
黒揚羽空き巢のごとく裏手より  
水遊びする子の跣足鳩も亦  
通園の母子夏帽欠かせぬ日  
眼を虚ろ麦茶の氷鳴らし飲む  
雪洞の戯れ絵拙し宵祭  
夏の月近く二階の子供部屋  
風鈴の引き込む風の裡にをり  
夏の夕虫の語らふ繁々夜話  
大鳥居抜ける風や宵祭  
金亀虫ぶんぶと裸燈せりりをり  
風上ミの祭囃子は州崎町  
蝉音まだはつきりせざり夜風の杜  
雪洞の点りそめたる宵祭  
家裏の鉢花漁るなめくじら  
蛞蝓に喰はれ鉢花丸坊主



● HAIKU200307son04

ぺっちゃんこことし始めて搏たるる蚊  
力籠めこれが藪蚊の搏ち始め  
相撲見てビール団扇は左手に  
垣に苦瓜（ゴーヤ）蔓ものの好きの主とも  
のうぜんや味噌汁の香のほふ道  
梅雨最中沈んで妻は低血圧  
手がけるは蔓性植物夏の朝  
射干や雨滴漫ろに明ける朝  
百日草今どきこんな花咲かせ  
百日草好きな主の顔見たし  
青柿の転がる路地を抜け散歩  
保育園歩き回る子グラジオラス  
早咲きのいくらなんでも夾竹桃  
山車囃子湾に流して平潟町  
夜釣して祭囃子の音のはるか  
墓空に兔も角忙し蚊喰鳥  
かはほりの妙な飛び方卍飛び  
かはほりやなかなか暮れぬ墓地のそら  
近道は墓地の脇抜け盆踊  
祭囃子平潟湾の風に乗り  
祭幡橋のほとりに漁師町  
顔の汗べたべたてらてら神輿昇  
綿飴をもって写真に納まる子  
うなぎの香舗道に洩るる宵祭  
鰻松も賑はひみせぬ宵祭  
くすくす笑いして過ぐ祭浴衣の娘（こ）  
漁師町百日草をまだ咲かせ  
雪洞に鉄腕アトム夏祭  
祭半纏大道西は隣町  
早咲きのこれは何とも女郎花  
梅雨どきの昆布てらてら佃煮好き  
彩と云ひけふの朝顔奥床し  
夏来るとにいにい蝉は待ちきれず  
しどろもどろに鳴く蝉ありて雨の中  
早や出回る西瓜三浦半島産  
煮え切らぬ鳴き方あればにいにい蝉  
日盛りの樹下にて写生談義かな  
緑亀はびこる池の暑さかな  
日盛りをガバと水音立つる鯉

日盛りを朱の薄れゆく太鼓橋  
蜻蛉旺ん弥勒の寺の阿字ヶ池  
蜻蛉の往きつ戻りつ仁王門  
日盛りの仁王見上ぐる老夫婦  
丈低く一つ昼顔真上向き  
樹間吹き抜けるは風かはた揚羽  
日盛りの樹下のひっそり画架を組む  
夏景色描くかたへに烏龍茶  
夏檸檬に風たゆたひて  
太鼓橋ひらり踰えゆく黒揚羽  
段（きだ）歩く蟻の素早さ仁王門  
当節の子の皆長身祭足袋  
風蘭を風より淡く訪へる  
風蘭の宿る此の木と聞きて来し  
風蘭を見上ぐる人のうしろに佇つ  
日盛りを隙つくごとく風の出で  
向日葵の伸ばせば伸びるこの高さ  
蝉の穴跨ぎて通る道の央  
蝉の穴一つぽっかり道の央  
真昼間の蜂の巣作り夏旺ん  
ふくらはぎ蟻に登られこそばゆき  
風ばたと落ちてうとまし軒簾  
遠景に人描き添えて夏景色  
夏木立いっぽん省略スケッチす  
蜘蛛の囿の糸灼けをらん晝つ方  
蜂の発つ行方を追へる昼深し  
家毀つ灼け土打って鈍き音  
西瓜食ぶ美雨（みう）なり赤きものが好き  
西瓜の汁赤きに浸り種子五、六  
雷が西瓜に入れし縞模様  
塩の粒大跳ね小跳ね切り西瓜  
祭待つ杜にぼつぼつ蝉の穴  
狛犬の毬持て余す祭前  
蝉捕りを中断塾に出掛ける子  
石鹼玉飛ばす子追ひ掛け壊せる子  
夜店の材鉄パイプなど持ち込まれ  
大樗茂る合間に神輿倉  
砂浴びの社の雀祭まへ  
店支度至極簡単宵祭り  
夏落葉掻いて夜宮の店支度

水舎から水借り夜店支度かな  
裸電球杜に巡らせ祭り待つ  
やっかいなものにて葛の遊び蔓  
コンビニのとつきで売る盆のもの  
舗装路を渚と見立て浜おもと  
木槿抱く夢の数ほどその落花  
ゆすり蚊の気炎挙げをり祭まへ  
ゆすり蚊のしつちやかめつちやか祭前  
町内の祭を明日に榊落葉  
樹を避けて八幡様の夜店かな  
犬蓼の魁見出づ草っ原  
水遊びもうお仕舞いやのうぜん花  
夕風に夜店の骨格組み上がる  
明日神輿揉む参道と蟻知らず  
リハビリの男のあふぐ百日紅  
風鈴の見えぬ時折擦るる音  
年恰好同じ子通る宵祭  
のうぜん花塾退けし子の返り道  
葭簾あられなき夜のすいと明け  
首振の一芸をもつ扇風機  
芸達者なること新式扇風機  
境内に水打ち夜店建ち始む  
保育児の跣足で踏める朝の土  
朝のうち照り込む前に木を空いて  
鉢咲きの朝顔の数けふ三つ  
場所割りの此処は金魚屋例の親爺  
金魚掬ひ親爺かたへに蚊遣香  
金魚屋の親爺と金魚の共喰談  
金魚の糞掬ひて待てる店開き  
金魚掬ひおたまじゃくしも入り交り  
学校もけふから休み祭の子  
樽神輿後に躓けるお母さん  
樽神輿路地を圧して子供ごゑ  
祭の子ねだる金魚屋通過せり  
よその子が気になる祭浴衣かな  
添え棒を夕顔の蔓巻き始む  
夜宮明け小雨乍に杜の蟬  
楊梅の街路樹中華街近し  
ひよいと来て孫泊り込む祭の夜  
かなぶんをぶんと呼び寄せ夜店の灯

朝顔市小雨ながらの人出かな  
蛍光塗料ちやかぴか夜店の光りもの  
宵宮のほとぼりさめし朝の杜  
氷菓買えと孫の奥の手威し泣  
一夜経て夜宮のかなぶん榊の木に  
夜店にて求めし金魚翌朝死す  
しゃぼん玉壊すが好きな女の子  
余所者の顔も交じりて荒神輿  
荒神輿舁き手薄に去年今年  
祭髪きつきを泳え女の子  
金魚掬ひ浴衣の帯を地に擦りて  
祭済みもとの暗さに杜の樹々

● HAIKU200307sono5

風蘭の物見を雨に先送り  
雨の日の樹木図鑑に風蘭見て  
風蘭の見物些事に取り紛れ  
風蘭を見にゆく話朝餉あと  
風蘭の噂はほんと振りあふぐ  
風蘭の在り処教ふる紺扇子  
風蘭に風の訪れありにけり  
風蘭に風の再来戦ぎ見ゆ  
風蘭を見て来し夕餉雲呑（わんたん）食ぶ  
風蘭を指さす人について寄り  
風蘭の二大樹しんと深む昼  
長生きをしさう風蘭見て曰く  
風蘭の領域広がる眼の馴れて  
風蘭を見し背十風に吹かれゆく  
風蘭はあれあれあそこ木瘤の下  
風蘭に枝を借す銀杏大樹かな  
風蘭は風通しよき樹の高み  
風蘭の脇の峯雲へ眼を移す  
けふ見て来し風蘭のこと寝語り  
神輿昇道路端に腹ごしらえ  
お隣りに子供のお客夏休み  
文鳥に祭囃子の音の遙か  
坂下より風のぼりくる青蔦浴ひ  
立話山車の引き手の減りしこと  
日盛りの閑中の閑あめんぼう  
かんかんと日は照るばかり百日草  
買うて来しきのふのけふの夕顔苗  
掬はるゝ金魚は隅にかたまりて  
蝶交る灼けし舗道の上空に  
日盛りの仁王の臍の薄ほこり  
前面に西瓜押し出し八百松は  
暑さにもこれから馴れゆく半裸身  
山車を曳く中に友ゐて木遣組  
池古りて亀の甲羅は灼くるのみ  
蜻蛉捕りパパお手本の忍び足  
捕虫網空振りの棹一閃す  
捕虫網空振り多し池ほとり  
虫籠を覗けば何と碧揚羽  
塩からとんぼ散策の歩の石擦る音

山車待てば涼風のぼりくる坂上  
パソコンの画面をせせる藪蚊影  
梅雨空の晴れて日曜のど自慢  
九州を襲へる梅雨の総雨量  
山車太鼓朝からぼんぼこ八幡さま  
樽神輿誘ふ呼び子路地曲り  
古書守の池に憩へば牛蛙  
祭の灯柱を焦がして狂ふ蟬  
沿道にほとぼり醒ます祭人  
夜遊びの子の仲間入り祭の夜  
熱気もつ祭の杜の夜の蝉  
朝顔のきのふの彩もあやふやに  
朝顔の一時に咲き勿体なし  
鉢朝顔咲き直す又朝が来て  
あと幾つ咲く朝顔の蒼数ふ  
サルビヤやいつになつたら雨あがる  
サルビヤをぼんやり眺め雨のひる  
犬枇杷の雨に濡れづめ祭前  
へくそかづら凡打ばかりの草野球  
浜木綿の管に合はせて蝶の舌  
鉄橋に昔の俳灸花  
学校の長き休みや稲の花  
散髪の頭ぼっかり土用空  
青芦の芦の終りのここ河口  
ざくろの実梅雨もやうやく明けんとす  
昼顔やサイクロードの一直線  
珊瑚樹の実を過ぐころうらぶれて  
珊瑚樹の実やご本堂修復中  
珊瑚樹の実にマンホール赤錆びて  
珊瑚樹の実やマンションの棟古りて  
公園に遊ぶ子居ぬ日夏葎  
朝が来て又咲き直す鉢朝顔  
朝顔の花数問へば紺一つ  
百日紅源氏の白を掲げけり  
百日紅今を盛りの平家の赤  
百日紅ほとぼりさますけふの雨  
焼いわし食ぶ朝餉も暑さ馴れ  
臥しては起き家居だるしや暑さ馴れ  
孫吾を扇ぐ団扇のへなへな風  
ちびっ子に幟のごとき捕虫網

夕立空悪夢のごとく掻き曇り  
降り止むも油断のならぬ夕立空  
連れ立ちてものの流るゝ夕立川  
驟雨来ぬマグドナルドに雨宿り  
白雨に人の小走りマイカーも  
大夕立こんなのあるかい濡れ鼠  
手際よく暗幕垂らす夕立空  
夕立の風の吹き込む野外カフェ  
黄味帯びておどろおどろし夕立空  
夕立の角度違へて雨斜め  
夕立の黒雲韋駄天走りかな  
赤錆のぎしぎし始まる夏休み  
夕立に足止め喰いてバーガー店  
夕立の空の明暗移ろへり  
草木の息吹き返す夕立あと  
一鳥に二鳥応ふる夕立あと  
飛石の乾けるところ夕立あと  
虫の音の弱くてまばら夕立あと  
朝顔の明日期す蕾五つほど  
土石流家を根こそぎ梅雨末期  
海月殖ゆ海に人出て夏旺ん  
草っ原渚に沿ひて夏の露  
生けるごと金魚死にぬし夏の朝  
夏落葉祭の済みし杜に降る  
捕虫網脇に横たえ砂遊び  
家中に玩具踏み場もなき昼寝  
百日紅晴天続きに干反る皮  
祭果つ杜に病葉降るばかり  
明年まで睡りに入りし神輿倉  
梅雨寒の夜半に第二子産み落し  
峯雲に力入る日や産見舞  
笑み涼し何を夢見て赤ん坊  
青蔦に雨森々と降る日なり  
祭済み常の冥さの八幡さま  
朝顔棚母の丹精実を結び  
ラジオ体操寝惚けまなこで夏休み  
いつの間に風蘭銀杏の高み占め  
梅雨寒のくらげの紋の玲瓏と  
黒揚羽端の葵の花端折り  
わらわらと乾きて蟹の砂だんご

赤詰草夏の露降る松林に  
あられなくひっ散らかつてのうぜん花  
あられなくのうぜん散れり曲り角  
体操にゆく子ぞろぞろ灸花  
朝顔の蔓伸びきりて宙挿む  
梅雨寒の庭花なべてうすむらさき  
三溪の蓮の一花に朝が来る  
うすずみの雨気満つそらに白木樅  
梅雨寒の朝顔雨気を誘ふ彩  
砂浜はやや固締り夏の露  
海月寄る渚をひとりとぼとぼゆく  
白木樅そこそこ零る朝の土  
昼顔の一輪挿しの朝朝  
雨の日の西瓜寝かせて冷蔵庫  
売出しの西瓜半切れにて足れり  
ゆたのたゆた海月に波の子守唄  
鬼の子の玩具の鬼灯生りにけり  
石鹼玉吹ける側から壊されぬ  
石鹼玉吹いて時間を忘れをり  
石鹼玉壊し破壊を愉しむ子  
同慶の至りの冷酒注ぎ合へり  
明易の孫の眼狐につままれし  
寝言云ふ孫預かって明易し  
品川のビルの谷間の盆踊り  
槐散る都心に降れる雨の嵩  
診察の前の諸検査あれこれ梅雨  
梅雨のとある日飛んだ葉の副作用  
梅雨寒の触手ひゃつと心電図  
レントゲン図蜘蛛の巣よりも薄暗く  
待合人ルーペに梅雨の文字拾ひ  
長唄の譜面拡ぐる梅雨待合  
羅の御婦人採血手を伸べて  
鼻先に「夏だ！旅だ！」の車中ピラ  
夏キャベツ盛り沢山に勝烈庵  
梅雨のカツバリツと噛んで勝烈庵  
向日葵の顔よぎる雨いと太し  
雨うつつすら地明りのする鳳仙花  
淡紅の眠気もよほす花ダチュラ  
マンションの物干竿の梅雨布団

空梅雨の吊皮揺るゝ一斉に  
睡りて着く駅ここは何處梅雨都心  
明易の眼をこすりつゝ通勤車  
水飲んで又一睡り明易し  
葛の蔓その先獲物のあるごとし  
蔓に蔓手を掛け初めて明易し  
梅雨寒の傘ふるふると畳みけり  
猫じゃらし雨を嫌ひて雨弾く  
夏落葉増上寺門たもとほり  
熊蟬のみんな高みに増上寺  
ビヤガーデン雨の匂ひの木椅子引く  
蟻のごと携帯メールの文字綴り  
男性も化粧する世ぞ糸瓜水  
ざりがにの万歳往時の突撃も  
からす瓜咲く暗闇に風太郎（芝公園）  
灼くる道ほじくり返しその上に  
越して来し子のおおどと青鬼灯  
冷し茶のみどり減らすを惜しみけり  
なかんづく老樹の証し風蘭生ゆ  
掬ひたる出目金の黒抽んでぬ  
もくもくと蔓もの競ふ山の夏  
蝉捕りの午前二度目の兄妹  
からす瓜煙管のごとき花落とす  
虫籠の中味の話訥々と  
風落ちて色の褪せたる氷旗  
オーデイコロン男も使ふ世の端に  
髪洗ふボトル二つやさてどちら  
彼の夏の術後骨皮筋右衛門  
波に乗り後世（ごせ）は海月の風来坊  
遣りつけぬ仕事たたりて三尺寝  
新参の金魚が鉢を一巡り  
御旅所の氷の下の烏龍茶  
足許を怪力の蟻たもとほり  
蟻肩に担げるものなほ足掻く  
難題を負ふごとと蟻の歩の遅し  
葛の蔓すと擦り寄りて馴れ馴れし  
日雷孫のご機嫌斜めなり  
けふ孫に嫌はれてをり雲の峯  
充分に引きつけ置いて蚊を叩く  
守宮など出る頃階段脇の壁

膨らます瞳が輝きて石鹼玉  
八方へ蔓によきによきと夏兆す  
手に当る蔓のこつんと夏兆す  
生りものの容歪みて梅雨の果

● HAIKU200307sono6

産毛生ふ腕にもそつと藪蚊乗る  
蚊の奴めまだまだまだよそれと撲つ  
脚つまみ白紙の上へ蚊の骸  
蚊の骸しみじみと見て捨てにけり  
ふうせんかづらみどり深めて風吹けり  
ふうせんかづら揺れゐるところ風の道  
ふうせんかづら吹いて手応えありにけり  
ふうせんかづら唯見てゐてはつまらない  
一色にふうせんかづらもの静か  
虫籠に蝉の御報謝ありにけり  
虫籠を揺らして中の蝶発たす  
夏蝶を放と云ふ子ごもつとも  
蜻蛉のごとすれ違ふ真昼の道  
ビールの泡口髻汚す飲みつぷり  
葉叢打ち夜をしんみりと夏の雨  
しゃがみ込む孫の鼻先蝸牛  
破裂して石鹼（しゃぼん）のしぶき岩の角  
山寺で商ふ真つ赤な洪団扇  
山寺を黒抜き団扇の真つ赤な地（ぢ）  
真昼間を風鈴ならぬ鉦のおと  
夏草の穂先くるくる回す風  
朝顔の蔓ばかりなる雨の鉢  
朝顔のけふ咲き惜しみ一つだけ  
朝顔の花能く見たく中踰み  
真つ直ぐに草原渡る露の道  
梅雨の果浜木綿の葉のだらしなく  
天灼けて白さるすべり地に灼けて  
雲行きの怪しくなれば白粉花惰（しよ）げ  
三時草鋪道は灼けてほてりをり  
底抜けに降る夜の明けて青芭蕉  
透し百合日差し閉ざしてしまひけり  
苦瓜の花咲く朝むつとして  
まかがよふ白さるすべり地に灼けて  
まんだら花真昼の睡り深うせり  
虫籠提げ蝉など捕ってちようだいと  
坪庭に歪性向日葵ぼと咲かせ  
嬰の寝巻ピエロの水玉模様夏  
炎天に白さるすべり忽と消え  
百日紅日に日に散るを看取ること

散らばり落つ白粉花火のあとのごと  
にいにい蝉気弱に雫止まぬ杜  
にいにい蝉鳴き出す雨を振り切つて  
まんだら花力尽きつゝ喇叭咲  
向日葵の棍棒めく茎土堅し  
からからに乾く閻伽桶百日紅  
送り盆真昼の水の臭みなし  
葛の霏さびしき道のつきをるよ  
蔓のバネ峯雲もくもく地に聳つよ  
鉢植えにして朝顔の鼎咲  
重ねる凡なる日々に蝶交る  
なかぞらに夏蝶交るは野合めく  
激しきが優しさ揚羽の相愛は  
夏蝶の眩しき野合見てゐたる  
内科医の小声の洩るゝ水中花  
浮かれもの海月渚にとどまらず  
淋しさを託ち海月の群れなせる  
白雲に葛は霏立つ蔓振り上げ  
長雨にことし少き蝉の穴  
待ちきれぬものあり蝉と安産と（長男第二  
子誕生）  
蝉の穴暇を潰すに少し馴れ  
道なき道い行き灼け蔓夥し  
梅雨明けの地震一揺すり東北を  
日盛りの坂の勾配下りて知る  
夏タオルに包まれ赤ちゃん面会日  
朝鮮唐棉たんたん狸のふぐりぞな  
のうぜん燃え長々続く墓地の塀  
人様のとる夏休み傍（はた）よりみる（年  
金暮しなれば）  
人ごとのやうに吾に来る夏休（年金暮しな  
れば）  
上の子の口とんがらせ蝉自慢  
あめんぼの親玉カヌー江をすべる  
しどけなくなりし木槿を雨咎め  
こんなのは雨に入らぬ祭かな  
丘に消ゆ農道丈余のたうもろこし  
籠指してけふの戦果のいにい蝉  
回想は何處か似るもの踊の句  
魂迎え昔からある醤油差

露伴忌のいやにしづかな日雷  
ぎこちなく曲りバツタの飛翔線  
臍の緒を持ちて退院汗かきママ  
一湾に吹き込む風や宵祭  
舟小屋の錆びる一方露草咲く  
日盛りの波倒れんとする際の照り  
天青く白さるすべり鎮まりぬ  
ごによごによと愚図りてゐしが嬰昼寝  
日空より降って湧いたる碧揚羽  
蓮の実に空席ありぬ傾く日  
朝顔に市の青空展けつゝ  
向日葵の長けしを容れて空の丈  
揚花火その名隅田の恋ごころ  
ウインドサーフィン組立簡単草の上  
ウインドサーフィン乗り出す朝の風優し  
浜明けて砂の驚く花火殻  
赤詰草摘んで露浴ぶ女の子  
赤とんぼ浜吹く風は一息に  
昼顔はいつまで咲く花まだ咲いて  
蜘蛛の囀の風雨に負けぬ粗作り  
昼顔は小出しに咲いて雨の日々  
片陰を選びて図書館返りの道  
老人の我流体操カンナの辺  
老人の屈伸体操蓑虫に  
夏曉の関節鳴らす徒手体操  
鳳仙花纏綿たるが頭占め  
罅の入る舗装路裂け目車前草生ゆ  
舗道脇雄日芝長けてしたたかに  
曇り日の明りを集め椿の実  
車前草の広葉にしとど夏の露  
誰が集めし松笠夏の砂浜に  
夏曉の散歩の顔の血色よき  
松を見て夏の浜辺の風太郎  
百日紅嬰児泣ごゑ滾らせて  
かなぶんを捕って抛りて戸をびしゃり  
灯取虫黙らせんため灯を消しに  
外に洩るゝ嬰(やや)の泣ごゑ紅蜀葵  
二階に赤子階下になぶん喚く家  
潜みゐし昨夜のかなぶん灯を取りに  
短夜の赤子の夜泣き二階より

やうやうに夜泣き納まり夏の虫  
姉となる嬰と摘む浜の赤詰草  
砂の上に醒めて線香花火屑  
紙繕げに露けく線香花火屑  
露しとど帯びて線香花火屑  
浜明くる砂地育ちの車前草に  
朝顔に孫もう一人殖ゆる家  
浜に降る露帯ぶ砂を踏みしめて  
なまくらなにいに蝉は楠の木に  
風蘭も花了ゆ古刹の立木空  
夏櫂正面に据え写生帖  
碧揚羽大木せせり登り越ゆ  
蝉捕りの子が来て去りて称名寺  
赤ん坊の欠伸おしやぶりママ昼寝  
炎昼の太鼓橋下亀交差  
小火さわぎ事なきを得て鹿子百合  
鉛筆で寸法計る夏木立  
鉛筆で遠近計る夏景色  
夏櫂そっくり写す写生帖  
あめんぼう鯉の曲れる余波喰らひ  
牛蛙古刹の池を濁らす  
露草や剥落とどめ難き弥陀  
峯雲より滑走ジェットコースター  
原稿の枡目形なり朝顔棚  
自転車も人も豪雨に濡れ鼠  
ちびっ子の水着姿やつんと尻  
潮浴びのタオルサンダル極彩に  
蟹さんの型押し遊び灼け砂に  
錦鯉真昼の銜鎮まりぬ  
海を見て浮輪ふうふう膨らます  
子の三人跣足でちよこちよこ砂遊び  
赤子と蝉張り合ひ泣ける増嶋にて  
白詰草伝ひ来る風すずるにて  
尺を越す鯉の徘徊盛夏かな  
夕立の雨風一過禽たけく  
昼寝子の浅蜩の如きこゑ洩らす  
はまなすの花と実の数実が勝ちて  
庭先にけふ空蝉を見る朝  
蝸牛寄り易き木ぞ月桂樹  
蝸牛喃語庭より聞こえけり

寄り来し蚊問答無用と打ちにけり  
断り無く入り来し蚊なれば平手打  
でで虫の角さえさはれぬ女(め)の子にて

(孫)

目に見えぬ程の雨ふる空蟬に  
空蟬のしがらみほどこき遣りにけり  
空蟬の確執に似て縫りざま  
家に入る小雨に追い立てられ藪蚊  
葛の花岩勝ちの道なほのぼる  
浜日傘少年の日のごとく見る  
蝸牛来信の無き郵便受  
雨降って所在なき日の露見遣る  
朝顔のほどよき数の四五六花  
蟬の穴社の土を雨穿つ  
小雨にも耐ええで病葉降れるなり  
庭中のでで虫蒐め一つ木に  
蝸牛遅々と幼な眼の高さ  
角つつき子はでで虫の調教師  
うたた寝覚むあなた病葉降れるなり  
巨き葉の翳振りかぶり昼寢覚  
蝸牛小雨の幹を急ぎけり  
空蟬のこれさきがけの一つならむ  
雨ぱらつきけふ林火忌の月に入る  
雨ありて咲きあらたむる白木槿  
さるすべり白を尽くして咲き勤む  
雨上り耳に染みつく蟬一つ  
雨むつと杜の当りで蟬鳴けり  
蚊遣豚造形の美を極むなり  
蚊遣して金魚掬いの後の闇  
蜘蛛囀の破れ継当てるには大き過ぎ  
古漬の胡瓜好みて食細し  
草刈機辺りの草が震え立ち  
草刈機一気呵成とぶん回し  
強烈な日に砂日傘出兼ねたり  
喘ぐのみグウの音も出ぬ暑さかな  
梅雨明けず団扇積まれてあるばかり  
大雨に梅雨明け前の一夜かな  
梅雨明けず雨夜の煙草ふかしても  
大雨の夜を蚊と一つ屋根の下  
近頃の蚊いぶし随分いい香り



● HAIKU200308sono1

ごきぶりの見き即ち手だてが不充分  
ごきぶりの疾走厨の闇伝ひ  
鬼灯の咲く露地雨の三田界限  
朝顔に大きな顔を傾けて  
蝸牛明るさ残し去りにけり  
蝸牛妙な明るさ遺しけり  
蝸牛立ち去りし跡明るくて  
紙一重藪つ蚊窮地脱しけり  
でで虫の引つかかる殻さてどうする  
蝸牛向き替ふ角を立て直し  
人の吐く炭酸ガスを求めて蚊  
蝸牛濡れ竹棹のうらおもて  
竿の上滑り易くて蝸牛  
蝸牛目指せるさきに峠あり  
朝のあめ気紛れなれば蟬も又  
痩せ土を木葉穿つ送り梅雨  
家族ごと家空け隣家夏休  
萍の賑わいぶりも田を打つ雨  
のめり込むことは固より蝸牛  
尋常な大きさならぬ蝸牛  
夕立雲雨と別個に急ぎ足  
後追ひの雲に追はるゝ夕立雲  
大夕立煙草ふかしてやり過ごす  
病棟の喫煙一族夕立見て  
採血の血止めする間の百日紅  
夕立あと町空響き易きかな  
驟雨過の碧眼雲の隙間より  
副作用何が何だか鰻の日  
診療待兔も角長し冷房音  
外来の傘嵩ばって梅雨の廊  
白雨あと夕風出でて磴の中  
バンジョーに亜米利加芙蓉抽んづる  
ずず玉に油のやうな一雨滴  
しゃかしゃかと蟬雨止むを待ちきれず  
舞はせおく俳句の種の黄金虫  
火取虫こんど飛んだら百年目  
その管で血を盗むとはもつてのほか  
炎昼の玩具転がしある一間  
花茗荷庭は眺みて歩くもの

家を出づ先ず一歩から暑からむ  
お願いを連発する子夜店の前  
寒ささえ交えてことしの梅雨長引く  
その頃となれば芙蓉の欲しき庭  
とりつくるふ術など持たず甚平着  
昼寝する私はわたし妻は妻  
金魚掬い扱い難き出目金にて  
コップより腹へ移せり生ビール  
ビール酌む初老の味はほろ苦し  
ビール酌む腹のくびれに眼を落とし  
ビール酌む遠廻の一つ欲し  
蟬しぐれお産に一人目二人目あり  
振り塩の穴の目詰まり梅雨長引く  
ビール注ぐ先に喉元鳴るごとし  
投げやりの子に付き合ひて蟬の昼  
昨年を引き合ひに出す西瓜売  
のうぜんは空にほてりてうはのそら  
捕虫網戻りはママがうち担ぎ  
鴟の昼絵本のつづきせがまれて  
眉唾の壺購へば昼寝覚  
焼むすび潮浴びの手の萎びをり  
雨土に名乗りあげたる花茗荷  
夕立あと道颯爽と行くごとし  
喜劇王南瓜の笑ひ止まらざり  
新涼の泥を落として根菜類  
落蟬の一つもあらな石だたみ  
雀斑殖ゆ初老の肌へ団扇風  
一つだに風鈴鳴らぬ真炎天  
日盛りの社の雀咄々と  
夕立のすぐ止む白亜の病院に  
捕虫網破れかぶれに振る始末  
向日葵の謹厳実直背を正し  
炎帝を祀りあげては避く齡  
夏暁の露結びたる一流木  
難題は脇へ退けおき諸焼酎  
一匹も捕れぬと投げ出す捕虫網  
行きずりの人になだるゝのうぜん花  
月替れば海月の軸など宜しかり  
音のして簾の向うそれつきり  
朝顔の葉叢隠れに大きな花

草抽いて生々しきは女郎花  
未明降る病葉広き水の土  
棚に蔓遊ばせこの家明易し  
仏滅や鳳仙花散り地を焦がす  
太陽の黄をまざまざと女郎花  
短命な木槿の白を掻き集め  
向日葵の父情を篤く佇ち尽す  
蟬の穴そこを素通る子のズック  
産土の櫛老いしめ蟬しぐれ  
水馬一日搔いて水澄めり  
夏枯れの松松林に立ち交り  
蟬の穴辺りに配す夏木たり  
苦瓜は蒼くすずしき汗かけり  
夕立雲下ゆく雨に檄飛ばし  
朝顔の葉裏葉裏に隠れ花  
朝顔に風新しき朝朗  
白むくげ降り抜く雨が見えてくる  
蚊を撲つと眼を宙に漂よはせ  
蚊を打てる妻の物腰決まりけり  
産土の朝もやもやの蟬鳴けり  
だんご虫節々返す薄暑光  
女郎花空に明るさ加へけり  
そこにゐる藪つ蚊打てと目敏き子  
冷蔵庫開けて西瓜に目のなき子  
朦朧の夏は茶漬けに限るなり  
厠にも蹤さくる金魚のうんこの子  
これ以上木槿散らすな暁の雨  
孫と空あふぎ蟬さん鳴かない日  
夏休み孫来て我が家に我が座無き  
じわじわとしのび寄る暑を蔑めり  
寄り道をしてをる夏を蔑めり  
油蟬けたたましきを黙殺す  
天を衝く向日葵も入れ一家族  
葉の浄らまだ花つけぬ紅蜀葵  
石鹼玉割れる子供の針の指  
蟬の夏来たる湯殿に脱ぎしもの  
けふ暑くなること確かまだら鯉  
赤ん坊敷布妙なる天の川  
洗濯ばさみけふも働く夏休  
赤ん坊の気配探りに涼しき目

朝顔の絵団扇骨組みくたびれし  
朝顔のけふどんな色毎朝見る  
祭果つ杜を冥めて鬱たる樹  
蟬来ると声うわずって手を引く子  
夏休お絵描き上手吾の顔も  
碧天へいきなり到達雲の峯  
油蟬捕り損ねたる羽の音  
白芙蓉鎮まらぬもの鎮めをり  
大リーグ投手のへばり見ゆ夏場  
百日紅散り継ぐ心のこりかな  
夾竹桃一難去ってまた一難  
蚊のこゑの何處と探れる耳の向き  
草の間の雨水澄めるや月見草  
蟬鳴くか鳴くかと待てる口あんぐり  
蟬啼けり七五調とは云へぬ音に  
蟬捕りの覗いてゆける門被り  
堀り抜きし土は何処へ蟬の穴  
湯舟より嬰を抱き取りて夏タオル  
蚊を打ちし手を洗ひをり何もて拭く  
蟬の穴あればあるものこの通り  
蒟蒻のまだら斑波乱ぶくみのそら  
過敏にて何を血迷ふ油蟬  
しじみ蝶秋とおもへる風吹いて  
過敏にて油蟬また逃しけり  
子の昼寝バイキンマンにうなされて  
精悍な蔓の中にも怠け蔓  
寝不足の顔の廻りの蚊を叩く  
唸りては蚊のよく飛ぶ日ピカドン落つ  
百日紅老残の幹したたかに  
みるからに根っこが丈夫夏木立  
白木槿箒の音のふと止まる  
白木槿朝がこんなに冷え込んで  
三伏の口油こき胡桃菓子  
吾が敵は煙草心臓病める夏  
汗臭しきのふの酔豚うまかりき  
からり晴れ金魚の水替え日和かな  
出土器のうす紅風死す考古館  
向日葵は灼けて土偶のおほらかさ  
夏休家駆け巡る跣の音  
土偶見し眼にたたなはる雲の峯

水切ってそのまま皿へレタスの涼

夏休ジグゾーパズル壊しては

八月のけふより何か始まるか

炎天下三半規管に従ひて

糸を引く速球カンと振り抜く夏

蝉鳴いて家を出たがる子の勢ひ

夏風邪の鼻紙使ふ一二枚

樟脳は霞となりて筆筒内

羽蟻また紙に包んで捨てにゆく

畳ある限り羽蟻はそこへ落つ

百日紅覚えてゐしが忘る路

秋草の思ひ出せずにあるその名

ピカドンの落ちしその日の虫しぐれ

冷奴魚醬明るく広がりぬ

おすましに鯛の目玉や魂迎え

朝顔のキミガワヨウワを聞いてゐる

麦茶いま沸騰減る湯に水を足す

大西瓜割りて疲れを癒すいろ

何故か来て一日一度金魚のまへ

邯鄲の序奏葎の奥深く

蚊の止まる耳搏ち据えて耳が莫迦

とりあへずこつちの方へ炎天下

「爺（じじ）大好き」殺し文句に風船買ふ

朝の蝉飛んで短き声発す

夏休テレビひねればドキンちゃん

朝蟬の寝言めくこゑ直（じか）に聞く

睡魔来てどうしてよいか判らぬ子

焼茄子にまづまづ食のすすむなり

茄子を焼く熱気厨に籠りたる

郊外や雨の襲へる夏葎

身を投げて孫の眠れる蚊遣豚

討ち取って紙に挟みて羽蟻捨つ

うなされてママの名を呼ぶ熱帯夜

篝火が画面をよぎる鶉飼かな

仏壇より借りくる葉月のチャッカマン

蝸牛の渦より宇宙膨張説

妻用意の昼餉小さな蠅張に

アイスティーぐびぐび飲んでまた寝る子

我が儘がそのまま通り氷菓嘗む

瘤多き樹といつか知る夕かなかな

蟬に尿（しと）など掛けられてたまるかと

蝉啼いてだんだん傾斜一本杉

足許の何に根ざして思草

蚊柱の柱うち捨て立て直し

ルーペ付辞書抱え来て暑苦し

冷素麺いっぽん掬ふ昼日中

糸屑が絡まってゐる滑齒筥

釘掛け違へて診療室を出づ

● HAIKU200308sono2

花火待つ東京湾の灯の鎖  
揚花火どすんと島を揺すりけり  
猿島の向う側にも花火舟  
どんみりと海黒ずみて花火待つ  
島影の黒いや増して花火待つ  
釣舟の灯の瞬きも花火の夜  
花火の下潮涼々と流れけり  
大玉の花火に見惚る団扇かな  
大花火硝煙海をただよへる  
赤き目の大き魚の花火かな  
海原の闇を展きて花火かな  
豆を煎るやうな花火もあり余興  
海原の真つ赤に染まる花火かな  
バリバリと天を焦がせる花火かな  
硝煙の間垣間見ゆ花火舟  
打上げて島浮彫りに花火かな  
首根っこ打てる花火の大碇  
餅花のやうな花火の輪の中に  
舗道ゆく犬の爪音八月盡  
街をゆく脚を払ひて大西日  
夾竹桃路傍に長けて壁なせり  
横須賀の西日ひりひり腕螯す  
八月の横須賀埃臭き町  
横須賀の暑を逃れむと泡盛に  
横須賀のサンダル履きの開国祭  
一夜にして自転車捉ふ蜘蛛の糸  
空蟬を当てなく蒐め深き昼  
また一つ空蟬加ふ机の上  
空蟬の興はや失せて掌に残る  
机上に風起ちて空蟬吹き転がす  
空蟬をあまた蒐めて手に余る  
月日過ぎ易く空蟬の爪に泥  
孫帰る空蟬一つおいてきぼり  
空蟬の前脚の泥乾びぬし  
空蟬とHOPE机上に昼闌けぬ  
空蟬を机上に置いて散歩果つ  
空蟬二つ並べて置いて消灯す  
空蟬を湯呑の側に置いてみぬ  
空蟬のやがて忘らる机の上

傾きて空蟬灯影曳きみたり  
空蟬も蟬も入れられ一つ籠  
空蟬を孫歩まする卓の上  
誰が置きし空蟬一つ電話の辺  
空蟬を砕かむとする出来心  
火があらば空蟬くべて手向けけむ  
空蟬の爪先少し焦げてをり  
腑分け図のごとく詳しく空蟬描く  
空蟬のかけらも入るらむ長寿薬  
空蟬になほ漲れる糞力  
みんみに云ひ負かされてをるごとし  
女の子蟬がさはれるやうになり  
蟬捕りのけふの巡回始まり  
我が庭にのつぽの木あり蟬捕り来る  
佃煮のやうに詰め込み蟬の籠  
愚図るこゑ蟬籠提げくる子なりけり  
虫籠に虫籠突きだし比べっこ  
蟬しぐれ引いて社の風俄か  
杜の樹々杜に生まれし蟬宿し  
ひりひりと鳴く蟬風の炎(ほ)に触れて  
捕虫網継ぎ足す棒が見つからず  
捕虫網ひっそり置かれ孫は来ず  
見て呉れと眸が云ふ僕の捕りし蟬  
みんみん蟬魔が差すやうに啼き止みぬ  
いつも母連れて蟬捕り内弁慶  
ここに來て蟬鳴くほんの二三日(にさんち)  
前  
蟬を捕る極意暫く鳴かせてから  
一步入る夕蜩の鉦の域  
蟬泊めて八幡様の夜の茂み  
夕蜩鳴きかけてまた止みにけり  
蟬留めて立木の昏れむとするところ  
子の相手などして夏を逝かす母  
母親の夏は過ぎゆく子を相手  
孫去って風鈴鳴るよ風吹くよ  
孫去って風鈴の音の徹る家  
風鈴を鉦と聞く日のありにけり  
風鈴の朝(あした)小出しに音を立つる  
風鈴の吊り初め軒の風を待つ  
軒風鈴まだ覚めやらぬ面持ちに

南部鉄風鈴その名に羞じぬ音を  
けふつつがなし風鈴の音に馴れて  
風鈴に祭のほてり醒ましをり  
風鈴の音のひるがへりひるがへり  
風鈴のときに悄然はた凜然  
梅雨明くと関東甲信一くくり  
少し酸きぶだう八月生まれり  
この暑さ躰がついてゆけぬといふ  
晩涼の物故者欄に眼が止まり  
捻子一つ拾ひて半夏の首傾ぐ  
江ノ島をうしろに廻し泳ぎけり  
晩涼の沖に目を遣りダルメシアン  
青空は灼けてそれゆけアンパンマン  
蜘蛛の囿の破れたるまゝ水を打つ  
浜木綿のざんばら髪は幡随院  
一日少なく一日ここだく鉢朝顔  
鉢まるくまるく金魚の平常心  
浮いて又沈む金魚に眼を上げ下げ  
くろもじの幹黒々と盆がくる  
咲き悪き花と見上げて百日紅  
罷り出ておろおろするな真炎天  
なまぬるき麦茶の飲みかけコップ乾す  
荒脛に潰されし蚊を払ひ退け  
冷やし茶に炎天眩しみゐたるかな  
赤手蟹の産卵報ず神奈川版  
吾が体調悪き日蟬音ぎくしゃくして  
金亀虫沙羅の葉叢に目を避けて  
炎昼の短編読むにも根気失せ  
葛の花道とぼとぼと山がかり  
殺虫剤目をつけられし夏菊に  
虫喰いの夏菊ひよると長けにけり  
夕立に降られ並木を牛蒡拔  
くさされて二番煎じの鮑の句  
祭の夜半ベソかいて躑きゆく子  
夏掛を挙げ句の果てにぐるぐる巻  
夜涼呼び窓の市松模様の灯（団地）  
暑のやはらぐ風に乗じて家を出づ  
病葉を泛かべて濁る阿字ヶ池  
病葉となり散り果つる日のいつか  
病葉の何處かに落ち度あるならむ

岬一日フリーきつぷで潮浴びに  
造物主たはむれに成す蜥蜴の尾  
夢のまた夢みてからすうりの花  
一夜経て悄然からすうりの花  
炎熱に打たれすごすご戻る道  
そよりともせいで日中の風知草  
蚊帳吊草玄燈のいつ始まるか  
昼顔の白はのっぺらばうの白  
草むらのこんなところに月見草  
昼餉また茶漬にしやうか百日紅  
団扇風かう暑くては物足らず  
茄子がまた手を変えて出て夏料理  
夏掛や肋押さえしまゝ寐落つ  
夏灯この家子がゐて夜いっぱい  
二三年使ひ古して軒簾  
古簾取り替えやうかこの辺で  
滴れり三葉虫の昔より  
羅の二人はよけれ納涼図  
お花畑こゑはずれども人見えず  
片陰の一旦ここで途切れをり  
片陰の続きに入るに十歩ほど  
短夜を寝ねんとすなり肋に手  
金魚の水掻き混ぜてゐる劫暑かな  
症状の因（もと）の知れたる涼しさよ（薬  
の副作用と判明）  
一切を天に預くる涼しさよ  
日々のこと天に任する涼しさよ  
雲風に行方任する涼しさよ  
一切の通弊を断つ涼しさよ  
線香花火沓脱石を焦がしけり  
手花火を一本頒けてもらひけり  
ありありとけふのこの日の残暑かな  
半裸にてけふも暑さと奮闘す  
疎開地に話は終始魂祭  
病名も十年経たり凌ぐ夏  
気さくなるメールで済ます夏見舞  
惰げるさま漫画のやうに水の中り  
忙殺てふこと今は無し軒風鈴  
棗の実エホバのこしらえたりしもの  
花火の煙海月となりてさすらひぬ

露伴忌の眼光紙背に徹すひと  
本意（ほい）少し外して詠めり夜の秋  
妄執より蟬解き放つ機（とき）来たり  
青天に白さるすべりを置く美学  
この暑気に女房手づから掻き氷  
油蟬囃せる家の前後かな  
山林に蟬の蛮声おとろえず  
風蘭を咲かせて銀杏おとろえず  
旅促す黄菅咲く野の大写真  
斯く照れば蟻も眩暈をおぼえけむ  
鍛えたる角いつ使ふ甲虫  
千日紅触るもの皆ほてるなり  
高原のレタスは淡く炎え立ついろ  
烏瓜咲かせ占ふ陰陽師  
風知草正午過ぎれば風非らず  
河童忌の肋撫でれば風の来る  
夏瘦は風体のみに非らざるよ  
尻腐れ座りづめなる布袋草  
梅干茶漬うだる暑さを乗り切るには  
鰻の香ながす鰻松あな憎し  
鰻松に入れば鰻のやうな客  
老眼にも効き目のありや土用蜆  
江ノ電の材木座経て土用波  
土用波根付若布をうち揚ぐる  
かばかりの蔵書晒して虫払  
アンパンマンは卒業とある夏見舞  
拡大して紙魚の歯なんぞ見てみまし  
拡大して紙魚の歯見たし厚ルーペ  
楊梅の埃をかぶる土用かな  
古簾かさとも云はぬ土用かな  
ドアのノブ日に温もれる土用かな  
古漬に顔を顰める土用かな  
風の吹く浜辺がよろし避暑散歩  
万人はこぞりてこぞり過ぎて避暑  
曜日・湿度・暑さ教ふる掛時計  
真夏日の電波時計といふを買ふ  
杖ならぬ気丈を頼み避暑散歩  
吾が避暑とは浜辺一巡して来ること  
遠方より朋有り森の火取虫  
羊羹が何故か効きさう夏バテに

水撒きのホース持つ手の西日焼  
孫痒がる素足可成の虫螫され  
避暑散歩浜昼顔を摘んで来し  
かくなれば蟬の殲滅計りたし  
夜の蟬にひりと啼かれてする戸締め  
消印はマッターホルン避暑便り  
浜木綿に浦賀水道日を湛え  
遅しき空蟬の脚剥がしけり  
天草干し吾を余所者扱ひす  
天が下村道を借り天草干し  
空蟬の鋼の足腰とこしなへ  
大西日宝篋印塔段（きだ）を成し  
空蟬の宝庫と巡る興半ば  
反転し波蹴る磯の海月かな  
海月の笠向き変ふ自力はた他力  
遠廻聞きこの部屋に窓三つ  
風鈴の連打湯上り長椅子に  
家建てるまで空があり夏の月  
患者らの喫煙兼ねて夕涼み  
花ことし乏しく残念百日紅  
薬局の商へる灯や夏の月  
渚まで熱砂跳ねゆく跣かな  
真砂踏むよさを知りたる跣の子  
朝蟬のおのれに聞かす独り言  
朝替へる肌着羽化せる蟬のごと  
虫籠の棧に掴まり弱りをる  
亀だけが元氣な池の早かな  
なまくらな鉄を使ふ大暑かな  
グラスの輪机にのこる大暑かな  
熱帯夜網戸をせせる羽音して  
自転車を留めあるところ片陰り  
部屋に五人昼寝の浅き患者かな  
網戸打つ音も大物火取虫  
アッパーカット啖らひしごとき極暑かな  
涎出づこのていたらく昼寝覚  
鉛筆が敷布より落つ昼寝覚  
枕辺に鉛筆置ける夜の秋  
片陰を暫くゆけば落ちつきて  
分銅の飛び来ることく黄金虫  
炎熱のこの段（きだ）ゆけば閻魔庁

恐れ入る赭ら顔して閻魔王  
閻王の怒りに触れて石になる  
閻王の有無を云はせぬ眼（ま）ナカ  
金魚の水さみどり帯びて来たりけり  
海見つめダルメシアンの涼しき斑  
昼寝覚まじまじ見ゆる暈の目  
スペースをづらして作る冷蔵庫  
島庄す大音響の大花火  
大山の水が命の冷奴  
匙縦に使ひ掘削氷水  
倭をおもふ阿倍仲麻呂夏の月  
旅先で拾ひ来し石水盤に  
端居する柱替りに嵐山  
鉛筆を取りに腰上ぐ夕端居  
端居人木槿に視線投げかけて  
噴水の豁達木椅子に恋雀

● HAIKU200308sono3

完熟のトマトと日増しに盛る蟬  
みんみん蟬擦り寄るこゑの鳥澁がまし  
みんみん蟬平常心を搔き乱し  
茫然と蟬見るあまりに高ければ  
汗を拭く手拭い一枚けふの分  
生身魂達者に写真撮りあるく  
水腎症承りしは彼の夏よ  
副作用ならむ腎臓病みて夏  
音を放ちつゝ風鈴のさゆれかな  
白馬岳の空中散歩とは爽やか（観光キヤツ  
チコピー）  
長きこと歯をぞんざいにして唐黍  
ケチャダンスバリの蛙のけたたまし  
ガルーダの悪漢退治星月夜  
ガムランに皇子（みこ）踊り出づ星月夜  
空蟬の眼瞰が差しなまめきぬ  
秋口の本の葉を挟み替え  
風蘭を梢に描く遊仙図  
宿木は神慮なるべし夏けやき  
白昼を玉と沈みぬ大金魚  
蝸牛角の曲芸披露せり  
糸を張る蜘蛛の軽業ご覧あれ  
蟬捕りのまた来て櫂に對ひあふ  
芋の葉にあまりに広きけふの空  
阿佛尼の逗留せし地の百日紅  
蜻蛉来て賽の河原に羽音颯て  
珊瑚樹の実と夏枯れのこゑを出す  
蜻蛉を肩に止まらせ板碑あり  
秋口の二等船室破れ昼  
花火会場仮設廁を多々設け  
なかなかに尼が住持の百日紅  
一遍の踊り念仏虚空より  
食客を養ふごとし南瓜畑  
居候然とし一つ大南瓜  
鳳仙花彩づけせむと薄む紅  
水差して朝顔のいろ溶きにけり  
秋海棠咲いて秋口早めけり  
とどこほりなく済むお産秋海棠  
おしろい花咲いて質屋の路地の角

蟬の穴辿りのぼれば百観音  
法師蟬風に飛びくる風来坊  
まのあたりどの木と云はず油蟬  
道元の山色恋へる溪の蟬  
吾が宗旨曹洞宗と蟬啼けり  
太平の夢を破りてジユクと蟬  
捕りし蟬放ちやれとはあほらしき（孫）  
扇骨の諸処あらはなる残暑かな  
芙蓉咲く午後から出掛け書道塾（母）  
窓に人ちよんと描きて芭蕉林  
一幅の絵になる寺の芭蕉林  
法師蟬奢る平家を語りけり  
竿灯の倒るるところを受像中  
エイヤツとばかり銀蠅盲飛び  
手を擦り抜け九死に一生得し藪蚊  
基督のゐる教会の灼け十字架  
夏草に埋もるる道と略分り  
ビリヤード息吹き返す夜の秋  
湯の町の廃れ葛生ふ空き地此処  
燈火親し袖珍文庫二色刷り  
捕虫網大風来てぱたと倒る  
色草の一つ青花空き地埋め  
紺碧の極みと云わん葛のそら  
すぼまる花芙蓉木槿と数え上げ  
海女小屋は楽屋のやうな佇まひ  
蠶（けば）のある一本の蔓鬼貫忌  
梓川こんな調子で流れけり  
夕顔の大豆役者揃ひ咲き  
灼熱に打たれ強かり女郎花  
桔梗の蕾祈禱の調度に似る  
大首の役者顔なり夕顔は  
油蟬一会の鎬を削りけり  
湯けむりは葛の上より八幡平  
片づけるきのふの月の膳のもの  
葛ちぎれ此処に落盤ありしかな  
鬼やんま近々と見て物々し  
冷やし酒徳利を這ふ蔓模様  
風迅くなる趣の花芒  
わが家居いま散りどきのさるすべり  
葛の散る金沢道をたづねけり



雑兵のごと空蟬の地より湧く  
葛畳大きく反りて山を越ゆ  
密封のへくそかづらの荅解く  
鬼貫のこころ尋ぬる忌日なり  
空蟬のぶら下がりをる葉っぱかな  
葛嵐眼下に下山早めけり  
木鋏に木渋かたまる土用かな  
ハライソは此処から近し露葎  
ハライソはこの真上にて露葎  
パリパリ感好きでレタスとフランスパン  
お三時の西瓜頒ちて妻と我  
西瓜切り妻に一片吾に一片  
毎日の蟬に聾を決め込むや  
棒ぎれに棒ぎれ足して捕虫網  
来客や白さるすべりをうちあふぎ  
先ず咲けば大小問はず鉢朝顔  
熱泥のカレー煮立てて暑に対す  
百合の筒母が覗きしあと覗く  
藪枯らし中途半端にむしりけり  
切実に言葉を使え白桔梗  
踏み込んで後の祭りの蜘蛛の囲や  
デスマスクとらるるやうに蜘蛛の囲に  
夏の虫けふときのふの継目の闇  
口はさむ余地なき蟬の天下かな  
野次馬のやうに馳せゆく蟬見たり  
肩を打つ蟬に驚きあるきけり  
女湯と記す赤文字秋めきて  
蔵壁の質屋の上の夏の月  
一つ樹に鳴き競ふ蟬伯仲す  
蟬のあと追ひたくなりぬ大御空  
ふんだんに掛湯を浴みて蟬しぐれ  
蟬音沁む洗濯ものを取り込み  
快川の教えを守り蟬啼ける（心頭滅却すれ  
ば火もまた涼し）  
八幡の杜に君臨熊蟬は  
耳たぶを押さえて花火怖がる子  
佛足石かげろふて見え真炎天  
車前草に埋もれて道は有るには有る  
妻横に寢息を立てて蟬しぐれ  
一合と半が晩酌蟬しぐれ

晩酌に手とりばやき冷奴  
寝惜しまん一夜とてなく暑にふて寝  
端居して吹き込む風の通り道  
利尿剂利きて床起つ夜半の虫  
虫滋しやがてここにも家の建つ  
楠の蟬逃げ来し蟬に並ばるる  
砂の城壊して築き浮輪の子  
落雷の箇所はバッテン氣象地図  
かるめ焼おたまの上の銀河系  
蟬に網被せてよりの立回り  
仏閣に病葉といふ落し物  
螻螂の貌がヒントやキュービズム  
蟬の穴名残りどどめて秋思の目  
しじみ蝶あちらと思へばまたこちら  
陶工の筋金入りやきりぎりす  
螻螂の美学を学びジャコメティ  
螻螂の斧見よ一点豪華主義  
芋虫の嫌はれて地を這ひにけり  
螻螂の子の揶揄されてへっぴり腰  
摒いとも軽々越せり黒揚羽  
質蔵に月高まりぬ寺前町  
石畳真一文字に星月夜  
こつちからあつちへ月の通り道  
新築も交え月照る屋並かな  
蚊柱の柱のづれを立て直す  
所思あまりにあらはにしては雲に鳥  
芋殻の輪切りの中に箸入るる  
芋殻の輪切りばかりと泛かぶ椀  
芋莖とはえぐさ記憶に新たなり  
肅と蟬発たする天下一の鐘  
秋風と俱に子規庵尋ねばや  
蟬啼けり鎮護国家の大寺に  
護国寺の蟬肅々と啼きにけり  
吾そこを離る直後に来たる蟬  
日に幾度蟬入れ替はる櫂とも  
日に焼けて投手地肩の強さうな  
蜻蛉がお手本人力飛行かな  
蜻蛉の好みて止まるダンボール  
朝曇黄のうちかすむ女郎花  
女郎花模糊と黄を刷く朝曇

黄は艶なり長けては灼くる女郎花  
くさぐさの団扇の中のお気に入り  
蚊にくわる腿を女房見せにけり  
尿（しと）もよほすちから西瓜にありける  
や

秋蝶のうしろ姿をなほ追へり

残照を恨める軒の簾越し

秋蝶の羽根立てがたく開き来し

茗荷の子洗へるときの土ぎはり

生真面目で面白からぬ胡瓜買ふ

生真面目で退屈胡瓜であるぞな申（も）し

胡瓜皆すんなり基準値合格品

待望の銚子が沖の秋刀魚なり

秋刀魚出す皿に落ち度がありにけり

長身の秋刀魚に適ふ皿を出せ

冷蔵庫に西瓜入れあるぞと出掛け（妻）

額艶やかに螭螂の妙好人

鶏頭の写生何とかまとまりぬ

鶏頭の鶏冠墓地に見え隠れ

鶏頭の走り出しさう墓地に風

鶏頭の卒倒しをり他所（よそ）の墓

落とすものあと命だけ水飯（みずめし）

水飯の彼の日を母の語り草

仏花溝萩枯らしてしまひけり

仏壇にこれといふ花なければ桃

仏壇に梨の坐りの全しや

もう一つ鳴く蟬殖えてまったくもう

サンダルを履き違へ来し甚平着

裸に何か引っかけて出る玄関さき

裸にて客と応対するはめに

タオル一枚はおる裸やバツ悪し

まだ寝ぬと伝家の宝刀泣きを入れ（孫）

夏芝居なんて一度も見たことなし

昔でいふタンクトップの水着かな

● HAIKU200308sono4

つちくれが爪に乾びて空蟬は  
台風にはや溺れぬる草のいろ  
台風の近づいてゐる千草の葉  
八千草の台風を待つしづごころ  
苦瓜の葉陰の花の薄臉  
夏落葉祭のあともよく散るよ  
踊唄戸をいっばいに開けて聞く  
盃蘭盆や勝手にゆけと道があり  
更けて出づ風の吹き消す踊唄  
甚平着こころもとなき脛たたき  
甚平着て初老の脚の踏みごこち  
傍からの視線固より甚平着  
西瓜の種子西瓜の汁に染まらずよ  
大昼寝などと小莫迦にしてゐしが  
昼寝癖板についてはあとめんだう  
台風報報じ直して俱全域  
台風をカンナは知らず暗雲裡  
地場野菜胡瓜が太し牛蒡瘦せ  
多のこ草首を振り振り台風裡  
台風の眼の中の蟬憶せずに  
暗雲の空を睨んで鳴く蟬も  
葛蔓の何を仕出かすこの勢ひ  
台風に捨て身の蟬音脱帽す  
蔓といふ蔓を台風一掃せよ  
澄みわたる月と甕と盆踊り  
うすみどり厨の前の胡瓜棚  
盆踊り丸提灯と長提灯  
盆踊り月が出た出た蟬も出た  
灯を取りに蟬の来てゐる盆踊り  
盆踊りだいぶ大人が殖えて来ぬ  
みそつかす大人に伍して炭坑節  
踊の輪間合の空けばそこ詰めて  
踊の輪広がり風も仲間入り  
ここまででは子供の時間盆踊り  
踊櫓丸提灯を四方へ吊り  
たまらぬと甚平すらもかなぐり捨て  
蟬声の吹きちぎれ飛ぶ切れつ端  
峯雲の最たるを見ずもう月中  
捨てしもの又掻き出して蟬の昼

炎昼の物捨て過ぎて探し物  
あぢさみのドライフラワー一丁あがり  
昼寝覚我翩翩とひるがへり  
火星とは無縁な男銀漢観る  
運命とは命を運ぶとせん蝸牛  
夏蝶に蹤くりハビリの優等生  
自転車を漕いで灯点す夜の秋  
同色よ西瓜と赤いちゃんちゃんこ  
老いたりな西瓜の種子をこぼすとは  
匙嫌ひ西瓜つるりと逃げにけり  
水分の補給大事や西瓜食ぶ  
蟬啼いて後先もなく一緒くた  
風鈴に余りある風面食らふ  
立秋とがなれる蟬に聞かせばや  
あおぞらに一雲もなく秋立てり  
残照の引くや鮎でも見にゆかん  
顔洗ひ暑さ観面引きにけり  
蟬ごゑを薄め薄めて夕風吹く  
油蟬しおからごゑを張り上げて  
冷奴青紫蘇ふんとにほひけり  
冷やし酒注ぐやグラスのうち曇り  
鳴きしきる蟬音何ぞとアバを聞く  
蟬音聞き我も端くれアバ世代  
虫の夜をピアノ小刻みダリエンソ  
バンドネオン晩涼刻むダリエンソ  
センチメント虫の息継ぎダリエンソ  
畳み込むリズム団扇にダリエンソ  
夏惜しむこころくすぐるダリエンソ  
魂をあゝの世へ運ぶダリエンソ  
月も笠被りて島の盆踊り  
墓地越えて風の運べる踊唄  
夕風にすちやらかちゃんちゃか盆踊り  
熊蟬に助走といふがありにけり  
朝蟬のきのふともなく音を絶てり  
杜の樹々明けて小声の法師蟬  
朝比奈道蔓といふ蔓灼けてをり  
かどわかされさうに蟬捕り百蟬に  
月と雲高きをすすみ台風来  
台風の来てゐるといふ南のそら  
台風は荒れて室戸の天打つ浪

ざら紙に蟬の一句を書留めん  
精一杯立つてゐるなり秋海棠  
台風を迎え撃つ花秋海棠  
西瓜赤し思ひやらるるけふの昼  
根釣人島の岩場は灼け白らみ  
節々のまこと逞し秋海棠  
活け難き花の一つや秋海棠  
秋海棠様にならぬと筆投げ出し  
色づくや節ポキポキと秋海棠  
野っ原みち紫苑ほこりを被りけり  
そらに雲地に猫じゃらし靡きけり  
台風の張り手出し投げ何でもあり  
カンナ揺れ台風圏にいつ入りし  
甚平や身軽になり過ぎて困る  
菩提寺へは電車で二時間赤まんま  
せきれいの瀬波よりなほ弾める尾  
台風のそら見てテレビの予報見て  
厨より見るあぢさみの乾燥花  
秋海棠夕べ遅れて起つ風あり  
蝉捕りの後とは知らず蝉捕り来る  
場所替えてみても変わらぬ暑に耐ふる  
顔洗ひ少しは違ふ暑に耐ふる  
強振の三振にして雲の峯  
台風の巻き添え喰って鳴く蝉か  
台風の来る日を蟬の知らん顔  
暑がれる吾を見る家人の迷惑がほ  
台風のこんどは北へ流るゝ雲  
台風の接近降つたり日が差したり  
台風にひらきなほりて真っ裸  
野分雨ザザッと来てはからりと晴れ  
古簾一枚吊りて籠城す  
真炎天雀憶せず足許へ  
底紅や夜風はたはた簷を打つ  
夏の夜のうしろに廻る灯影かな  
白木槿むつむ相手のけふは莫し  
塩壺に醬油が隣る大暑かな  
土用波どすんとうちあぐ物は何  
風絶えてにはかに殖ゆるに油蟬  
つらさうな顔して通る西日中  
一切を放置してをり西日中

放置即無礼につながる夕かなかな  
射るこれが正真正銘雲の峰  
迎え火や芋殻は粗き音立てて  
西日中裸たたきて喝入るゝ  
痛恨の峯雲をそこに置かれたる  
蚊遣香背中の方が手薄なり  
秋刀魚割る祖父の手つきと云はれけり  
蚊遣豚おもしろおかしく過ごし来て  
踏み外すことが愉快でひきがへる  
八月の負ふてゐるもの何々ぞ  
八月の口開けてゐる夢の中  
レントゲン写真涼しや胸に鉦  
簡単に人をくくりて白玉好き  
卑近なる記憶還らず朝曇（母）  
ややこしきは棚上げにしてつりしのぶ  
古団扇きゅつきゅと骨が鳴るやうに  
夜がつまみ捨つものならむ葛落花  
小指なら入りさうなる蟬の穴  
蟬の穴冥める淵に佇めり  
孟蘭盆の夜風を聞いて戸を閉める  
叱られてそのあとけるり心太  
門前に居座ってみよひきがへる  
風の夜をあと一踊り踊笠  
せんなしと知るせんなしをして昼寝  
底紅やよるべなき風ながれけり  
じだらくや朝のうちから昼寝して  
水打つや砂玉となり水まろぶ  
冬瓜に出来を嗤はれ俳諧苦  
目の覚めてしまふ性分あげやすき  
二階にて何かことと明易き  
羽蟻の夜性分ゆゑに口いさかい  
暑ければ死んだ気になり唯ごろ寝  
かなぶんぶん先生口調といふがあり  
病葉の水にしづめる一つかな  
あさがほの種子に遠慮をして咲く花  
流燈の肩たたかれて川下へ  
台風来夜の我が家を驚掴み  
里芋を煮付けておいてビデオ撮り  
いきさつを経緯と書いてばんくら茄子  
けふも明日も晩酌愉し冷奴

冷奴氷截り出すやうにきる  
花かつを懸ければ奴笑ひけり  
灸花そこ通るたび覗き込み  
底なしの向日葵の瞳に映るもの  
七節蟲の単なる棒があるき出す  
人の血を吸ひ取るときの蚊の貌は  
関節を秋海棠も持つてをり  
紙風船凹み具合がまた佳かり

● HAIKU200308sono5

西瓜提げぶらりぶらりと戻りけり  
西瓜提げ毛臍あらはな男かな  
青芭蕉吹かれ来し蟬一蹴す  
坐して待つ人は固より蟬も死を  
木を替えて飛ぶ羅の蟬見たり  
鳴き通すことが全てや蟬非力  
雨禍風禍なき町照らす夏の月  
櫛よりはしなく落つる蟬拾ふ  
蟬非力一陣の風起てば墜つ  
野分あと夜の更けて月浄くあり  
啖ひつく蟬音逃げ場のなき我家  
もう先が無いぞ無いぞと蟬しぐれ  
台風の一夜を境蟬ガタ減り  
躓いてばかり蟬鳴くあらし以後  
なまなまと台風の夜に入りけり  
鰻井を妻に振る舞ふ日なりけり  
ひとごち梅干茶漬かつこみて  
ふうせんかづら煽る風あり懈怠なし  
かなぶんの打身の音をひたと聞く  
かなぶんの突き当たる音生々し  
神業の峯雲を沖に聳たせけり  
野分あとひたに流るゝ雲に月  
澄みまさるあらしのあとの夏の月  
嵐去り夏月そらをわたる見ゆ  
うち屈み秋海棠に独りごつ  
横着は蟬鳴き初めしその日より  
蟬音はやいぢらしき機(とき)過ぎゐたり  
先長し細る蟬音をあけくれに  
蚊の刺せる辺りぷっくり掻き壊す  
行商の魚なつかし干白子  
紙風船へこみ具合がまた佳くて  
氷菓出て踊り子供の時間なり  
何用といふなく出でて真炎天  
何用といふ当てもなく真炎天  
阿字池の守り主にて牛蛙  
吾含め俳句亡者に焚く芋殻  
閻魔庁正門脇の百日紅  
風鈴の空打ときに見せにけり  
さらしくじら摘めば泛かぶ祖父の貌

蟬の穴三途の川へ通じをり  
お手本のやうな御空や野分晴れ  
うつくしゅうみえる家々野分晴れ  
朝顔の鉢外に出す野分晴れ  
是非もなき蟬のむくろや野分晴れ  
門前に落蟬あらし去りにけり  
逝く蟬の分まで鳴けり野分晴れ  
こともなく蟬また鳴けり野分晴れ  
もう一つ蟬落ちゐたり野分晴れ  
隅々に風ゆきわたり野分晴れ  
蜂一つ高きを目指し野分晴れ  
電線のつくづくとある野分あと  
木欵と空蟬縁に置かれあり  
土用芽の庭木透かねば月半ば  
樹々多少自ら名付けて蟬屋敷  
台風を生める地球と金魚鉢  
金魚鉢如何に台風荒れやうと  
鉢底に野分窺ふ金魚の目  
空蟬に空蟬足して四つほど  
机上に空蟬台風は今北上中  
置き忘れられ上ち框に蟬の殻  
馳せ来たりいざ鎌倉の野分雲  
野分雲それより迅く蟬飛べり  
蟬手づまりそんな感じがして鳴けり  
一つ樹に百蟬こぞる野分あと  
おのづから点る街燈夜の秋  
野分して風鈴舌を抜かれけり  
野分あといつもの月が上りけり  
どの家も灯を煌々と野分あと  
空蟬を上り框に忘れ来し  
牛乳屋その横に立つ棗の木  
野分あと長々起きてゐたりしよ  
野分あとこんなところに月が出て  
常に嚙む葉に中り送り梅雨  
手土産に余る白桃頂戴す  
妻と囲碁打ちて暑凌ぎ居給ふや(岳父)  
蟬を捕る猫を上げたりヒバの股  
追伸のごとくに夜蟬鳴き添えて  
濡縁で聞いて夜蟬の腹話術  
仙\*崖の布袋図さながら夕涼み

夜蟬鳴くちよっぴり吾らが会話ほど  
夜蟬鳴く風来てほんのちよっぴりだけ  
月の出のぐうんと低くて東（ひんがし）  
に  
月は地をゆっくり離れ家並の丈  
家並の灯どれも貧しく満月下  
さし招かれ妻の見つけし夕月を  
さしのぼる月と葉騒と夕涼み  
なすことのなんにもなければ夕涼み  
夕月の一刻経ってその高み  
夕月を遮るものなし海つ方  
芋殻焚く腰の高さは皆同じ  
かうもりの盲飛びして夜の蟬も  
夜蟬飛び影絵劇めく晴夜かな  
蠅帳に小さき秋の立ちにけり  
火蛾飛んでワヤンクリットめく晴夜（イン  
ドネシア影絵劇）  
火取虫旺んなる時過ぎゐたり  
油蟬縋りあやまつ軒廂  
落蟬や台風の目は渦巻いて  
ガクと垂れ灼け向日葵の大頭  
長からぬ一ト生を終る蟬の貌  
もののふの風貌に似ず蟬非力  
野分あと斯く減る蟬音拍子抜け  
割れ鐘のごときも居りて三井の蟬  
孫の手と団扇傍へに夏百日  
放浪の木を替え蟬の山頭火  
立秋の枕の位置を正しけり  
夏来ると蟬の方代蟻の守一  
山の神お手討の火蛾捨てにゆく  
朝蟬を虚ろに聞きてまた寝落つ  
朝蟬を風の間に間に聞く日なり  
朝蟬の復唱風の終戦日  
蟬遠音即ち起床どき至り  
夕蟬の途絶えてあとは風の音  
朝蟬の寝言まがひのこゑ一つ  
空蟬を手に止まらせて散歩みち  
空蟬に問ひかけてゐる別の我  
空蟬を蒐めこころの隙満たす  
空蟬の虚々実々の泥肢体

手探りでさがす夏掛あらぬ方  
風の日の夜蟬のおやすみ手短に  
終戦日疎開地談に火がついて  
終戦日諸の話にまた戻り  
ヒリヒリと蟬も山葵も頭を打ちて  
一刷けに曙いろの椿の実  
椿の実玲瓏と朝迎えけり  
灼け灼けて鋼光りに椿の実  
透し百合赤ほしひまま墓地の供華  
木槿一輪妻五十五の身だしなみ  
蜻蛉の所を得たる止まり方  
春夏秋冬今夏孫の顔写真  
箸とりて聞けば朝蟬盛り返す  
朝鮮朝顔花を弔旗のごと垂れて  
広前に立秋の風立ち初めぬ  
落蟬や引算得手とする櫛  
死してなほ厳めし蟬のご面相  
深沈として苦瓜の蠅雫  
萍の聖域犯す蛙あり  
大西日家中何處か傷みをり  
燃えさしの無きやう芋殻焚ける人  
芋殻焚く頃ぞとひねる新聞紙  
扇面に富嶽凛々聳ちにけり  
鳴くまでの手順を踏みて法師蟬  
レシピ付冬瓜売られるたりけり  
落蟬のいろ土よりも濃かりけり  
落蟬の頭の辺りか怪我の箇所  
骰子の黒き一つ目蟬の穴  
西日受け掏摸がゐさうな車中かな  
野外映画鞍馬天狗のをちさん出  
女貞鼻つく路地がまだ残り  
夕日夕蟬ときに夕風起ちにけり  
朝蟬に三たび四たびは過ぎるなり  
万物に蟬音の徹る夕べかな  
空蟬を蒐めておいてとむらはむ  
大野分屋台骨ごと揺すりけり  
揚花火栗り替はりに紀行文  
台風のものおそろしく覚む夜半  
団扇手に薄き胸板煽りけり  
静観の一人を得たる蓮かな

道遠く頭抱えんばかりの暑  
無何有（むかゆう）郷ここにも在るぞ金魚  
鉢

その中の山紫水明金魚鉢  
ぐらぐらと湯沸かし盆の十五日  
朝の雨秋海棠を引き立てぬ  
向日葵の林立賢治の理想郷  
奪衣婆の空耳葛の灼ける中  
和賀流の山河を飛んで蟬みぢん  
盆花の四通八達墓地区画  
終夜雨台風一歩もしりぞかず  
夕べの蟬すといふとこゑを落しけり  
木替ふ蟬第一声の強かりき  
鬼灯と見えねば横に句を添えよ（夏見舞）  
西瓜食べ先づは溜飲下げにけり  
けふよりは焦るべからず秋の蟬  
石工俳人隠居の夏を如何に詠む  
この辺にたしか魚屋片陰みち  
骨傷みしても現役古団扇  
新築の成りて晩夏の道拡ぐ  
振り放（さ）けみる人のおでこの汗の玉  
某日の寺町に遇ふ百日紅  
どの辺で引き返へさうか盆の山  
鬼やんま眼を剥きだしに恐山  
糸蜻蛉三途の川は名ばかりにて  
水灼けて三途の川と名づけらる  
太鼓橋欄干灼けて火傷せり  
台風は胸まで浸かる家の数  
水着より潮したたらせバーベキュー  
バーベキュー海水浴と欲張りぬ  
地に羽根をこすりて落蟬あな無惨  
雷鳥を鵜の目鷹の目すれど見ず  
木に縋る蟬のまたもやドジを踏む  
缶切りの貸し借りありてキャンプ場  
蟬来たれ懐ひろき櫛なり  
こばいけ草後に辞書牽き識りし草  
夏の日に葉っぱもりもりこばいけ草  
お花畑天文台へとつづく道  
ここ高地薄き空気にお花畑  
右左だう廻ろうかお花畑

お花畑リフト二つを乗り継いで  
蓼科の霧の染めたる松虫草  
霧湧いて太陽を断つ松虫草  
松虫草めそめそ霧に取り囲まれ  
雲海にワインの贅や機内食  
雲海に目蓋（まなぶた）閉づる機内窓  
雲海をとよもし航けるエンジン音  
雲海に出でて大方耳つんぼ  
雲海は雲の表や機影航く  
雲海に出づる昂奮二三分  
雨落ち来花火中止や然らずや  
ゆうゆうと飛んで蜻蛉の単葉機  
雪溪といふにはあまりに汚れ過ぎ  
雪溪の水音足下の下の方  
一日を茲にて区切る夜の蟬  
一日を総括したる夜の蟬  
その韻き切字のごとし夜の蟬  
夜の蟬も十七文字も紋切り型  
短かきを佳しとす俳諧はた蟬も  
かなぶんに飛ばれ驚く夜の寝所  
案山子どき俳句は青畝の胸借りて  
捕虫網産土の森一漁り  
訪ふ風に計られ百合の安定度  
一番木帰省の蟬の見当たらず  
見当をつけずに飛ぶは正に蟬  
凶案として如何海月の紋所  
夏の朝戸外に洩るる膳の音  
雪溪の年寄る面に塵泛かべ  
水河つるつる尻餅ついたら百年目  
夏祭女が強くて何とする  
かへり見るときには滝の威厳失せ  
不動滝名前負けして落ちにけり  
ひたすらに水恋しくて滝へ降る  
それなりの音して水涸れ不動滝  
勢ひを岩に阻まれ男滝落つ  
女滝とは柵を見ずとも判りけり  
寄り道の多き滝水女々しかり  
水涸れに空威張りして不動滝  
滝不動苔むすなまくら剣かな  
まとまりのつかぬ滝水とはなれり



飛瀑音声届かねば止めておく  
手すりの上七節蟲浴びる滝しぶき  
滝壺の喧噪のうへ滝懸かる  
落ち際はそもそも無音法の滝  
滝道に零余子並べて小商ひ  
滝壺へ瀬を替え道のつづきをり  
このツアー滝見にたっぷり時間とる  
堪能の時間まちまち滝見衆  
滝見ての戻りの道の文旦畑  
滝しぶき女はキヤーと云ったきり  
溪流のいよいよ激し滝間近  
杉の間に一閃滝の白ならむ  
塗り橋の上が恰好滝見物  
かりそめに一の糸引く女郎蜘蛛  
石筍の尻を伝ひて滴れり

● HAIKU200308sono6

大西日覚悟のほどは出来てゐる  
蝸牛そこで迷ふて何とする  
大風を捌き上手よ青芭蕉  
空蟬の背に刻めるは梵字かな  
洗面の水の滴る鼻があり  
朝蟬に準備万端八幡社  
ごきぶりを打馴れてゐて打洩らす  
緊張は藪蚊の見えてくる迄よ  
寝過ごせぬ性分蟬に起き出して  
打つ前のまだら縞蚊の凄味かな  
半島の花火とよもす遠筈  
浜木綿の纏るべくして纏る薬  
探すべき蟬穴一つ踏んでをり  
先急ぎ西日をさまる当てもなし  
君虹に氣付いてゐしや吾知れり  
底紅の横折れ始めてあるく道  
芙蓉さくここへ抜けると知りし道  
かなぶんを追ふて踏み込む八畳間  
古畳西日の所在ありありと  
あどけさに心なごめる蚊遣豚  
いかにして一ト日一ト日の暑を払はん  
ゆきずりのへくそかづらに捉はるる  
ハケ削られ赤土見する月見草  
やがてこの空き地に家建つ月見草  
変調は杞憂で済みし涼しさよ  
台風の素通りてふはなかりけり  
自転車で駅まで運ぶ帰省の荷  
ご先祖に遇ふ面持ちであらせられ(生身魂)  
子の仰ぐ茂る大樹に何が居る  
尊大の片鱗を見る子蟻螂  
子蟻螂かまつて斧を向けらるる  
汗のものともかくここへ置き申す  
水替えて金魚のこころ取り戻す  
かなぶんの行き来うるさきものの内  
芙蓉咲きいつか越えたる人の丈  
空蟬を入れる器に菓子の蓋  
蝉しぐれ埧塙の中に埋没す  
盆の挨拶妻がおもむく西林寺  
ふるさとの人を通じて盆の布施

帰省する人に持たせて鳩サブレ  
盆礼の寺の線香香の強し  
妻寺より戻るを待ちて門火焚  
蟬の音の納まるを待ち門火焚  
生身魂二駅先の町に在す(岳父)  
職退きて三年になる魂祭  
庭先の何にしようか盆の供花  
魂棚の賑やかしとて葉鶏頭  
剪りて来し盆花にまだ日の温み  
草木にしびよる風盂蘭盆会  
棟上げの槌音一氣に秋ぞ立つ  
買ひおける苧殻の束やその出番  
飲食の腹足りてさて門火焚  
黙々と供えものして盆仏  
盆仏真中の遺影は勝之丞  
盆灯籠遺影は在の産科医たり  
届けものあまた積まれて盆仏  
苧殻火の火影に浮かぶ盆の家  
盆まへの月のそぞろになつかしや  
盆近み蟬音そろそろ透いて来し  
孟蘭盆の一ト日は雨のただ中に  
盆迄に満つる月とおもひをり  
押黙り苧殻の焰明り見つめをり  
寺近き花屋に盆花賑はへり  
産科医の仏壇盆の届けもの  
仏前に供ふお盆の花と水  
茄子の他仏は水を糧とせり  
馬牛の脚の苧殻の長短  
仏壇ぢゆう盆のものもて満たしけり  
口髯の遺影は老いず魂祭  
盆の客見渡し居らる遺影とも  
目に見えぬ仏がそこに居る端居  
茄子の飯召し上がられしや盆仏  
流燈の暫く足並み揃えゆく  
萍をひっくり返す大雨欲し  
月半(なか)を過ぎて朝顔咲き止めぬ  
朝顔は種子に降る日も交ふ日々  
雨二三日朝顔の萎れ花  
タイル張り魚屋の売る地のたかべ  
盛る夏妻は地力をつけつつあり

銀行に強き妻なり日傘さし  
水くらげ群るるは湯治場然として  
里芋など盆の煮物の鍋ぐらぐら  
喰いちぎる盆の蒟蒻おお熱し  
芋殻火に降り出す雨のすまなささう  
盆札の切り餅抱え戻りけり  
盆札の茗荷散らせり味噌汁椀  
吾知らぬところで蟬のぼっくり死(じ)に  
たたみ込む暑や死神に手を貸して  
ペチュニアの長咲き梅雨はまだ明けず  
法務局支所の朝の枝払ひ  
枝払ひどうせやるなら朝のうち  
人はローン蝸牛は殻を負ひて夏  
酸橘得しされど秋刀魚は旬ならず  
鉛筆をまとめて削る夜の秋  
夜の秋赤鉛筆が見当たらず  
蚊の一句忘れぬうちよ鉛筆書き  
布袋草尻見せ今年雨無し年  
三溪の蓮見ずゐて蓮どき  
病葉は月を誘いて落ちにけり  
俯おろか櫻賢く月日経ぬ  
盆中の土穿つ雨見つめをり  
迎え火をとついとせる今日の雨  
蟬達はだうしてゐるか盆の雨  
揚菓子のは拍子抜けして秋湿り  
浜木綿やタカラジェンヌの長まつげ  
甚平の石屋の息子も停年か  
目と目遇ふ甚平同志軽会釈  
朝顔は花より種子に精出して  
墓参とて葛生に近き片田舎(栃木田沼)  
雨の日の今日の句材は金魚鉢  
大写し金魚が水に屈折して  
蜻蛉をモデルの人力飛行かな  
新宿で落ち合ひ秋の夜行バス  
夏桔梗ちよきんと剪りて一輪挿し  
携ふ迄雨粒負ふて秋海棠  
ピースからホープに替えて終戦日  
マッカサー銜え煙草の終戦日  
終戦日かけて組まるるドキュメンタリー  
新聞の隅々漁る終戦日

冷夏のうへ糠雨蟬の定番なし  
系統図編める莫迦たれ鬼貫忌  
金魚藻を食める金魚はど奴かな  
猫じゃらし水と油の雨降れり  
雨三日水澄む暇もなかりけり  
ただやたら冷えて秋雨もどきの雨  
秋の灯に詰め替えてゐる旅靴  
蝗逃ぐところを襲ひ又発たす  
茶煙の短く立てる終戦日  
孫膝にスナップショット夏の果  
うら盆や湯呑の底のうすみどり  
秋めくや妻申し込む鍼教室  
長髪の金髪にして祭の娘  
抽斗の空蟬久に日の目見し  
夏ものと秋もの入替え桐箆筒  
夏ものの端に秋もの吊りハンガー  
雨だれもはや秋雨の翳り持ち  
腕さすり百姓ならねど冷夏嫌(いや)  
映像はひえひえ冷夏の稲映す  
冷夏と猛暑どちらをとるかと云へばさあ  
川に浮く島田のどぜう草いきれ  
新しき木の実を待てる木の実かな  
打ち身ある白桃味に変わりなし  
柵の其処に目がゆき盆のもの  
華やげる老の面や女郎蜘蛛  
どぶどぶと溝川秋が近かき雨  
先頃の案山子の装(なり)のモダンなる

● HAIKU200308sono7

青田風角館発一輛車  
高原宿楓一枝の早紅葉  
岳望荘芒眼下に納めけり  
穂芒の田沢湖さバス走り抜け  
田沢湖畔またたびの実を結ぶ頃  
田沢湖のへら鮎釣も廃れけむ  
田沢湖で大方降りぬ夏帽子  
バス降りて直ぐ日傘さす女連れ  
田沢湖は青嶺の間に手窪ほど  
田沢湖を眼下にしたる反魂草  
夏帽子白黒二つ白遅れ  
黄花のそれコウゾリナとか云ふ草か  
堰の音天に訝し花サビタ  
蝉聞いてあちらこちらの湯壺かな  
湯治湯に木の葉のやうに浮きあたり  
うたせ湯に去年の木の葉が浮き上り  
湯治湯の鼻先掠め秋の蜂  
湯治湯に秋を迎ふも元気なうち  
湯治人お湯の向うのすすき見て  
蜻蛉の羽音の聞こゆ湯治棟  
挨拶を一言秋の湯治人  
秋風を聞くとなく聞き湯治湯に  
混浴の洗ひ場奔る青とかげ  
晩涼の風に蒲の穂立ちゆらぎ  
山間を雲ゆく晩夏の孫六湯  
夏山の小枝の浮ける孫六湯  
山の蜂交え露天湯賑はへり  
孫六湯山の蜻蛉は岩場好き  
虎尾草の尾となりきれぬ穂先かな  
墨染は蜻蛉の羽根の先つぼまで  
山道の腐れ木株に木の葉蝶  
混浴ののれん晩夏の肩に頒け  
混浴の慈母観音に目のやり場  
膝の上に開く句帖に秋あかね  
湯治湯の上のななかまど色づけり  
堰とどろ山に秋くること早き  
混浴の女またげる岩の蟻  
湯治宿つと山清水引き込んで  
清水湧く乳頭山の登り口

板葺の湯小屋出入り秋あかね  
人気なき湯宿の蚊遣灰白し  
混浴の入口二つ山の秋  
山宿の子の捕虫網玄関に  
混浴に夏木を愛づる夫婦もの  
穂すすきのこぞりて川原の一軒宿  
秋の蜂見て混浴の二青年  
混浴の胸まで浸り昼の月  
混浴の河原にさゆれ紅芒  
湯疲れの足を運べる独活の花  
湯治場にタールの匂ひ秋日中  
秋あかね湯治場への道先細り  
ぶなの葉の影濃く蝉音徹る森  
蝉しぐれぶなすらすらと生ふるなり  
湯治場への道端いろいろ茸かな  
沢音のぶな林徹る茸みち  
立枯れのぶなの白木秋風裡  
せせらぎのやうに蜻蛉の羽根使ふ  
湯治場のショウマの花のちまちまと  
真清水にわらびの塩抜き湯治宿  
がまづみの色づく頃の山の湯に  
混浴は熱め折々あきつくる  
混浴のずばり入る湯にあきつ来る  
山宿の令法の先の湯治棟  
鍵の字に湯治棟あり初すすき  
清水もて湯宿の冷やし西瓜かな  
山宿の湯上り令法の風の中  
穂すすきのさ揺れ湯壺ゆ洩るゝこゑ  
あかね止め虎杖の葉のひろびろと  
つくねんと車前草の道山下る  
死ぬときの来てゐる蝉のご託宣  
西日差し秋田大学ロッジの壁  
秋蝶や大釜の湯の白濁り  
大釜の足湯の日向に蜻蛉ゐる  
足湯して簀の子に止まるあきつ見る  
ななかまど色づく樹下の湯に浸り  
乳頭山曇り塩辛蜻蛉いろ  
草刈機湯宿の親爺ぶん廻し  
大曲平日の日の昼火花  
駅長の粹な計らひ花水

帰省子の手を押し当てて花氷  
田見回り羽後の横手の青田辺り  
これは佳き芒に停車在来線  
鬼灯の裏れて野辺の魂棚跡  
かうもり飛ぶ金沢ノ柵素通りに  
里山の間埋む稲田後三年  
ななかまど夜は冷え横手の送り盆  
藁舟をぐらと横手の送り盆  
かわほりが流燈誘ふ長堤  
流燈は炭火のくらす横手川  
流燈の大きく曲り横手川  
堤揺り横手の河原火花かな  
河原より戻りがてらの揚花花  
帰るさの横手の火花蔵の間  
稲不作うったふ婆の冷夏の眼  
ささげ干す婆の背まろき日向かな  
さりぎりす灯を取り損ね露天湯に  
湯の町の秋これからぞ紅芒  
藤豆をゆらし秋風起ちにけり  
青栗や谿へ下れるとば口に  
まろまると何の青実か秋近し  
谿の樹の青きまろ実も秋じみて  
滝しぶきしとどに浴びて青どんぐり  
谿覗きあれは栃の実臭木の実  
側々と秋風栃の葉ひるがへす  
殺伐の川原毛地獄に虎杖生ふ  
蟻枿を黙々のぼり黙々下る  
蟬一つ鳴かず川原毛地獄灼け  
黒揚羽おどろに川原毛地獄越ゆ  
湯治場の煙が見ゆる葦沼  
もくもくと泥湯の川原独活咲けり  
令法咲きこの山奥にキャンプ村  
うち捨てられ蛇の亡骸側溝に  
泥湯温泉山気令法を引き締むる  
鳥海山（ちよいかい）のけふの夕焼納まれ  
り  
鳥海山の夕栄ながく送り盆  
鳥海山を正面に据え門火焚  
葉煙草に羽後の西日の透りけり  
田にぼつん鳥居がありて稲荷なり

近頃のだいぶ手を抜く鳥威し  
鳥海山や穂芒赤く明けにけり  
朝月に鳥海山目覚めあたりけり  
葦沼朝月の翳落しけり  
遠嶺ほど雲置きじゅん菜採日和  
煙草咲き鳥海山に雲倚る日  
鳥海山雪溪の筋あらはな日  
反り撓ふ踊の指さき月の方  
これ又艶土蹴るときの踊足  
泥田に足入るゝやうなり踊足  
鳴く虫も鉦のやうなり西馬音内  
皆浮かれおどけ地口の踊唄  
皆踊る笛に鉦っこハギ衣裳  
又来よと帰省うながす鉦音色  
願化（がんけ）見る腰の疲れも何のその  
嬢（じよ）っこ達めかして西馬音内（にし  
もね）盆踊り  
踊る夜を嬢っこ真紅のしごき帯  
これがまあ何とも踊の下り帯  
彦三頭巾キタカサツサと踊りけり  
村の子もお手てを上げて盆踊り  
艶も艶踊る躰を回すとき  
彦三頭巾白鉢巻が夜涼呼ぶ  
一踊りおじやれ篝火盛る間を  
踊子のなまめく襟足などは見じ  
月のよな顔覗かせよ踊笠  
篝火も踊る手つきもしなやかに  
踊り手に憑きて篝の火の粉の精  
盆踊り爆笑もののエロ音頭  
櫓の上囃子地口のいかかはし  
よう踊れ西馬音内（にしもね）女ごのハギ  
衣裳  
藍染めの踊り浴衣も又見もの  
衣紋掛け踊り衣裳は末広に  
嬢（じよ）っこ等の踊り浴衣を見てたんせ  
盆踊りホームステイはお寺にも  
竹棹に踊り浴衣の風通し  
更けるまで踊れ端縫いは母ゆずり  
踊り見に二万石橋うち渡り  
篝火に踊る端縫いの衣艶に

西馬音内（にしもね）の踊の鳴物ピーロロ  
口と  
篝火にあはれ願化の節回し  
踊り手の端縫い凶柄もとりどりに  
盆踊り甚句詞（ことば）に野趣あふれ  
願化踊り甚句文言（もんげん）推し測り  
亡者踊り鼓、鉦（すりがね）打鳴らし  
これは又渋き踊の地口方  
晩涼の橋の向うの寄せ太鼓  
西馬音内（にしもね）衆踊る姿は雁の列  
亡者踊り夜半の篝掻き立てて  
踊り了え娘の見る亡者踊りかな  
願化踊り砂擦る躑音一斉に  
篝火に踊る男の太鼓腹  
撒き砂を踏みしめ亡者踊かな  
撒き砂に願化踊りの雁形舞  
音頭又願化に替り総踊り  
彼の世にも搏ちて願化の鉦鼓  
腰泳がせ亡者踊の二タ三足  
踊子の端縫い真紅のしごき帯  
亡者踊り足腰伸ばしすすつとな  
稲の出穂ことし揃はぬ盆踊り（♪揃うた揃  
うたよ踊り子揃うた）  
魂棚にカボチャの煮付け召し上がれ  
帰省して亡者踊りに更く一夜  
雁形に願化踊りの手を伸べて  
西馬音内夜更けて踊り達者が出  
踊り見て宿は雑魚寝の公民館  
西馬音内墓地を越えくる寄せ太鼓  
野趣に富む音頭出任せ盆踊り  
痴れ踊る彦三頭巾の細目穴  
ああそれそれ西馬音内（にしもね）女ご踊  
りたんせ  
願化踊り篝の薪目減りして  
雨すこし交え踊の夜の更くる  
けざやかに踊る端縫いの嬢（じよ）つこた  
ち  
ひこさ頭巾星を仰ぎて踊りけり  
願化踊り乙女黄の帯ゆらゆらと  
踊子を撮るにフラッシュ焚ける莫迦

踊り了え彦三頭巾はケイタイす  
夜は更けて音頭野趣帯ぶ盆踊り  
夜を徹し彦三頭巾の虚仮（こけ）踊り  
踊の足稻の出穂よりなほ揃うた  
見物衆踊る腰つき見てたんせ  
彦三頭巾三十盛りと踊りけり  
西馬音内（にしもね）女ご踊る雲井に雁を  
見ず  
西馬音内（にしもね）女ご踊る篝に煽られ  
て  
ゆうに六尺彦三頭巾の踊るかな  
踊り今佳境篝の薪足して  
すと立ちて踊り笛方二青年  
踊るさま御殿女中にして願化  
中背の踊り手にして帯渋味  
篝の前こごと亡者踊かな  
踊り果て編笠とりて立話  
帰るさに編笠抱え踊人  
この仕に腰据え亡者踊見ん  
篝火のいろを貰ふて踊帯  
踊子のしだるる帯は篝いろ  
夜涼呼び彦三頭巾の白鉢巻  
優（やさ）踊りこれ男にや緋の袖裏  
あどけなき帯の結び方盆踊り  
盆中の西馬音内川菱浮かばせ  
羽後牛のステーキ青嶺滴るに  
烏瓜咲くや踊の宵の口  
烏瓜開きて亡者踊の夜  
踊り果つ町筋篝なほ染めて  
一目惚れ彦三頭巾の晴れ踊  
豊年踊り地口も嬢（かが）腹万作と  
盆中の朝靄低し西馬音内  
たたなはる青田に朝靄冷夏なり  
踊り見て西馬音内去る旅靴  
二、五、八のつく日朝市西瓜どき  
またたびの青実おまけの一掴み  
朝市にミズの瘤買ふ旅の者  
朝市の足下目遣れば箒茸  
丸茄子の朝露弾く梵天丸  
水茄子の笹売り朝市たて込めり

木くらげのふはふは盆の朝市に  
朝燕踊り抜きたる町空に  
北上行ワンマンカーは青嶺縫ひ  
またたびの山前にして貯木場  
湯田高原夏萩交え薄原  
和賀川のせせらぎ徹る夏葎  
そこ発って朝露零す秋あかね  
子規の句碑すすき見ながら笹峠  
繭籠る蜘蛛の子透けて笹葉裏  
夏川のこころが熊の通り道

鮎釣ると暗き水面に影落とし  
晩涼の胸に砂寄せ砂ゆっこ  
汗だくのおでこ拭はれ砂ゆっこ  
額に汗尻に火がつき砂ゆっこ  
ながながと汗の噴くまで砂ゆっこ  
砂ゆっこ砂掛け男も玉の汗  
またたび酒漬けゐて羽後の旅名残

駅頭に吾が子見送る夏休  
峠路の句碑の錆つく夏わらび  
子規も訪ふここ峠路の秋の風  
子規ここを下りゆきしか鶉花  
薔薇苺口に運んで旅の者  
熊の出る川瀬はここや夏楊  
紅すすき湯田の町並見えながら（蝸や夕日  
の里は見えながら 子規）  
秋あかね和賀流の句碑の肩選み  
水馬一つ所にかたまらず  
夏萩や道端でする長話  
目をかっつと和賀流の里の鬼やんま  
露草の辺にて和賀流の懐古談  
蜻蛉に横を通られ立話  
めそめそとやませ吹く日の青穂波  
だしやませ吹き頷く夏の嶺一つ  
盆過ぎて交通事故に遇ふ狸  
鶉花山菜採が通ふ路  
きりぎりす奥羽山系横たへて  
湯田人の朋もてなしの鰻揚げ  
鰻揚げビールコップになみなみと  
揚げものの鰻つまめば秋の音  
和賀川の中から揚げ鰻に弾む余話  
平皿に呆と口開け揚げ鰻  
和賀川の中から揚げ鰻熱きうち  
旧交をあたためミズの辛子和え  
話し外れ戻りて朋の夏館  
ミズ涼し辛子のみ具合かな  
湯けむり上げ和賀流の里のたうもろこし  
和賀川の鮎瘦せ瀬につく頃ならむ

● HAIKU200308sono8

鏝の下旧知の顔や夏帽子  
夏帽子似合はぬと決め半世紀  
老若の顔納まりて夏帽子  
老人の齡相応の夏帽子  
夏帽子湖畔に散ってゆきにけり  
露天湯の湯壺をあきつに譲りけり  
土地人の横手の路地の送り盆  
紅すすきほどにあからみ山の湯に  
混浴の五人に秋日あけすけに  
秋出湯生國は何處齡なんぼ  
改札を出て直ぐそこに花水  
漬けし実のみな浮き上りまたたび酒  
青田刈りその刈りさまを前にして  
作務衣でゆく湯治湯に聞く秋のこゑ  
湯治場に咲くりようぶとは贅沢な  
作務衣の紐二所解き秋の湯に  
湯小屋まで茸摘まずに茸みち  
真昼間の清水響ける湯治湯  
病葉の行方追ひをり湯治湯に  
病葉の降る混浴の隅占めぬ  
清水鳴り昼はがらんとして湯宿  
湯田人の朋と小萩の辺にて遇ふ  
ともかくも蜥蜴ちよろちよろして湯宿  
紅すすき取り巻く中の日帰り湯  
芒ゆれ銀河のいろの日帰り湯  
旅先の横手の路地の門火焚  
帰省バスどこをどう来て横手に着く  
若者と四方山話帰省バス  
混浴の磐に立てる真っ裸  
板葺の湯小屋にあきつ親しみて  
箒茸先づ調理法聞き出して  
混浴のアダムがイヴに蜂指さし  
露天湯の岩すぐ乾く秋の蝶  
混浴の脱衣場あきつの入り来たる  
山の秋花に詳しき女連れ  
湯治場に秋くる空を見はるかす  
湯治場の蓼の間にも湯が湧いて  
あはてては方向音痴のぼったとなる  
混浴の蜂の来る湯に今一度

混浴の真上の大き茂みかな  
人ごとのやうに歩いて避暑地かな  
貴重品預け湯に入る山の秋  
立ち寄りて秋の湯つかふ湯治湯  
掛湯して乳白の湯をながす秋  
夏鳥海山はるばる来たる者にこそ  
混浴の闖入者あり秋口中  
朝市のささげの艶に魅入られて  
朝市の今一度見てまたたび買ふ  
朝市の艶のよければささげ買ふ  
日帰り湯芒の風に煽られて  
日帰り湯汗の身ぼちゃんと沈めけり  
晩夏はや燻りがつこに顎鳴らす  
天辺で蝉鳴きぶなの停々たり  
足湯してつくづく山の秋日かな  
一軒の道のりを来て清水の宿  
孫六の掛湯に山の秋日透き  
バス待つ間秋の日向に足湯して  
山の秋乳白にして湯の粗し  
臭木の実湯治湯近く硫黄の香  
蓴菜池ちらほら車窓の林間に  
湯治場にはたと着きたる臭木の実  
混浴の肌叩き出て清水のむ  
湯治宿前を素通り秋あかね  
箒茸ひやかしゐる間に買はれけり  
やと着く湯治場に山清水あり  
愛想よきほうの茄子買ふ朝市に  
湯巡りの話などして残暑の湯  
幾らかは葉先黄ばめり孫六湯  
蜻蛉の定宿にして孫六湯  
孫六湯前夏川の展けたり  
露天湯の裸の一人豆粒ほど  
日帰り湯清水鳴る辺で待ち合はず  
ななかまど夏から秋へ移るいろ  
ななかまど色づく途中にして湯治  
ななかまど大釜の湯は熱めなり(大釜温泉)  
山間を雲ゆく秋のはじめなり  
稲の出穂横に見ながら日帰り湯  
臭木の実なんぞ見ながら日帰り湯  
湯治棟覗き半裸の日帰り湯



露天湯の顔といふ顔秋そこはか  
混浴の女岩踏む跣の音  
混浴のひようと上がれる赤裸  
混浴のママ強かりき赤子抱き  
西馬音内ホームステイの割り西瓜  
べこ蛇の炭酸ガス好き車中に入る  
辺鄙なる場所を選んで蓴池  
池があり浮かべるものに蓴舟  
数えみて五指にも足らぬ大暑の日  
秋簾布団の上に日のかけら  
鴨の取り落とすものに啣ふ  
鴨の啄み甲斐のある芋虫  
旅先より戻りをるなり秋簾  
秋簾旅に在りしは二日まへ  
それらしき日差しとなりぬ秋簾  
まづまづの日和となれり秋簾  
いつまでも鳴く夕蟬に風が出て  
夕蟬のやかましからぬ音と聞けり  
夕蟬の鳴きぬし一つ鳴き止みぬ  
夕蟬の鳴き止めしあと独りごつ  
風通る所に身を置く夜の秋  
歳時記の表紙藍鉄夜の秋  
落蟬のまたここにも思ひかな  
かなぶんは網戸の不意打ち啖ひけり  
落蟬をヘッドライトのよぎり消ゆ  
百日紅幹若くして好々爺  
方寸の景見て死ぬる蟬ならむ  
落蟬の天空を風吹き抜けり  
耳に憑く蟬振り切つて寝落ちけり  
蟬を捕る子のためにあり八幡さま  
捕虫網蟬を大地に押さえ付け  
頭を寄す子ら一人が蟬を押さえ付け  
蟬の句を本の余白に書きつけて  
あばら家の見てのとほりの秋すだれ  
余るとてどっさり処暑の土貰ふ  
処暑にしてスローピングに筋鍛え（階段を  
使い足の筋肉の強化運動）  
手すさびに処暑のコップを拭き並べ（妻）  
声つくりままごとあそび蟻さんと  
孫美雨（みう）のひとりあそびや蟻の昼

炎帝の面目かけて暑気もたらす（ことし冷  
夏なれば）  
炎帝にも面目のあり灼けつく日々（ことし  
冷夏なれば）  
ばらばらに鳴いてけつかる処暑の蟬  
清拭の処暑の手拭い絞りけり  
あす処暑の診察予約取り直す  
風たえず通ふ空あり芙蓉咲く  
何かよき便りのあらむ芙蓉どき  
芙蓉咲き一方的なあかるさに  
芙蓉愛づあけくれ俱にお隣さん  
わが肋吹き抜けけり処暑の風  
皿洗ふうしる姿や夜の秋  
いま正に蟬の天下といふべかり  
茄子汁にすこし早めの夕餉とる  
混濁の一日なりしなすび汁  
茄子汁の味噌の香残暑の香なりけり  
佳き風の四通八達夜の秋  
夏惜しむ豆腐に絡め豆板醤（とうばんじや  
ん）  
あけつびろげの 港のヨーコ ヨコハマ  
夏（妻の名は陽子 横浜生れ）  
宇崎竜童ブギウギナイト夏惜しむ  
扇風機足方に置き妻昼寝  
扇風機あまり肋を冷やしては  
扇風機嫌ひな妻との四十年  
ことさらにことしの残暑手強かり  
旅の細部思ひ出しをり秋すだれ  
けふ鳴いて耳あたらしき法師蟬  
おのづから秋となりぬる爪楊枝  
一睡りして夕方の法師蟬  
ピザ食うて残暑なんぞにへこたれじ  
残る暑の妙にしつこく食い下がる  
ぎらぎらと日差すなかにも秋意かな  
撒水の土搏つ音も新たななる  
蜘蛛の糸金色帯びる秋意かな  
枝に差す夕日めつきり秋意帯ぶ  
一点の隈なき御空秋意かな  
古団扇の長柄飴いろ秋じみて  
振りあふぐ櫛銀杏の秋じみて

大櫛の何處といふなく秋じみて  
高低を選ばず止まる蟬となんぬ  
家々の壁てふ断面西日受く  
暮見とがめられてはもぐり込む  
夕蟬のいちだんらくや飯にせん  
玄関の灯の及びる玉すだれ  
蟬はみな残暑残暑と鳴きにけり  
盆過ぎの金魚の水を取り替えぬ  
落蟬は有為の奥山けふ越えて  
棲みつける臺ものそりと門涼み  
よき風の吹くよと臺も門涼み  
病院は軍艦に似て終戦日  
長休み終り間際の夏水仙  
ぼんぼんとけふの花火の予告あり  
ケイタイに花火撮る腕林立す  
逆さまのぺこちゃん花火失笑買ふ  
湧き起こる拍手のほどの花火なる  
花火揚ぐ湾を巡れりモノレール  
蛍光の腕輪して子の花火待つ  
砂に挿す煙草の吸殻揚花火  
砂に敷く花火筵といふがあり  
今一つ高さの欲しき花火とも  
筋ばつて花火のあとの煙玉  
花火にも音の味付ありにけり  
わが町の花火の載れる神奈川版  
提供は何某煙火工業と  
手の砂を払ひつ花火仰ぎけり  
転調の花火小暗く揚がりけり  
江戸情緒纏綿花火揚がりけり  
旅に出て居る間に雀蛤に  
蛤になれざる雀の影あそび  
指圧教室通へば雀蛤に  
目減りする年金雀蛤に  
これぼちの年金雀蛤に  
年金暮らしこの方雀蛤に  
庭を掃く朝は芙蓉の身軽さに  
眼をこすりつゝ来て芙蓉の咲くほとり  
眠たさを明けの芙蓉に霽らしけり  
寵愛は昨日のことと芙蓉閉づ  
起き立ての重たき顔に芙蓉咲く

瞬いて芙蓉の朝の真只中  
ごみ出しの日の妻颯と芙蓉過ぐ  
朝蟬のキリと一ト声爪楊枝

● HAIKU200309sono1

火星見て湯ぼてり覚ます夜の秋  
火星また一步近づく夜の秋  
夜蟬鳴き火星近づく一夜ごと  
朝蟬が一つ遠くへ鳴き移る  
朝蟬が風に埋もれて誰が忌日  
朝蟬のおいてきぼりが夢うつゝ  
朝蟬の遠さにけふの晨（あさ）の杜  
八月盡器に移す水の音  
八月盡おいてきぼりの蟬が鳴く  
一ト夏を越す風鈴の音と聞けり  
種採の朝顔として日々愛づる  
朝顔の最期の仕事種子つくる  
百日はあつという間に種子朝顔  
ビルの上晩夏の火星観察会  
夏果のよい子に火星大接近  
夜更かしの機（とき）来たりけり衣被  
空地また一つ潰され熱帯夜  
雀の稗傾ぐ夕日が穂を染めて  
山峡の稲をいぢめに山背風（やませ）くる  
アルミ銭つまみ退けおく夏の果  
芙蓉咲きいまがいちばん佳き時かも  
熟れ初むるくわりんのかなた火星見ゆ  
赤ければ火星と断ずこゑ夜涼  
半裸にて炎ゆる火星を探り当つ  
処暑のそら土器（かわらけ）いろの火星か  
な  
くわりんの上手に取るやうに火星見ゆ  
ヨウシユゴボウともかくしんどかりし夏  
白粉花真砂女亡き世の路地奥に  
第二子もおなごと知れり鳳仙花  
通学路臭木のツートンカラーかな  
蒲の穂に日焼けし腕の黒づめる  
暑に擲たれ強くして長（た）く女郎花  
土用芽の手折りたくなる薄みどり  
土用芽のあれこれ目立つを刈らねばと  
まるめるの土用芽一枝手で欠きし  
土用芽のそら白雲の溜り易し  
メモ帖に八月盡の鉛筆書き  
萍の仕掛成程斯うなのか

雀の稗忘れものして戻る道  
雌日芝に宿る天地の間の露  
人間の脛といふもの露こぼす  
百草の宿す白露の銀河系  
秋はじめ葉っぱでわかる凶鑑牽く  
同窓会イタヤカエデの明るさに  
ヅッキーニ実結ぶ蝶の肝煎りで  
木芙蓉を称えて唐の世を今に  
駆け足で雨くるアキノエノコログサ  
落蟬を目にする一つ二つ十  
落蟬を数ふ気なんぞ失す惨状  
落蟬の一つは玄関灯真下  
落蟬の足蹴にされて一、二転  
指圧教室汗かき妻を稽古台  
指圧教室海馬のごときを稽古台  
指圧教室夏バテの筋掴まれて  
指圧教室経穴（ツボ）を揉まれて夏霞  
指圧教室臥して腹這ふ夏畳  
指圧教室懸けて涼しき人体図  
汗の指圧要は余分な力抜き  
先生の指圧見倣ひ一汗かく  
秋興の指圧教室二十人  
秋興の経穴（ツボ）の名くさぐさ人体図  
秋興の合谷（ゴウコク）を先づ覚え揉む（上  
肢のツボ）  
夏果の洗ひざらしの身に指圧  
竜淵に潜む肩井（ケンセイ）指圧して（肩  
のツボ）  
秋興の指圧正座に難儀せり  
盆過ぎのよろけ橋影ながれけり  
露天湯より見る夏草の穂のすがれ  
送り盆水に映りて灯がながれ  
彦三頭巾ぬつとかむれる踊りかな  
路地をゆく蹻音つぶさに夜の秋  
紅すすきさ揺れ湯治湯熱めなり  
秋興の湯壺に適ふ人の数  
とどこほることなく吹きて蒲の風  
湯治湯の山深ければ葛の花  
秋興の眉ひるげたる野天風呂  
湯治湯の芒すぐれて長けにけり

山菜の塩抜きしをり山清水  
蔓物蔭なければ草蔭に  
胡椒の香家に新涼徹りけり  
軒を打つ風出でにけり夜の秋  
道なべて舗装されても雀の稗  
舗道なほほてりをるなり雄日芝に  
雀の稗手折り難くて夕日中  
農道のほとりひよろりと野蒜の花  
生ひ茂るなかに雀の稗の道  
都会にも野辺の径ありナルコビエ  
つつきゆく雀の稗とナルコビエ  
蝉止まる所に拘る太郎杉  
馬並みに玉蜀黍を食ふやから  
豆腐一丁あれば御の字冷やし酒  
撒水を打つに疎ならず密ならず  
夏満月妻のうながす処に佇ち  
草の名の知らざるは無き女人の秋  
草の名の候補があがる野辺の秋  
これ蓼と妻にお株を奪はれぬ  
葛あらし葛の横腹見せにけり  
妄想の夏の火星に火星人  
焼酎は薩摩で飲んであれ以来  
サイダーに想ひ出す景葉山沖  
サイダーに腹たふたと鳴る寂寞  
夕顔の一つ咲くのみ後続かず  
昨日見し火星を寝物語の処暑  
火星大接近妙なる夕顔に  
カーテンを膨らます風やがて秋  
火取虫火を取る夏も終りけり  
茄子汁や妻のきりもり三十年  
棚咲きのゴーヤーの花は咲かすのみ  
灸花妻の速歩に追ひつけず  
晩蟬のときどき手抜きしたりけり  
アロハシャツ色地味にして柄派手や  
何にでも被せるラップ西瓜にも  
寄りかかる妻ゐてなにかと助かる夏  
醤油瓶昔磨けりブラシの花  
冷房を使はぬ妻に今や馴れ  
一丁の豆腐があれば暑氣払  
昼餉また冷素麺に異存なし

晩夏はや煮詰め過ぎたる豆腐汁  
氷解け薄まる麦茶なまぬるし  
水水メロン振りかく目分量  
蝸牛日陰求めて退散す  
割り勘の計算蓴菜横目にして  
熊蟬が朝から納豆粘り出す  
蟬しぐれ胸の創口ありありと  
殻負へる蝸牛より倅せに  
ふうせんかづら一つも手抜きなかりけり  
割り勘の暑氣払なら吾も乗れる  
口癖の何かと云へば盆のあと  
泡盛に時間稼ぎをしてゐたる  
寝ころびてけふといふなく夏逝かす  
風船かづら揺らしに風のあつまり来  
人の目を盗んで咲けり悪なすび  
金魚の死母には伏して言はずおく  
めうが掘る数の目当ては特になく  
藺にあらずこれは太藺のがらつぱち  
蠅虎即晝斎のかみつき貌  
犬枇杷の名を牽くまでもなき凶鑑  
玉すだれ成果一つも得られず過ぐ  
玉すだれ裸叩いてゐる男  
くすりゆび奇麗な人や野蒜見て  
見てくれと甘味は別の青ぶどう  
面食らふ夏も終りのこの陽気  
端居してみな遠のけるものばかり  
莫迦げたる蟬の一徹通しけり  
晩涼の水鳴る腹を訝しげ  
あめんぼうそこらの塵と違ふ莫し  
えらかりし夏と見返る痩せ肋  
遅れ咲き月をまたがる百日紅  
萍の水栽培を厨にて  
気づかひの梅干茶漬忝なし  
月末の忘れし頃に大暑かな  
盆踊りホームステイの村起し  
金魚一匹命に定めありにけり  
海鞘食はぬ夏なり考え見れば  
夜の秋の百物語読み季と  
冷夏てふ巡り合はせに瘦せふくべ  
石燈籠打ちて常磐木落葉かな

風よりも蝉ひるがへる翌檜  
あけくれの蝉音日毎に遠くなる  
朝蝉の日毎に薄れはかな言（ごと）  
夏萩や地べたを伝ひ風起てり  
幹といふ幹に烈日夏逝ける  
湯治場のとば口に湧く山清水  
帰るさに今一度（ひとたび）の芒原  
畳職人雨に目を遣り秋燕  
夏川に白濤の立つ野天風呂  
敗荷にも風格天つ日遍しや  
山峡の青田漠々山背風吹く  
杳として知れぬ作柄山背風ふく  
見馴れたる木から晩蝉転げ落つ  
悪役の山背風が峡田吹きわたり  
鼻先をかすめる風や古団扇  
八月盡つまめる梨の口当り  
訃報聞く梨の皮剥く音のなか  
蝸牛蝉と並んで雨後の樹に  
空蝉に昨日の雨水遣りけり  
指圧して晩夏の背筋伸ばしけり  
篠懸の木の実は無数の智慧もつごと  
数珠玉を採りて化仏の薬壺にせむ  
晩節や蝉同色の樹を選りて  
油蝉一列縦隊直なる樹  
晩年やそそり立つもの好む蝉  
鐵色の幹に埋もれ一晚蝉  
晩蝉の離れ大柀暮れしめぬ  
春なれや雀鳥の名の付く草

● HAIKU200309sono2

喪服着て稲の色づく葛生線  
喪服より黒き晩夏の舗道踏み  
会葬の人に眺きゆくしじみ蝶  
書家にして露の世あとにせられけり  
ひらがなのやうに世を横し逝かれけり  
ひらがなのおもひ露けく書家逝けり  
長身の書家逝きアキノキリン草  
草茂る郷に葬り葬られ  
天が下灼けゐる墓誌に余白あり  
これはこれは喪服にぶつかるバツタ殿  
古里のはたはたみんな祖（おや）の貌  
喪へ参ずこれで幾たび野辺の秋  
父と喪へ参ずあの日も灼けをりし  
はらからと喪服を灼かる炎天下  
こんなにも灼けゐる墓石父の郷  
供華枯れて八月の墓茫とあり  
墓地の草しみじみ引きてをりひとり  
畳みかく喪服の裾のいのこづち  
喪服着て見渡す稲田一色に  
扇風機悼みの風を送るなり  
夏葎人を葬ることに馴れ  
はらからと寝て虫の音を聞く朝  
秋海棠思ひ至るは相田サク  
懐かしくサクがあるなり夏座敷  
島田家の溝萩常のいろ湛え  
骨壺は溝萩盛る家を出で  
西日中葬るに人馴れやすく  
葬りて西日切り裂く中にあり  
朝顔の紫紺葬りをきのふとす  
夏掛は目覚めし指に懐しく  
骨壺に葛生の青嶺見せ過ぐる  
埃立つダンブ街道たうもろこし  
案山子守る田ならばちいと遠慮せよ  
暮るゝ田をなほも見守り案山子翁  
茂る山杉の板東十七番寺（出流観音満願寺）  
出流山（いずるさん）一足早く水の秋  
ししうどの花の曇れる出流山  
赤仁王律義晩夏のお山守り  
出流山岩清水湧く蕎麦処

山清水鯉は晩夏の光沢得て  
竹幹に真清水韻く満願寺  
杉の直竹幹の直鳴る清水  
蝉しぐれ寄進杉苗拾萬本  
高欄にががんぼ板東十七番  
沢沿ひにのぼり満山秋海棠  
懸崖に滝行の滝とよもせり  
藤蔓が岩盤這へり滝不動  
亭々と沢ぐるみ滝見下ろせり  
ががんぼのぶらさがりをり滝不動  
滝水のとどろに大徳出づる寺  
またたびを仰ぎつ掃ける修業僧  
三手先龍色無き風に頭（こうべ）延べ（大  
御堂作り）  
晩涼の頭を延べ軒の三手先龍  
やぶめうが丈なす中に講中碑  
水引草の繁茂参道閉鎖中  
やぶめうが滝道はこの奥の奥  
昼餉とる遺跡近くの蕎麦処（星野遺跡）  
この丘の木の実が主食縄文人  
復元石器鈍く光れる晩夏かな  
星野遺跡青栗転がる径のさき  
赤紫蘇畑縄文人の棲みし丘  
蕎麦咲いて縄文石器出づる畑  
どの石も三角じみて蕎麦畑  
蕎麦咲ける畑の石の鏃めく  
山道に落ちゐて小さき青山栗  
新涼の地層断面火山灰軽石  
栗林石器の丘の一隅占め  
山畑の里芋晩夏の翳もてり  
名にし負ふ石の大谷の蝉しぐれ（大谷観音）  
岩煙草大谷石窟雨傷み  
坑内灯どこまで降りる地底の涼  
採石の洞にて巨きな冷蔵庫  
鳥肌立つ地底採石跡晩夏  
大谷石佛秋寂ぶ唇に紅さして  
蔦紅葉し初め大谷の石の山  
秋晴れの平和観音鼻大き  
坑内出て眼鏡の曇る真炎天  
露の観音千手といふも四十二手

札所寺大谷観音初紅葉  
大谷観音雨に秋づく赤仁王  
地底採石天井高く滴れり  
秋そこに横臥屈葬人骨に  
大谷寺見学文集露けかり  
赤仁王眼剥き齒を剥き残暑裡に  
姿川渡り野州の野辺の秋  
宇都宮餃子屋賑はふ秋灯  
会葬の帰途の浅草カーニバル  
冷房車冷えきりし顔涼しむ顔  
手をこすりみな耐えてをる冷房車  
ビル新涼東京に出て目を睜る  
ずぼらな日々東京に出て二科を観る  
遠くを見るゴリラに園の晩夏かな  
夏休英語案内の山手線  
晩夏光みんな函下げ秋葉原  
秋づくと上野の山を歩きけり  
上野の山歩くこれみな秋の人  
美術の秋上野の山のまろきこと  
美術の秋吾もぶらつく上野山  
館出で上野の噴水展観す  
ダンボール敷きて涼しむ風太郎  
噴水に涼しむ上野の風太郎  
風太郎涼しむ上野の山のかげ  
風太郎寝莫産拈ぐる緑陰に  
風太郎緑陰頷ち上野山  
夏落葉ラジオ体操ひろばかな  
歩く涼しさ吾も一日風太郎  
歩く涼しさ憩ふ涼しさ上野山  
もみづる樹下大道芸の下準備  
鳩鴉上野の秋を愉しむや  
篠懸の緑陰好きで風太郎  
初もみぢ馬に跨る親王に（小松宮彰仁親王  
銅像）  
東照宮晩夏色濃く銅燈籠  
偉丈夫な鉄之介句碑蟻攀ずる  
世話人のことし逝けるや句碑の秋（杉本寛）  
緑陰に茶屋ここかしこ上野山  
上野山精養軒の蝉しぐれ  
穴稻荷鳥居もみぢを誘ひけり

蓮見たくなりて上野の池之端  
稻荷坂そこを下りれば蓮池  
石段を五段のぼれば萩すだれ  
動物園出口出づれば蓮の風  
蓮風に当たりうたた寝風太郎  
風太郎蓮をほとりの寝法案  
上野に出てそのまゝ直行蓮の池  
上野山かにかく下りて蓮の池  
日差し避け蓮を写すパステル画  
蓮描く使ひ込みたるパステルに  
蓮池の上に白亜の精養軒  
検校碑ふぐ供養塚蓮の香に  
くさぐさの碑の中スッポン感謝之塔  
蓮の香に本を読みをり池之端  
黒髪のをとめ並んで蓮写す  
蓮写す鉛筆書きも愉しげに  
蓮写す会話もずんと弾みぬて  
軽き疲れ覚ゆ蓮池経巡りて  
蓮葉の擦れ合ふ音も晩夏かな  
東天紅蓮葉の白びらびらす  
蓮池に泥けむりあげガバと鯉  
上野すずしく終に扇子を使はざり  
蓮風に背押され巡る池之端  
紅蓮嘗て上野に戦あり  
紅蓮戦のありし上野山  
紅蓮上野の山の負け戦  
蓮の実の飛ぶに間のある上野山  
蓮の実の青き実弾抜きて見す  
こなたよりあなたへ渡る蓮の風  
スッポンの供養碑蓮の香の中に  
穴稻荷詣で序での蓮見かな  
極楽鳥花岩崎邸の玄関に  
岩崎邸百合も進取の香り立ち  
夏館岩崎邸の撞球室  
岩崎邸木斛の実のあかがね色  
木斛の実に風通る岩崎邸  
岩崎邸青芝目を射るサンルーム  
岩崎邸扇ぐ扇子もたをやかに  
蝉を聞く岩崎邸のベランダに  
夏果のがらんと広き上野駅

ホーム見て扇子あふいで上野駅  
建前の柱に蝉も招ばれけり  
青柿やかみなり親爺の齢になり  
検針のこんどは瓦斯や日の盛り  
初秋の室内映る玻璃戸かな  
はつあきの麦酒一口余す妻  
はつあきの老眼すすむ眼鏡の度  
遠ざかる火星の今や秋の星  
東京より疲れて戻る夏の暮  
またかかり一度は懲りし夏の風邪  
人参の蒂の新芽の水栽培  
夏夕べ腹にもたれる大学芋  
八月の擦り傷の跡ほの白し  
八月も二十九日の残暑かな  
引き返すあたり文月の草の闇  
ひとり見る文月の月の昇り際  
病葉をひたと水面（みおもて）受け止めて  
すれ違ふ妻は歯医者へ夏の暮  
思ひ切り捨てて悔いなし夏の果  
東京に出る用ありて夏畢る  
吹き荒れし風も納まり芙蓉閉づ  
回り込み蝉捕り坊主樹のうしろ  
皿に萍厨に妻の箱庭あり  
亭々と晩夏を送るホルトの木  
泥の木の揉まれどうしの晩夏なり  
八月の洗ひざらしの身に指圧  
終戦日ジャンボ餃子屋ガード下  
餃子食ぶ溽暑の口を度めり  
新橋の柳通りの夏柳  
篠懸の大人（たいじん）然として晩夏  
夏鴉がらんがらんの東京に  
植物通ミズの瘤漬け知らざりき  
夏風邪の神経さはる後頭部  
ハトバスの明るく秋をはこぶいろ  
蝉しぐれ抜け来て外来内科B  
外来のみな冷房に浸りづめ  
胡瓜もみ晩夏の口を尖らせて  
法師蝉風の如くに去り来たり  
腹這ひて犬腹冷やす秋の土

つくつくし健康保健証携えて  
楠亭々蝉捕り坊主まだ来ぬ森  
法師蝉あらしのごとく孫去りて  
かなかなのあと艶消しの油蝉  
清音に徹しきりたり法師蝉  
歩くなら坂本あたり法師蝉  
かぶされる南大門に残る蝉  
建前はきのふのことよ法師蝉  
金魚の死はらからの死に続きけり  
また金魚一つ死なしてしまひけり



● HAIKU200309sono3

墨汁に蟬は勁き音張りにけり  
硯海に塵一つ無き蟬の昼  
啼く蟬のただならぬ時過ぎゐたり  
暗合なき落蟬の死をあはれめり  
その羽音てつきり蟬と思ひけり  
百日紅皮の剥落続きをり  
殊に菊庭の草木に朝の水  
虫の音と一寸聞けり秋の蟬  
風の間にもそれもたまさか秋の蟬  
空耳と思ふに離離と秋の蟬  
啼き方もまた死に方も蟬愚直  
蟬氣儘に啼いて迎える転落死  
栗おこわ勝手に食べて叱られぬ  
栗おこわその他の栗は茹でにけり  
栗おこわこれは実家の分といふ  
栗おこわ持つて実家へ妻いそいそ  
よう来たと土産に持たさる栗ずっしり  
云ふならば初老夫婦の夕涼み  
実習の指圧のいろは秋の昼  
なまり節喉につかえて眼を白黒  
新涼の柳手といふ指圧法  
ひぐらしにどつと啼かれて聞きゐるのみ  
夏痩せて妻の指圧の稽古台  
怠けゐる晩夏の肩に指圧効く  
指圧にて軽くなる肩夏の果  
指圧して躰ばらばらの夜長  
積み上げし本何時崩る震災日  
茹で栗の当らぬ栗がちと多し  
茹で栗の当りばかりと言う訳には  
副作用ありて薬に懲りし夏  
わがままの度は弁えて初秋刀魚  
寝酒などもともとやらぬ夜の秋  
指圧して手足軽々しき晩夏  
妻一寸居らねば何處ぞと夏の暮  
手が空いて一寸退屈夏の暮  
水打ちは母の愉しみ任せきり  
扇風機横向いて夏去りにけり  
秋灯にかざして眼鏡の球(たま)に瑕  
足鍛ふウォーキングの秋来たりけり

ぼやくこと夏無き國へ行きたしと  
句集出すことも伸び伸びいわし雲  
誕生日金魚だらりの帯ゆらと  
秋近き灯の艶蕎麦の実かりんとう  
鳴焼のわが家の味は極甘め  
映像に今は名ばかり震災日  
震災日妻は町内防災員  
懷中電灯枕辺に置く震災日  
夏葎掃出窓の高さほど  
網戸より夏枯れの庭見渡す日々  
夏掛の薄手が頼りなき夜明  
おっとりとして過ごしてゐては羽抜鳥  
四季咲きの菊と云はれて五本買ふ  
草の名はそこそこ虫の名はぜんぜん  
朔日や虫喰い菊も荅持ち  
茗荷汁気兼ねなき友いつか減り  
又聞きの余話残すのみ震災日  
夜や秋のウイスキーボンボン噛み砕く  
ありありと暮れて蟬能く蒐めし樹  
葬一ツきのふに済ませ茗荷汁  
目もさやに秋は来にけり牛蒡の葉  
鳩吹く風日付の判る時計買ふ  
やはらかきものがお土産蕎麦饅頭  
夜や秋の妻の戸締り念入りに  
新聞を朝日に戻し震災日  
孫も目をばちくり鳩を吹きやれば  
夏秋を通して飲めり冷麦茶  
りんどうと云へばお釜の末広がり  
文庫(ふみくら)の裏山菊芋咲き出して  
摘んで来し山の菊芋一輪挿し  
菊芋の丈なす山の道辿り  
菊芋に対す山気は空に充ち  
露草を震はせ手折る山の朝  
萩と露色のつり合ひとれてをり  
仏花にでもするらむ婆の青花摘む  
地に降りて人に動じぬ秋の鳶  
前山に残暑色濃くのこりけり  
秋すでに少し朱ヶ帯ぶ藪からし  
少しづゝ山は色づく榎の実  
揚羽にも朝の羽ばたきありにけり

蒲の穂や一山の景正しけり  
山萩の地味であつて且つ和むいろ  
足許に蟬の落ちぬる朝の山  
女郎蜘蛛朝は黄金に張れる糸  
蜘蛛の囀もあさみどり帯ぶ芦の間に  
芦に張る蜘蛛の囀の糸ありありと  
蟻の他動くものなき晨の山  
山草の高さに懸かる蜘蛛の囀も  
幾何学を篤と学びし蜘蛛ならむ  
鬼やんま往来白き埃道  
山の朝雑木の間に蜻蛉飛ぶ  
人温に敏き虻くる山の朝  
鉛筆でむかご落として一つとや  
車前草の穂も遅しく夏送る  
椎の実のここだく山は秋迎え  
鬼やんま棲みつく山に露降りて  
露葎より翔つ蝶の翅重し  
草の葉を揺らしゆくものががんばなり  
山門前蟬のトンネル並木かな  
青花の青を称えて佛さま  
青花摘むことも一つの仏ごと  
青花を摘むや初老の仏ごと  
法師蟬ぐうんと高き杜櫛  
打水やあつさ葉月にずれ込みて  
なまる身にすっかりせよと氷水  
高澤家長男にして墓洗ふ  
花数の少し淋しき墓参かな  
はらからの葬儀を兼ねて墓参かな  
関伽桶の水鳴る一人の墓参かな  
線香の付け火に手を焼く墓参かな  
指をもて戒名なぞる墓参かな  
遠縁の墓石二つも洗ひけり  
墓洗ふ向う滴る唐沢山  
ありたけの器並べて水遊び  
蓮田に潜む少年ぎんやんま  
道央に車前草の生ふ道ゆけり  
青花見に鉄砲玉となりし朝  
どことなく山は色づき榎の実  
少しづゝ噉の色貫ひ榎の実  
つつましく熟れて二夕色榎の実

山攀づる蟻に交通渋滞なし  
赤土は掘り易くして蟻の穴  
秋草を摘み来て凶鑑と首つぴき  
秋草と一つ括りに云はる草  
秋草を厨廁に頒ち活け  
吾にとり新種の秋の草摘めり  
菊芋の朝の項(うなじ)に強日射  
青草を摘むとき露が手に当り  
草叢に深く手を入れ青花摘む  
夏果の廁彩どる庭の花  
活け込みて卓秋めかす山の草  
顔にくる今朝のあつさや会葬日  
藪蘭のうすぼんやりと朝曇  
やっかいな紫外線避け白日傘  
一、二掻き躰に送る団扇風  
活け込みて卓上秋の野辺とせり  
七草と云はず秋草摘みにけり  
トカトンと秋も始めの家造り  
夏見舞妻に一枚吾に二枚  
板の間に射せる秋日に鎖すカーテン  
秋草の色は黄と藍二分せり  
キツネノボタンその実みどりの金平糖  
読む記事のみな些事ばかり秋暑なる  
水上げの今確かなるキリン草  
草叢をごそつかせぬしは蟋蟀  
草叢を飛び出し蟋蟀足許へ  
指圧爽やか突手柳手拍打叩打  
雌日芝の黄昏るるまで囁めごと  
新涼の膝さすり待つバーガー店  
雷夕立関東大気不安定

● HAIKU200310sonoi

穂芒を手折り馴れたる手つき見せ  
穂芒の穂に適ふ葉の撓ひかな  
穂芒の穂に適ふ葉の葉数かな  
穂芒の穂を解く雅ごころかな  
穂芒の高さにうんと頷けり  
穂芒の葉先まで見て葉の捩れ  
一夜経て黄金いろなる芒の穂  
穂芒の容佳ければ振り返る  
穂芒の風受け流し受け流し  
穂芒の末路思はず風吹けり  
川魚の突如跳ねたり芒叢  
穂芒の葉擦れの径を川下モへ  
穂芒の一輪挿しに適ふ花器  
初鵙のこゑゆき渡る杜ありき  
広がれる鯰の水輪のゆき着く岸  
目測の鯰の体長水澄めり  
つぶらなるなんきんはぜの実好日や  
葉は空きてなんきんはぜの木実のここたく  
無聊とて秋はかまけるもの多く  
困の央に押し出しのよき女郎蜘蛛  
消息の途絶えがちなり蓑虫に  
茄子汁ぐらぐら味噌の香ふうとして  
石菫蓄む空気ひしひし締めり来ぬ  
やや寒の鳥ごゑ聞いて起き出せり  
Tシャツを首からすっぽりそぞろ寒  
新聞を鳴らして読める今朝の秋  
初鵙の賑はひ路地に持込めり  
喧し屋初鵙近所に現はれぬ  
初鵙の喋々来意告げてをり  
うらぶるゝ花を退け菊の季（とき）  
起てば鳴る六十路の膝小僧露けしや  
心臓のお菓六粒露けしや  
手に通す肌着やや寒いよいよや  
木犀の香の源を確かむる  
鵙のくる一劃青空見えてをり  
蟪蛄にちよっかい出して暇つぶし  
月光に翳とし佇てる曼珠沙華  
塗箸の文様眺め秋灯下  
秋冷の徳利の胴を掴み注ぐ

七節虫のとある渡りを見とがめられ  
死人花薬は変じてむらさきに  
お十夜の月へ暦をめぐりけり  
お十夜の月の半ばとなりけり  
仙崖の拙き月のなぐり描き  
秋冷は六十余歳の脛のぼり  
尻別の川秋迎え八目漁  
両岸もいつかもみづり八目漁  
見当のつくこゑばかり秋簾  
黄昏を暫し俱にし女郎蜘蛛  
秋冷のさし込む膝を二夕さすり  
厚き手でさする秋冷何處よりぞ  
氣前よく剥く洋梨の角張りぬ  
女郎花日はつらつらと西を指し  
前後しててんでこ舞のしじみ蝶  
蝶捕るにさうは問屋が卸さぬと  
しじみ蝶捕らむとすれば擦り抜けて  
秋日受く額幾分膩じみ  
まともに日浴みてくわりんの実のおでこ  
木瓜の実に訊くまでもなき日和かな  
女郎蜘蛛獲物銜えて網重り  
土蜘蛛の獲物判らずじまひなる  
黒揚羽手離す茎が揺れてをり  
秋蝶の腹が重りて草撓む  
秋風の木椅子にチリ入ハンバーガー  
車前草の穂の擦り切れし浜辺径  
蔓荔枝葉萎えて老残晒しをり  
先代は町医でありし金木屋  
花了ふ萩一色深き小紫  
ジョギングコースのころを見て走り込む  
木瓜の実の一つとてつもなく大き  
くわりんの実子息親爺に似て来たり  
しじみ蝶二つに殖えし瞬く間  
まんじゅさげ萎えて消炭いろの薬  
ほうぼうにピストルの音運動会  
大方は子息の代や金木屋  
くわりんの実ことしは五ツほどばかり  
コップに水充たし音秋澄めり  
指圧教室畳広らに秋気充つ  
揚げコロッケ油噴きあて秋澄めり

さすり出す赤子のおくび秋日和  
秋日和辞書ザングリと机に割られ  
あやす嬰は地藏の重さ豊の秋  
公園の木犀痴呆進みをり  
たそがれてふうせんかづら赤銅いろ  
一つ葉に空蟬二つ肩並べ  
小心の秋の雀も餌貰ひに  
雀あぐ秋の小さな土埃  
彼岸花話題にのぼる夕餉の座  
月光に色を奪られてまんじゅさげ  
手にとりて豊平の初氷  
金星に一人対へば家並更け  
曼珠沙華いろを飛ばして餓鬼草子  
残墨に頭つ石火矢の曼珠沙華

● HAIKU200310sono2

旅立ちや朝寒の息弾ませて  
高山へ馳すや雑木の初もみぢ  
幸先のよき旅立ちやすき晴れ  
高台に日当る村やむかご採  
秋祭ある高山へ一目散  
ぶだう村透きて盆地の強日射  
立ちあがる秋草磧の強日射  
長堤稲田遠ちまで敷き詰めて  
甲斐駒ヶ岳（かいこま）のこれが横貌すつ  
かり秋  
素通れり稲掛日和の盆地かな  
八ヶ岳ミニチュア版の稲ぼつち  
手始めに山の頂きもみずれり  
秋祭掏摸に注意の呼び掛けも  
秋日のからくり人形布袋の頭  
布袋からくり神髓見する秋祭  
布袋台金冷まじき機関樋  
布袋台その鼻先に新松子  
秋日に金欄屋台曳き据えられ  
天高くからくり繰れる布袋台  
高山の屋台曳かれてカタコトと  
高山の屋台提灯連ね来る  
宵闇に仙人台の泛き上り  
屋台提灯ゆらゆら布引橋通る  
御所車予備を設ふ屋台倉  
布袋台覗けばからくりあやつり衆  
からくり出て秋高山の例大祭  
布袋台金欄色なき風が吹き  
からくり奉納注ぐ秋日に手をかざし  
金秋のからくり人形囃子かな  
からくりの布袋のむらさきうすごろも  
宵祭提灯支度の大正台  
旅人の襟掻き合はず宵祭  
下三之町の宵闇屋台来る  
屋台囃子ひよろろひよろろと家並の間  
暗闇の深きに屋台の曳き別れ  
屋台提灯遅々と高山宵祭  
路地をくる屋台提灯火の恋し  
練り屋台炭火の明るさ宵祭

宵祭屋台の端（はな）は神樂台  
澄む空を金欄屋台押し移る  
匠の技屋台に生きて秋祭  
高山の宵闇屋台の目白押し  
宵祭屋台上段囃せる子  
屋台の上星の出てゐる宵祭  
目も綾に辻の屋台の曳き廻し  
練り屋台見んと夜寒の辻に佇つ  
高山の夜も澄む空に祭笛  
高山の夜空の深く練り屋台  
星空ゆく提灯屋台を夢うつつ  
下一之町屋台提灯見えて来ぬ  
屋台組曳き別れ唄身に入むや  
台上に樂人囃す神樂台  
五百提灯屋台の後後から  
揺られ来る十（とを）の屋台に満つる月  
宵祭屋台ふちどる百提灯  
先導の屋台の縦長・丸提灯  
曳き別れ前に屋台の勢揃ひ  
屋台曳かるさん法被姿かな  
曳き屋台提灯揺られ子も揺られ  
高山の辻に屋台の灯が更けて  
近づけり次の屋台の提灯が  
四つ車二つ車の曳き屋台  
ぐわらぐわらと二つ車の大八台  
星空に聳えわけても鳳凰台  
高山に思ひ知らさる月夜寒  
赤蕪の高山に来て夜寒の辻  
高山の闇曳き残し屋台去る  
百提灯明し屋台を聳えしむ  
屋台組曳き別れ唄台上より  
高山の月を歩ませ練り屋台  
宵祭屋台明りの江名子川  
秋の夜の屋台提灯曳き別れ  
高山の東（ひんがし）に泊つ夜長かな  
まなうらに屋台泛かべて宿夜長  
秋興の晴れの屋台の曳き揃え  
御所車金具さやかに大八台  
栗材の台輪屋台秋日差す  
官司さま馬でばかばか御神幸（ごじんこう）

秋空へ打って子供の鬪鶏樂  
打ち晴らす祭の大太神樂(だいだいかぐら)  
かな  
年行司色なき風を巻き過ぎて  
八幡町氏子に獅子の齒を鳴らし  
御神幸一文字笠キツと締め  
屋台の上数えて五人女の子  
高山祭見物衆の赤い羽根  
御神幸暫し憩ひの寺の堂  
御神幸しようごい隆と押立てて(しようご  
いは柳替わりの樹木)  
御旅所に大太神樂うち据えて  
御旅所は江名子川辺の水ほとり  
神主の白緒の草履御旅所に  
月上げて家並高山祭了ゆ  
山寄りに町は造られ朴もみぢ  
朴黄葉高山城は茲に朽つ  
高山に忍び寄る秋本丸より  
本丸の赤松の反り冷まじや  
本丸に屋台囃子の届きをり  
楓(かえるで)の片枝紅葉を本丸に  
本丸や楓(かえるで)片枝紅葉して  
本丸に佇てば高山秋霞  
二の丸へ下りる途中の枒もみぢ  
高山の民家迫れり黄葉山  
花すすき小耳に挟む寺縁起  
花すすき小耳に挟む寺縁起  
色なき風お堂も終に寂れけり  
露けくも日枝神社の竹箒  
秋寂びの大杉堂の空展く  
色鳥の目も覚めやらぬ御神域  
雑木紅葉始まる日枝神社裏  
自然薯黄葉城山の径明るうす  
穂芒に幾たびとなく道草して  
冷まじやまんじゅさげ色奪はれて  
落栗の里を歩いて赤のまま  
一位の実色濃に日枝中学校  
秋寒や日枝神社の杉の秀見て  
秋寂びて日枝神社の杉のそら  
黄葉して日枝神社の石の段(きだ)

初もみぢ日枝神社の楓の先  
片へに犬蓼片へに寺の築地堀  
どんぐりを片手に本丸目指す徑  
がまずみや城山の径何處へ下る  
高山の護国神社の栗小粒  
栗の毬踏みて脇道より登る  
黄葉して護国神社の幼稚園  
棗の実想ひにいろいろあるやうに  
高山の町見ゆ狭霧の厠窓  
朝顔の種零しをり鍼灸院  
寺々に一位がありて色鳥来  
初紅葉あな恥ずかしの天照寺  
素玄寺の芒丈なす荒法師  
寺々は山を背にして一位の実  
銅葺きに桜落葉の秋葉さま  
高山の水に劣らず空澄みて  
一位の実ふふみて空の澄む一日  
大鯉を覗いてころ澄みゆく日  
冷まじき水音立てて山の鯉  
水澄める宗猷寺町たもとほり  
宗猷寺萩は盛りを過ぎあたり  
色鳥は山から来たり宗猷寺  
鐘樓の石垣錆びて昼の虫  
秋うらら山辺の寺の一位垣(洞雲院)  
遠来を寺の紫苑にねぎらわれ  
寺々の紫苑・芒に丈越され  
辻々に秋の日を浴み秋葉さま  
一叢の芒も寺の風趣にて  
秋霞町見渡せる鐘樓門  
江名子川水音棗に響かせて  
江名子川石樋渡す水の秋  
川べりに棗ここたく鉄砲町  
円光寺鳥も差し置く一位の実  
棗喰ふ鳥がバタバタ飛び立てり  
棗指しことし実の付き悪きとか  
朝市の地べたを覚ます鷹の爪  
朝市の熊笹・蓬の健康茶  
朝市の赤蕪人を集めをり  
朝市の味見くさぐさ漬物類  
朝市の飛弾の赤蕪家苞に

一人泊つ長夜に飛弾の味噌せんべい  
日枝神社霧らふ横手に中学校  
祭去る下一之町霧籠めに  
秋葉さま雑木は紅葉し初めけり  
頬締まる飛弾の朝寒驚けり  
出格子に飛弾の朝顔蔓這はせ  
棗の木青実ここだく製麵所  
秋祭きのふに過ぎし朱ケの橋  
祭済む朱ケの欄干露しとど  
欄干に結べる露に驚けり  
高山は水より明ける橋の秋  
明けの鯉橋を潜れる水の秋  
十六夜の月に一位を聳えしめ  
高山と云へば眼を透く一位の実  
秋冷の飛弾の笹蕎麦喉とほり  
せきれい翔ぶ羽根白背黒きはやかに  
春慶塗箸買ふ旅の空澄む日  
色変えぬ松や高山旧役場  
旅先の飛弾に酌めるや薦豆腐  
郁子弾け朝の高山裏通り  
飛弾人に棗の砂糖煮手ほどき受く  
首ひねる聖観菩薩冷まじや（飛弾国府・清  
峯寺）  
うそ寒の頬つりあがる円空佛  
円空佛拝観名簿露けて  
稲刈の済む鶴巢村七十軒  
冷まじく千手突き出す円空佛  
露けくも千手観音是一體  
眼は睡り田仕舞いどきの円空佛  
観音の千手は劍冷まじや  
円空佛村の刈田を見下ろしに  
円空堂佛三體昼の虫  
坂がかり円空堂へ嫁菜みち  
力草円空佛見に寄らむ  
穂芒も赤銅いろに円空佛  
葛の蔓円空佛も逞しく  
桐の実の生る頃訪へり円空堂  
飛弾国府峽田刈ったり刈らなんだり  
昼の虫四疊ばかりの円空堂  
秋収め村人の守る円空佛

秋うらら後部座席の弾むこと  
稲掛けが遠くの山を見てゐたる  
稲架の向きさうかこつちが南向き  
空稲架はあたかも牛の四つん這ひ  
四つん這ひ稲架は胴長牛に似て  
村人の明るさこそは檀の実  
円空佛さやけし飛弾に五百体  
一位の実円空佛の堂ほとり  
鶴巢村刈田越しなる円空堂  
赤のまま円空堂に通ず徑  
まんじゅさげ遅咲きの村円空守る  
秋晴れの杉山負へり円空堂  
円空の千手かんのんさん秋寒  
真昼間の虫の音細し円空堂  
スクーターとばす農道刈田晴れ  
道教はる円空堂の土露けし  
円空堂鉄錠外す音露けし  
村貫く農道二本刈田中  
踏切のコスモス揺らし高山線  
山門にスズメバチの巢林昌寺  
コスモスの咲く辺踏切のほほんど  
稲刈機唸るここより古川町  
地獄絵の女人蒼白秋の風  
くさぐさの地獄秋日差す中に  
冷まじや地獄絵仕置の白女體  
古川の鯉の色差す秋の水  
赤錆の棗も交じる川辺の木  
秋灯古川温泉赤濁湯  
壺之町式之町参之町長夜  
秋冷の鯉を放てる橋の町  
鯉一転秋水を遡るあり  
ささげ干す秋日は既に傾けり  
ろうそく作り白冷まじき親爺の手  
絵ろうそく顔料の丹の冷まじき  
一人酌む酒は蓬萊宿夜長  
醸造元真ん前の川澄みにけり  
蔵元の壁に秋蝶影落とし  
酒林秋陰帯びて下りけり  
屋台倉漆喰秋気帯びゐたり  
和ろうそく作り細々秋灯

冷まじや笥大の和ろうそく  
流されては鯉遡る秋の川  
水澄めるなり回遊の鯉に瑕  
流れくる草に飛びつく秋鯉も  
鯉放つ町川巡り秋うらら  
赤松の秋の日暮れの真宗寺  
秋簾五枚連ねて真宗寺  
飛弾の秋山門匠の技たしか  
古川の秋川に向く屋台倉  
秋葉さま隣に秋の屋台倉  
川沿ひに町を歩けり水の秋  
古川の町貫きて川澄めり  
耕耘機刈田ほじくり返しをり  
水勢に逆らひのぼる秋の鯉  
川あれば澄む水のあり棗の木  
とんび鳴く他は刈田の広がる村  
めまとひのとんでもなきにぶつかれる  
段（きだ）のぼる気多若宮の秋の蝶  
古川の秋の蜂守る総鎮守  
栗の毬からから乾く社頭かな  
気多若宮水舎に櫛落葉かな  
気多若宮爽気抜ける林間に  
気多若宮一人憩へば秋気充つ  
秋蝶の舞ふのみ気多の総鎮守  
上気多の段々畑の稲の株  
徒組は割喰う旅や刈田村  
祭待つ茶房にキツネメイクの男（狐火祭）  
きつね火祭山の端に出づ月に暈  
鼻に白粉ちよいとキツネのメイクかな  
月を翔ぶ白雲狐火祭くる  
行列の狐のあねさんかぶりかな  
狐火祭篝ひよろひよろ焚きにけり  
狐火祭篝火蔵壁こがしけり  
狐火祭花嫁花婿迎えけり  
きつね火まつり提灯ゆらゆらゆら来  
スカイライン閉鎖黄葉を絞る風  
いのこずち取りて乗鞍バスの尻  
乗鞍の霧に突っ込むバスの尻  
這松も霧に這ひつくばる峠  
みやうみやうと霧の乗鞍スカイライン

亜高山帯のもみぢの色はと見て  
乗鞍の霧を糧としさるをがせ  
乗鞍の紅葉如何と登りつめ  
一本の紅葉磐の高みかな  
マドンナの瞳の一湖秋山より  
空宙にうすき翳もつ花すすき  
五通りのカエデ黄葉が乗鞍に  
乗鞍のことし色悪しななかも  
乗鞍の黄葉にスリップ下り路  
水飲むはルリボシトンボか牛溜池  
落葉の中踏み当つ走り根の撓み  
米母の慥然に舞へる樺黄葉  
熊笹は大き音立て秋の雨  
どんぐり掌に乗鞍高原徘徊す  
雨音を伴ひ落花樺黄葉  
枳黄葉打つ雨音に包まれし  
黄落の木々乗鞍の雨襲ふ  
阿弥陀光桂黄葉の押し照るは  
乗鞍の雨伴ひて落葉風  
乗鞍の雨来て黄葉素っ飛びり  
オオシラビソ霧を払ひて溶岩池  
日雀来て大日岳の霧霽らす  
サワグルミ黄葉の径を唯下山  
水飲むをルリボシヤンマとしておかう  
一瀑の白迸るななかも  
霧の牧白樺の布置宜しかり  
白樺黄葉燦と散りては近む牧  
木道に人に蜻蛉の寄り易し  
乗鞍の雨に零れし青どんぐり  
休憩台憩ふ人なく照黄葉  
乗鞍へ一路くねくね樺黄葉  
コスモスのばらりばらりと乗鞍晴れ  
乗鞍の磐も黄落せんとせり  
乗鞍の霧とトウヒのかくれんぼ  
秋麗ら眼にせる白樺一本目  
ひとりでに唄が出てくる花すすき  
乗鞍の秋磧より林道より  
ドライブインこんなところに初紅葉  
コスモスの唯一色の薄明り  
山化粧う気配見せたり湖向う



白樺のほとりをながれ水澄めり  
木道より木道を見てもみずる沼  
まゆみの実見よと促す人もなく  
経巡れる鴨は蜻蛉をみることに莫し  
黄葉して湖の向うの白樺林  
人を止め人を行かしめ秋の湖（あざみ沼）  
乗鞍の黄葉見とれて腰こかず  
きつね雨水榎黄葉強烈に  
日照雨避く桂黄葉の大樹下に  
雨来れば身を細め佇つ黄葉樹下  
水榎の実ならむうしろに今落つは  
水榎の実の落つなかに休憩す  
木道を一人歩める秋の音  
山の雨追ひくるごとし黄葉狩  
黄葉して実生の水榎日照雨受く  
山の雨遅れて零す蔦紅葉  
降られたり降られなんだり黄葉狩  
桂散るそれを横目になぞへ徑  
十月の日照雨音立て落葉樹  
ぎしぎしもみずる景の一部分  
露天湯の落葉一枚掬ひけり  
露天湯の落葉つまみて横たはる  
露天湯に憩ふ秋日のためき腹  
大磐が目隠し露天湯ヤチダモ散る  
白樺に対す露天湯落葉風  
白樺に宿木秋も深む牧  
岩の窪くさぐさ黄葉溜めみたり  
大磐の落葉滑落寸前よ  
沢風に吹かれて黄葉ごころかな  
もみぢ山おいでおいでと道があり  
白樺に白雲正しく空澄めり  
反魂草山荘の道折れるとき  
黄葉降る露天湯一人使ひけり  
ハルニレ散る湯壺の広さ二人分  
白樺の黄落納むフラインダー  
白樺の落葉掴むに千手欲し  
どんぐりの三つめここで止めとくか  
林道も日暮れもみぢの色となる  
林道を曲りし途端飛瀑音  
一人湯に浸りて狐ごころかな

白樺と白樺の間火山弾  
白樺の風幾通り空澄む牧  
乗鞍の空刺す水榎もみぢかな  
露天湯に落葉と泛きて今一人  
キャンプ場その奥にある山澄めり  
蜻蛉が止り湯元の湯槽の上  
湯けむりが芒白めて立ちのぼり  
せせらぎの湯とや黄葉の散り込む湯  
赤もみぢ黄もみぢとことん愉しめり  
湯ざましにあるく秋草昏るる徑  
乗鞍の嫁菜一色濃きとおもふ  
榎の木沢もとより水榎黄葉して  
湯元の辺穂の真つ黒な猫じゃらし  
わが隙を狙いてさすがいのこずち  
民宿の玄関でとるいのこずち  
十五夜を過ぎ泊つ宿はヒュッテ星  
マウンテンサイクリングや牧の秋  
牧場まで身を透く水榎黄葉みち  
遊歩道入口此処やななかまで  
岳樺・シラビソの守る秋の沼  
黄葉山谷間漂ふ霧も黄に（上高地乗鞍林道）  
黄落の泡の湯で乗る五人組  
番傘を持って送迎黄葉宿  
山の湯にわが身透くらむ黄葉どき  
もみずるに一役買つて山の霧  
溪流音ここ高らかに栃黄葉  
川風に霧に吹かれて栃黄葉  
バス何處を馳すや黄葉の山ん中  
奥飛弾の磧大人し水の秋  
嫁菜咲きここ山道の待避箇所  
山化粧うわけても櫛の猩々緋  
内に秘む恥じらひに似て山化粧う  
上高地ビジターセンター木々の秋  
梓川けふの朝寒紛れなし  
梓川ケシヨウヤナギの落葉踏む  
山化粧うケシヨウヤナギも化粧して  
大正初期植ゑしカラマツ黄落期  
サワグルミ端正な葉のみみぢれり  
先づ洒落た葉なりハルニレ黄葉とよ  
霧好きは一位に如かず針葉樹

カンボクの熟れ実は鳥に美味からず  
嘉門次小屋其処たもとほる檀の実  
上高地帝国ホテル樅の秋  
黄落の傘とりどりに大正池  
池巡り黄葉明りの雨合羽  
黄落の雨の跳ね見ゆ木道に  
大正池雨にもめげず浮塵子飛ぶ  
黄葉明り差し込む大正池巡り  
秋の雨大正池の砂礫打つ  
梓川ケシヨウヤナギも黄葉して  
木道に雨の落葉松落葉かな  
岐れ路過ぎ岐れ路黄葉林  
鴛鴦は木杭に乗り梓川  
梓川黄葉ときをり巻き込みて  
対岸は黄葉明りの梓川  
雨来ても川濁りなき黄落期  
梓川冷雨に紺碧奪られずに  
梓川木橋に黄葉明りして  
秋冷の川三筋より一筋に  
梓川秋の清流一文字  
梓川清流合す処に鴨  
カレンダーグラビア版の黄葉とも  
黄葉して柳せり出す梓川  
川の色晴れて黄葉の梓川  
雨つ風黄葉舞はせて梓川  
まゆみの実清流此処は流れ疾く  
上流になほ上流のあり黄落  
対岸の秋やコメツガ群落見ゆ  
シナノザサ秋水音もなく流る  
もみずれるカラマツ群落対岸に  
まゆみの実清流一縷遠回し  
散りもみぢ人の歩かぬ方歩く  
林道のここは柵の葉絨毯道  
黄落のどの道ゆくも上高地  
まゆみの実清流片寄る梓川  
柳散る雨上るとも上らずとも  
梓川雄のマガモによく栄えて  
落葉松の黄葉群落針の雨  
河童橋水澄む辺りうろつけり  
オシドリがゐる増水の梓川

見納めの落葉松黄葉上高地  
かさつける黄葉退ければ山椒魚  
黄葉打つ雨バラバラがバラバラに  
熊笹に一雨ありし山の色  
霧らふなかどれがどれやら摩利支天岳（ま  
りしてん）  
ケシヨウヤナギ落葉巻き込み梓川  
木道の終端黄落振り返り  
梓川ヤナギもみぢの散り込む瀨  
清流は曲ってみえなくなり秋風  
清流に佇む人に散る柳  
清流を目がけ散り込む樺黄葉  
清流はなほ下るなり黄葉谿  
安房峠まだら模様化粧う山  
うち過ぎる車田の村豊の秋  
大木の桂黄葉に湧く出湯  
雨のどんぐり踏んで転けてはなるまいぞ  
一物下げ男現はる出湯の秋  
臍下の一物隠す出湯の秋  
湯を出づる男気ぜはし散る黄葉  
ががんぼの身を透きて飛ぶ黄落に  
ぞうぞうと肩冷ゆ露天湯の戻り  
隧道を出でて平湯の紅葉山  
トンネルの一つ向うは飛弾の秋  
濃尾バス尻を振り振りもみぢ山  
鳴り過ぎる風鈴外し遅れけり  
頷いて鉄風鈴の仕舞ひどき  
はや十月動きの鈍き金魚かな  
帰宅せる顔を金魚に見上げられ  
広すぎる鉢に金魚の遺さるる  
只一尾金魚の泛ける朝の鉢  
菊を剪る切口ほのと白きかな  
街に出る厚着着始めうら恥ずかし  
霜降の水面蹴破りては真鯉  
掩体（えんたい）に蝙蝠巣くふ終戦日

● HAIKU200310sono3

向うから人一人来る石路の径  
朗々と石路咲く径を礁まで  
陸離る帰燕の空は鳶のそら  
崎々の鳶に送られ帰燕あり  
石路の咲く段丘のぼる径探す  
鮎並でありし覗かせ貰ふ魚籠  
根釣人こつちの礁遠礁  
根釣して葉山の鳶に啼かれる  
石路咲かせゐる鳶のこゑ裏返り  
御車寄せ石路咲く径を愛でながら  
ほぐれ出す石路の口許指さして  
褒貶は成り行き任せ石路の花  
石路綻ぶその数好日とや云はん  
生垣は高楨色鳥うち沈め  
投げ合へる漁師言葉も秋の暮  
三崎より戻る電車の秋灯  
穂芒に声在りとせば御空より  
ゑのころに芒声掛く高みより  
来し方を人には告げず枯尾花  
鯨の海右手に海岸廻りのバス  
コンビニにおでんの幡や秋の風  
葉山産白子に手酌すすみけり  
秋潮の寄せて直ぐ引く潮あかり  
ひたひたと葉山昏れ出す秋の潮  
葉の間になんきんはぜの実紛らはし  
鳶の笛風よろけて崎の秋  
御用邸巡查眺むる秋の海  
色変えぬ松を連ねて御用邸  
連痕の岩牡蠣洗ふ秋の潮  
石路の辺にぼつと交番御用邸  
秋潮の文目押す浜虚蟹  
秋潮の曳き残したる砂の綾  
引くときに石ころを捲く秋の浪  
石路の黄を刷きて夕栄岩礁に  
女郎蜘蛛見てより深む日色とも  
小鳥来る葉山に生れし美術館  
昔風電線の景秋の暮（山口蓬春記念館）  
あかがねの雨樋秋の蓬春邸  
ココヤシも葉山海岸漂着物

天皇の御下賜標本錆海星  
浜木綿に押し照る秋の海一日  
一色の礁三々五々の秋  
散策の日差しもぽかと石路日和  
つはぶきは砂地を好む御用邸  
つはぶきに波音砕けゐる庭先  
つはぶきにこころ和んで潮見亭  
黒松に色も適ひぬしじみ蝶  
御用邸塀の内より赤とんぼ  
秋日和芝生に海の日差し載り  
黒松の径下りゆく石路日和  
口中に茶渋の残る石路日和  
里山の鳶や秋潮暮れしむる  
目が遭ひてごうなの転ける潮溜り  
朝市の飾り南瓜を見下ろしに  
黄葉どき皮膚完爾と硫黄泉  
乗鞍の黄葉嵐を湯壺に聞く  
呆と湯に浸り平湯の枒黄葉  
シラビソに乗鞍の秋読み取りし  
黄葉打ち山駆け抜ける日照雨かな  
乗鞍の黄葉あらしと云ふに遭ふ  
高山の辻より戻る夜寒道  
岳風に飛び散る黄葉心地よげ  
梓川黄葉散り込む早瀬かな  
朝市に先づは出でんと棗路地  
川筋に黄葉ぶぶきの上高地  
ここ平湯峯の粧ひ八方に  
岳風の黄葉飛ばすにちからづく  
がまずみに乗鞍の空展けつゝ  
一位の実拝観客に薄目して  
草渋のにほひ抜けずよ夜寒の湯  
喪ごころや樹翳を深く一位の実  
高山のまつりはきのふ市の立つ  
旅人の吾にむらがる秋の鯉  
高山の秋に遊んで薦豆腐  
黄落の川波うらら上高地  
木の実降るこの径ならば安からん  
夜長宿手酌地酒の蓬菜に  
高山の秋雨零す市の空  
この沢の散りどき迅き深落葉

鴟の寺辞せばまたある秋葉さま  
日比谷公園ガーデニングショウ  
公園の秋トピアリーコンテスト  
サフラン買ふ客筋それとなく見をり  
サフラン買ふひとはとみれば老婦人  
サフランの球選る手許明るかり  
菊花展重ね公園満百歳  
街頭売りサフランを買ふ五六球  
大気澄む思ひサフラン買うてより  
サフランの球売り空気も売ることし  
テイの秋ブルーベリー入黒糖に  
園芸市斑入りつはぶき店頭に  
秋空にジラフ仕立てのトピアリー  
菊花展有機たい肥の販売も  
サフランの一球おまけ弾むこゑ  
フィアンセに菊束捧ぐトピアリー  
鈴懸黄葉風にざわつく公会堂  
風蘭と云ふもバイオの世のすさび  
人の手に為る富貴蘭とぞ聞ける  
石指して作庭の弁秋うらら  
トピアリー秋のイルカのジャンピング  
園芸市ワインハウスも出店して  
秋風に帆船仕立てのトピアリー  
アキニレのもみづる日比谷公会堂  
拝観の順路利発な茶の荅  
点り初めさざんか垣まで届かぬ燈  
そこらの物引つ掛け出づるそぞろ寒  
そぞろ寒捨つべき上着なほ着古し  
先づ四羽映して鍋鶴飛来報  
まだ寒くないと云ふ妻齡の差  
吾云へば妻云ふそぞろ寒のこと  
かうなつて仕舞へばさざんか散る他ない  
冷気にも気迷ひのありさざんか垣  
石路の花他力頼めと云ふ教え  
医師の云ふ風邪軽んぜずさざんか冷  
さざんかの開いて花の底を見す  
卓上に球根サフラン咲かせんか  
穴惑ことし貴兄に遇はざりし  
芒の呆け辺りに移り猫じやらし  
鶏頭の青空目指す気養生

気養生斑入り薄を殖やすかな  
けふもイっ斑入り薄を殖やす庭  
二年目の斑入り薄の嵩手にす  
日雀来て其処動かれぬ玻璃の内  
敗荷の三溪園をいつ訪はん  
距たれる鶏頭この墓地入り易し  
豊かさや菊に肥料の有ることも  
真つ直ぐと見上ぐる幹に秋風吹く  
冬隣器に水盛り水栽培  
一仕事して一斉に蓄む菊  
かざしみる眼鏡に汚れ菊日和  
一団の黒の礼服石路日和  
菊剪つて脇芽の出づる日曜日  
好日の風にめかして女郎蜘蛛  
去年の冬做ひことしも水栽培  
草叢を騒がしめるはバツタかな  
みる程に石路をうち敷く屋敷なり  
けふ冷えてさざんか垣の壁なせり  
石路に体操などして運動不足の身  
ご近所に遠慮して焚く落葉焚  
家内に落葉焚く香のいつか満ち  
炊き立ての飯にまぶして紫蘇の実漬  
花八つ手一つ身震ひして離る  
菊活けて菊の葉屑を屑籠に  
鉢飼ひの秋の金魚にけふ寄らず  
卓上を山河と思ひ花すすき  
冬隣砂糖の味の棗漬  
堰くものに紅葉一枚はけの水  
うそ寒し体温計を脇挟み  
やおら起つ右が軸足そぞろ寒  
序幕めく辺りの景や赤とんぼ  
序幕からとんぼが飛んで村芝居  
生きあせり無くもがなとも花八つ手  
色鳥の連呼遠のく大廂  
煮魚の夕餉どの家冬隣  
紫蘇漬の紫蘇の粒噛む一人酒  
紫蘇漬の粒噛み当つる秋のこゑ  
椅子の脚一つ浮き立つ秋の暮  
いてふ散るお宮詣りの足許に  
真つ暗な夜道に戻る紅葉冷え

足許に踏むは木の葉か夜寒道  
舗装路の点々として夜の黄葉  
秋雷のさあらぬていに鳴り出せる  
秋雷の果てはザとくる雨の快  
秋雷のやつと見せたる雨の筋

● HAIKU200310sono4

なほ容とどむ朽木に蝸牛  
街路樹のくろがね齧に雨の鴟  
啼き合うて姿見せたる雨の鴟  
秋草を食卓に活け愛づ生活(たつき)  
肌寒や雨の青どんぐりを見て  
豁然と錦木展く雨の景  
錦木のくれなゐ深めゆく雨か  
擦過音身ほとりに殖え秋深む  
一雨に木の葉躍りて深む秋  
横切れる声したたかに雨の鴟  
雨の鴟隣へ移る諍ひごゑ  
雄叫びを見境もなく雨の鴟  
ゑのこ草雨に明るさ失はず  
朝外出の耳にひっ憑く雨の鴟  
どんぐりを机上に愛づる雨一日  
枝付の櫛の実愛づる朝の卓  
秋晴れのヒバを降りくる猫の爪  
サフランを空気に咲かせ卓の皿  
麵麴屑の衣より零るる秋の昼  
秋晴れにアオダモと云ふバットの木  
晩節や一本立の石露の辺に  
螻蛄鳴くやかへすがへすも生きあせり  
日を上上げて又月上げて石露の花  
野菊活け浄机に遠き吾が机  
池の鴨首をふるふる初紅葉  
孫の手を擦り抜け飛べるしじみ蝶  
自転車で遠乗りをして鯨の海  
釣具店並び立つ間鯨の海  
自転車二つ抜きつ抜かれつ鯨の海  
自転車で行き着く果は鯨の海  
猪垣の丘をなだるるトタン板  
椽の実のここぞと降れる村役場  
変哲の無き日続けり山椒の実  
街中に川は残りて鱈跳べり  
おじやして一息つける雨の昼  
おじやして雨冷えの腹落ち着かず  
秋風に釣れてひらひら海たなご  
魚籠に躍る平目の腹に秋の風  
鍋鶴の飛来をお天気コーナーで

へり発進鯨寄る海を眼下にし  
草叢にラジオ寝かせて根釣人  
蝦蛄網を秋日に晒し蝦蛄採船  
秋晴れにリヤカー放置小漁港  
水揚場だっぴろきに草の花  
息切れのする坂どんぐり拾ひては  
猶行けば視界展けて鯨の海  
根釣人脳梗塞のことぼつと  
突堤にリハビリ兼ねて根釣人  
突堤に半日ねばる根釣人  
根釣して動かぬ竿と人の影  
根釣人帰りがてらに声掛けて  
根釣人帰り支度の函一つ  
新松子掠めて飛べるヘリコプター  
あきらめの眼色湛え根釣人  
ここ迄と三角波立つ鯨の海  
波発すひかり乱れて鯨の海  
鯨釣れずなりて漣ぐもりかな  
根釣人波のうねりを日が見て  
朔風や松原抜けて鯨の海  
柏楨の茂み宿りの雨の鴟  
中継ぎに吾が家の一樹雨の鴟  
雨の鴟暫し宿りの楨一樹  
様子見の開き加減や雨の菊  
秋冷のまだ跳ね止まぬ雨水輪  
その生活(たつき)手に取るやうに秋燈  
立て直す家の二階の秋燈  
こんなこと似合はざれども懐手  
風の日は湯が愉しくて冬隣  
レタス噛むバリパリ感も冬隣  
吾が好み云へば大正いろの菊  
花折々菊を最後に荒む庭  
秋の雷どすんと荷物おろすごと  
椎の実に足を滑らせまじと沢  
菊花展日和と家を後にせり  
出逢はぬ笹山椒魚は夜行性  
木犀や同窓会に出向く道  
酒うまし同期のいろは紅葉かな  
龍淵に潜む風情の同期生  
同期生柿の明るさもて集ふ

木犀も記憶も薄るるばかりにて  
齒切れよく鴟が切り裂く朝の景  
所在無き雨日を汝も女郎蜘蛛  
蜘蛛の囀に白露燦々陽が昇る  
朔日の菊の葉を打つ雨ひそと  
菊の葉を打つ程の雨佳かりけり  
菊の葉にびちびち雨はいつ上がる  
敗荷に風のつれなくなりけり  
敗荷の顔向けならぬ体(てい)にしよげ  
敗荷に敗荷吹かれぶちあたる  
青蓮の器量の程も斯くなりて  
敗荷の無頼たること尚止めず  
敗荷の全うせるものここに見き  
敗荷に懸かる日輪宙ぶらりん  
絶滅の河原野菊に日のつぶら  
厚物の菊も白頭菊花展  
腕前に調度の適ふ盆栽菊  
盆栽菊調度の鉢も凝りに凝る  
脇道を敢えて選べば落葉騒  
髪も衣もそれとはなしに落葉臭  
人ごゑを二十重に睡蓮黄葉して  
芒生ふ駅前仮バスターミナル  
棗の辺雨湿りして裏木戸も  
朝顔の変種や諸との掛け合はせ  
櫛もみぢ潜り神社は正面より  
櫛もみぢひねもす吹かれふらふらに  
七五三前に社に鳩追ふ子  
吹き折れし櫛一枝黄葉して  
鎌倉に吹き込む風や秋の鶯  
秋燕河を狭めて何とする  
八つ手越し植物園の道聞けり  
偽アカシア黄葉降る日の麵麴焼けた  
蓮の実の日向うんともすんともや  
傾ける銀河系模し懸崖菊  
懸崖菊花に遅速の多々あるを  
菊作り菊師潜ます技小技  
とつつきに人たむろせる懸崖菊  
敗荷にたぶらかされてゐることし  
日時計は落葉に埋もれ時刻む  
睡蓮に昼咲きあれば夜咲きも

雑木紅葉する中桜の名ある木も  
秋晴れて人歩かする北鎌倉  
停年や斑入り芒も斯く殖えて  
生垣の斑入り芒に月昇る  
ダイヤモンドヘッドとか云ふ仏桑華  
極楽鳥花(ストレッチャ)まだ色ささぬ写  
生帖  
温室の玻璃に頬寄せ房バナナ  
サルビア咲く植物園のど真ん中  
サルビアに停年昨日のごと過ぎし  
サルビアにおもふダンテの煉獄編  
公園の昼餉やサルビア遠目にし  
背の辺り発止と擲てるや落葉風  
落葉風髪を颯るも甘んじて  
鶴のごと宙に首伸べ秋の薔薇  
突き進む我が脇抜けて落葉風  
植物園廁奔りて猶落葉  
コスモス園秋蝶ならずともはしゃぐ  
コスモスの項(うなじ)を見する柔き風  
コスモスの三色(みいろ)相和す園の径  
コスモスを泳がす風の弧を描き  
コスモスと向かひ向かひに車椅子  
コスモスを吹き過ぐ風を追へる風  
貧乏のよろし忘れ蓼の花  
破れ蓮の一切合切はつきりす  
敗荷に極まるけふの空の紺  
敗荷を前にし憩ふ烏龍茶  
水破る音のみしりと蓮の奥  
その奥より見つめゐるもの破蓮  
千振を手にして買はず温泉客  
釣糸を呑み込んだまゝ鯨の海  
石ころを除けるが如く蜚蝶  
団栗やダウン症の子のよく働く  
菊月のおだやかな日を送りけり  
気に懸かるところメモして夜長月  
秋風に句帖といふは持たざるよ  
棗透く夕日の中に顔容れて  
メモ書きを頼りの道順鴟日和  
黄ばむ程空おだやかにくわりんの実  
長月の昼どきラジオ筒抜けに

やや寒の鯉に寄られて城下町  
うそ寒の鳥の奇声を聞く朝  
腹蔵なき敗荷となり天が下  
櫛の実のいつかは落ちる枝の先  
空風の古本市に突っ立てる  
ユリの木黄葉過ぐとき自転車加速して  
図書館へ雨のユリの木落葉踏み  
ユリの木黄葉早も溶け込む街景色  
吾が街にユリの木黄葉馴染む頃  
町並はモダンにユリの木黄葉して  
夕栄に溶け込むユリの木遠黄葉  
十月の下旬並みの莫迦陽気  
秋日和返却ついでに借りる本  
桜もみぢ苔を纏ひて腐つ幹  
妙好の念が届いて自然薯居士  
江之島の活辯天か早椿



● HAIKU200311sono1

冬隣東京湾上雲一つ  
泊船の一つ緑に冬灯  
鴨鍋にはしゃぐ女のおおざつば  
朝食をしっかりと食べる紅葉宿  
物申す鴨は単刀直入に  
見通せるほどに庭空け冬珊瑚  
セーター脱ぎ捨つる気温が上昇して  
冬菊はうすむらさきに雲も又  
おだやかに日はおだやかに冬菊に  
梢見て風推し量る生姜湯  
風荒む日の熱湯に生姜湯  
安穩に馴らされゆく身石露の花  
大型本紙芝居借る十二月（孫に）  
狐木の葉をお金に化かす紙芝居  
蜜柑まだ酸きものと手を控えをり  
惜しげなく剪るや千両殖えし庭  
冬菊に西に廻りし日が載りて  
冬菊に西の方より日が差して  
椅子に坐し妻何読むや冬始め  
寄せ植えの多肉植物冬に入る  
花ちよんと多肉植物十二月  
花八つ手忘れぬ裡に用を足す  
身の芯を冷やす身不知柿ふみけり  
チンゲン菜油を飛ばす冬は来ぬ  
週末のユリの木黄葉散り空きて  
木の葉泛く町川を鯉遡る  
庭飾る出番来にけり冬珊瑚  
男にも二、三在りけり冬支度  
鴨鋭声石露に衰え見ゆる日ぞ  
さしあたり冬の常着を出す筆筒  
簡潔な語法がホ句と鴨啼けり  
剪り惜しむ冬菊なれば丈長く  
冬菊剪る辺りがいやに空きにけり  
惜しみつゝ苗より植えし菊を剪る  
出不精の庭に目を遣る石露日和  
秋場所の向う正面とはいわずこ  
一手二手千手繰り出し突相撲  
聖樹の種証（あか）せば発光ダイオード  
振り替えの控え隠しに十二月

冬菊に果てなしの雨夜明けても  
送金を了へたる安堵石露を前  
冬菊の白を慕ひて虫の寄る  
雨暗に冬菊の白泛きあがる  
冬菊の日暮れ経しこと忘れをり  
眼差しのやっぱり其処へ冬の菊  
冬菊の黄なるを少し侮れり  
冬菊の上にこころはいつも在り  
菊もまたそれを待ちをり冬の雨  
冬菊に目を遣る朝また朝  
心して塵に染まらぬ鷹の爪  
けふ厚着して好々爺たる思ひ  
雉子蛤に手を挟いてゐるばかり  
龍の玉一時に万事滞る  
山茶花の崩る暗がり身ほとりに  
柎の花咲く前かそれとも後  
柎の花期知る雨となりにけり  
サフランの花の馬鹿馬鹿しさに惚れ  
冬菊に侍てばすぐ来る夕べかな  
冬菊にかうでもないと句を敲（たた）く  
敗荷の打ちのめさるゝ姿かな  
来し方を煎じ詰めれば木天蓼酒  
試飲の顔大きくゆがめまたたび酒  
木天蓼酒熟成の味問はれても  
木天蓼のそれぞれの貌液抜かれ  
空つ風玻璃打ち鳴らすローマピザ  
判りやすく天気図解説しても寒し  
手始めに入れて暖房試運転  
喜んでピザ生地を伸（の）す十二月  
十月の妻に所望のナポリピザ  
シーサイド・マリーナ聖樹の辺のデイト  
うろ覚えの聖歌ミッシェンスクール出  
冬珊瑚植えたは植えたで情湧きぬ  
漁れる鯉の一句を吟味して  
冬菊をいとほしむ眼を誰もせり